

50
319

50-319
1200501263767

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 5 m 1 2 3 4

始



和漢藥研究所
編
村越三千男

圖解

藥用植物と其用途

附病氣の容態並手當法

東京 玉井清文堂



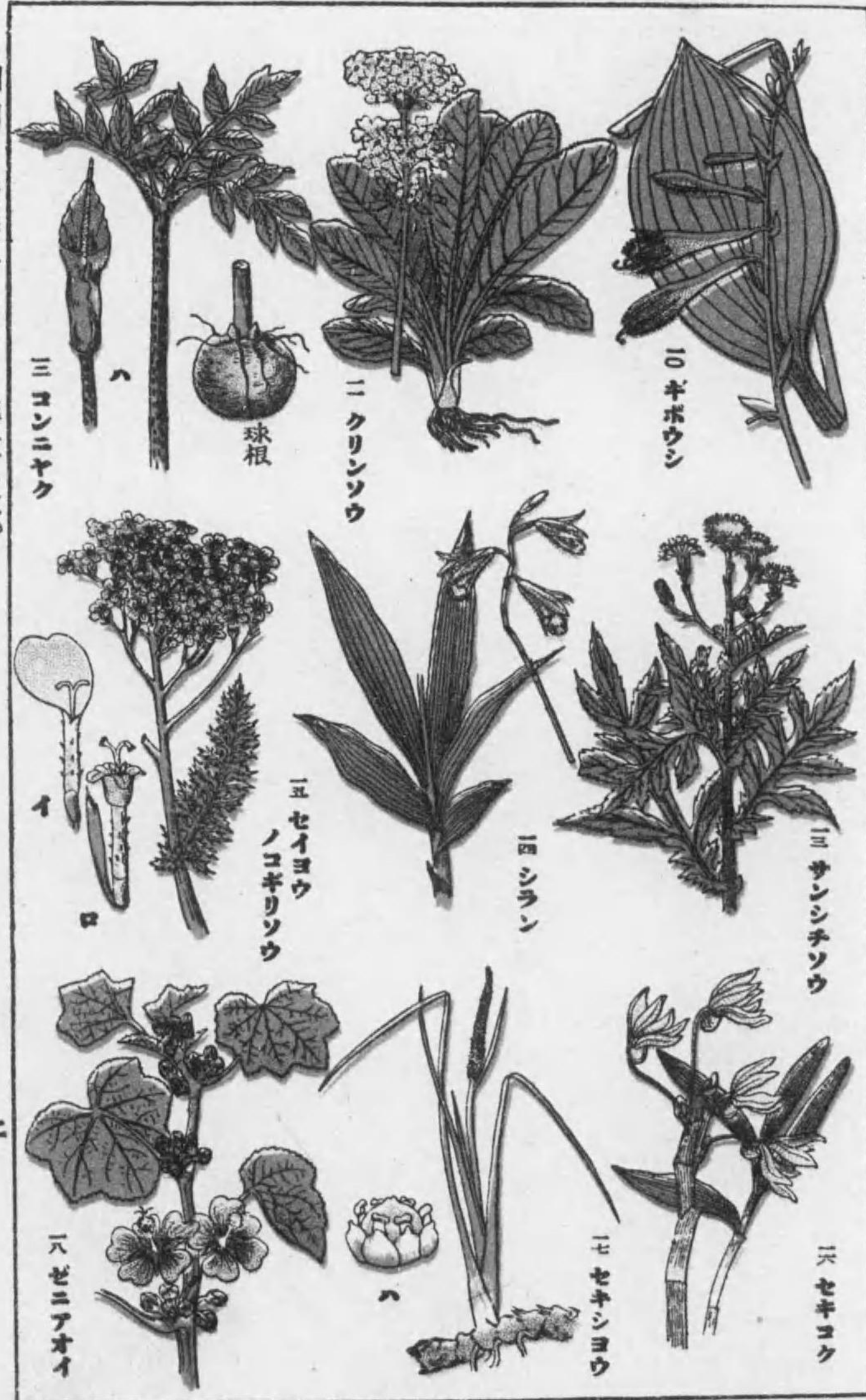
藥用植物圖版

園圃に培養せらるゝ薬草之部



備考〔圖中の記號〕「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

園圃に培養せらるゝ藥草之部



備考 [圖中の記號]「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

園圃に培養せらるゝ藥草之部



備考〔圖中の記號〕「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

庭園に栽培或は自生する薬草之部



備考 [圖中の記號] 「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縱斷面圖

庭園に栽培或は自生する藥草之部



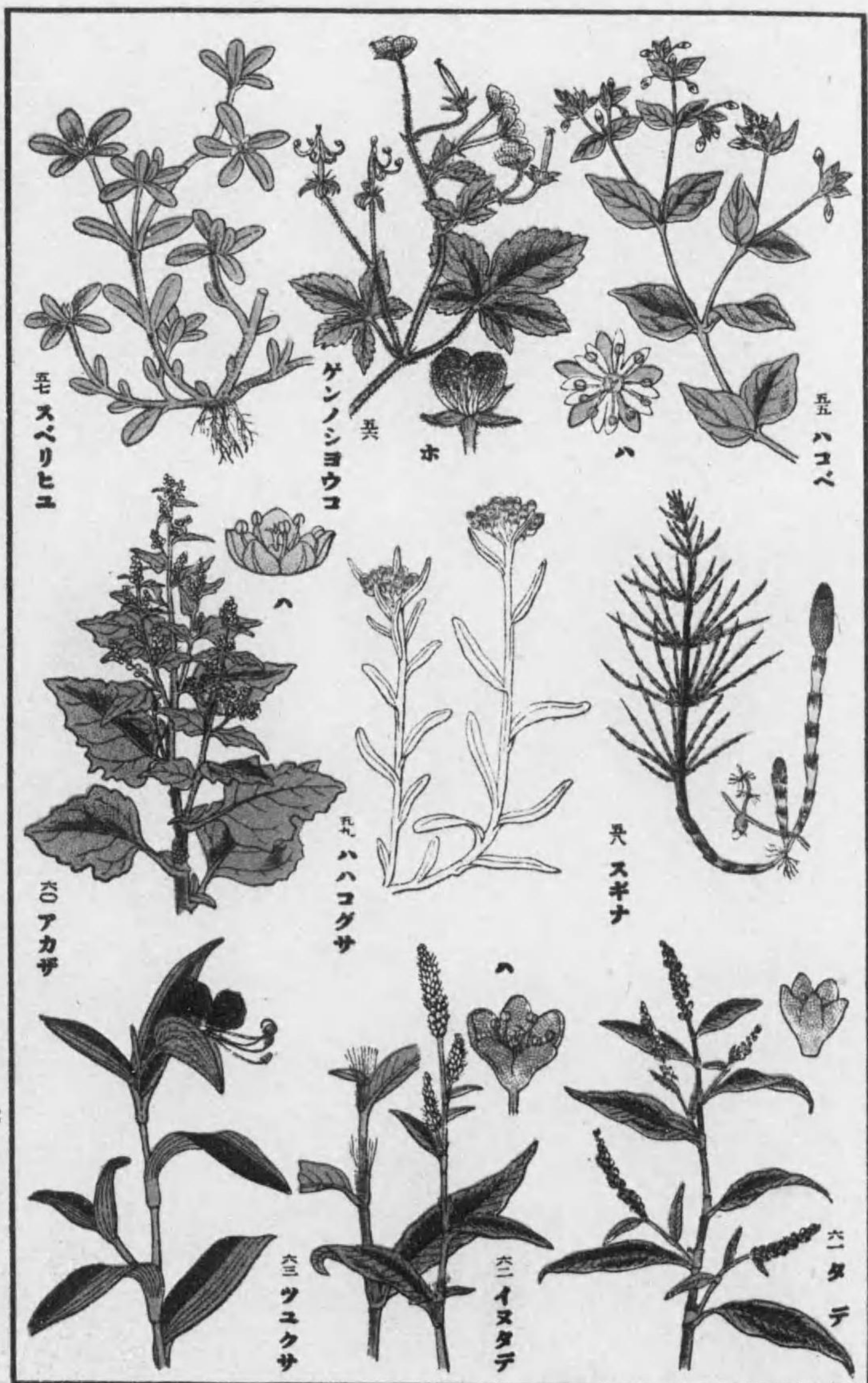
備考〔圖中の記號〕「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縱斷面圖

庭園に栽培或は自生する薬草之部



備考 [圖中の記號] 「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

路傍、畑地等に自生する薬草之部



備考〔圖中の記號〕「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦斷面圖

路傍、畑地等に自生する藥草之部



備考 [圖中の記號]「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦斷面圖

路傍、畑地等に自生する薬草之部



備考 [圖中の記號]「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦斷面圖

路傍、畑地等に自生する藥草之部



備考 [圖中の記號]「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

路傍、畑地等に自生する薬草之部



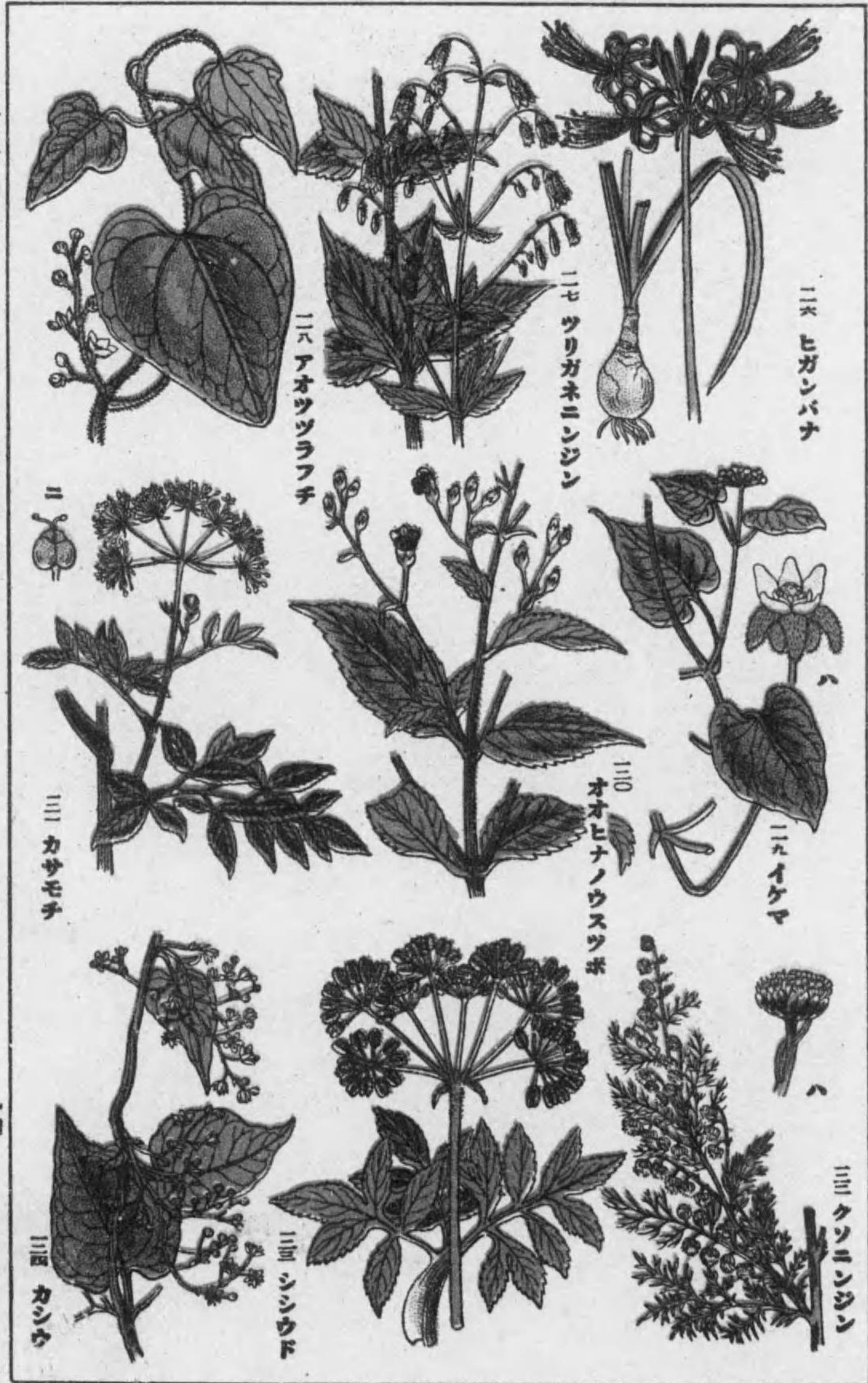
備考 (圖中の記號) 「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

河岸、堤防等に自生する薬草之部



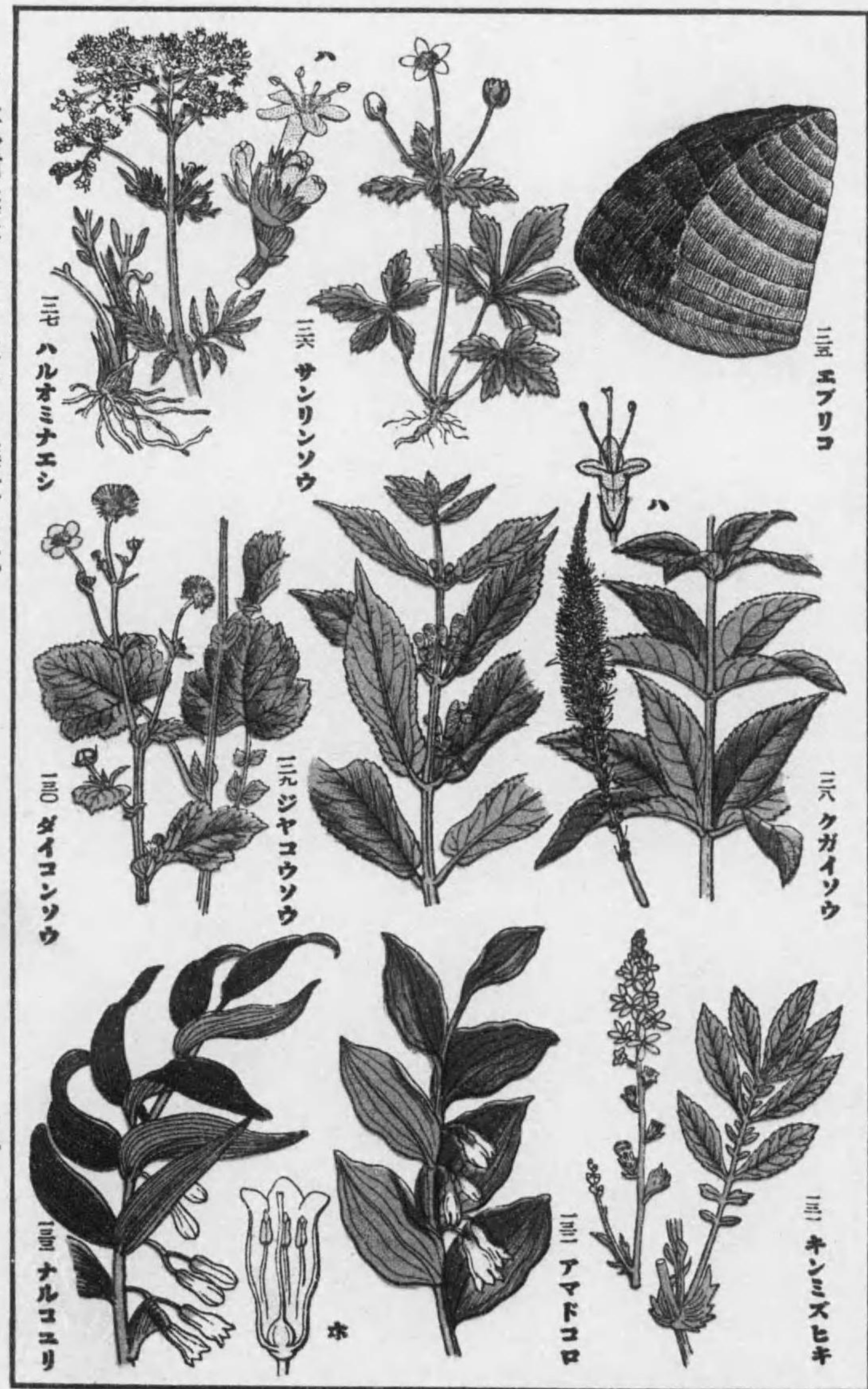
備考〔圖中の記號〕「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

山林、樹蔭等に自生する藥草之部



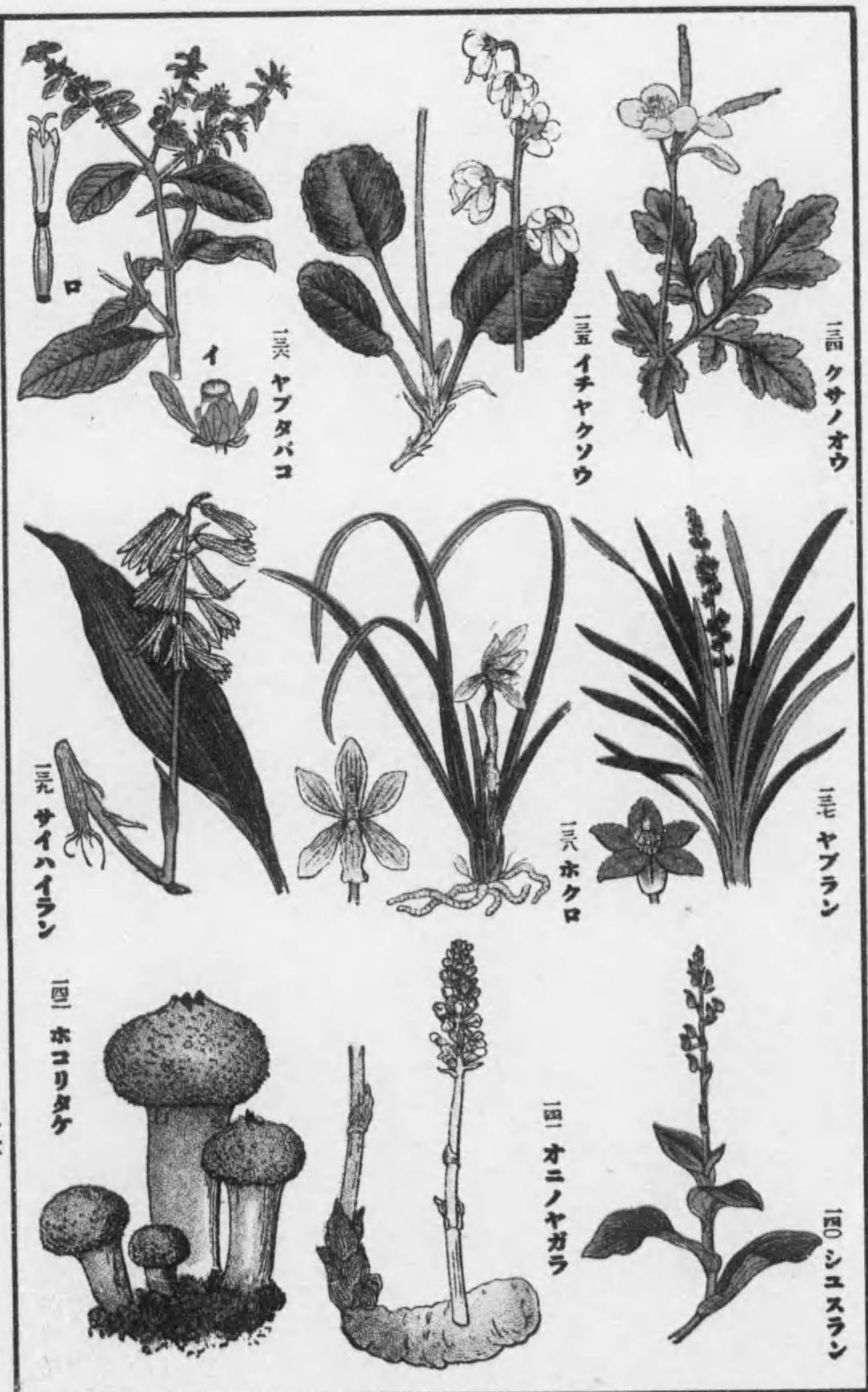
備考〔圖中の記號〕「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

山林、樹蔭等に自生する藥草之部



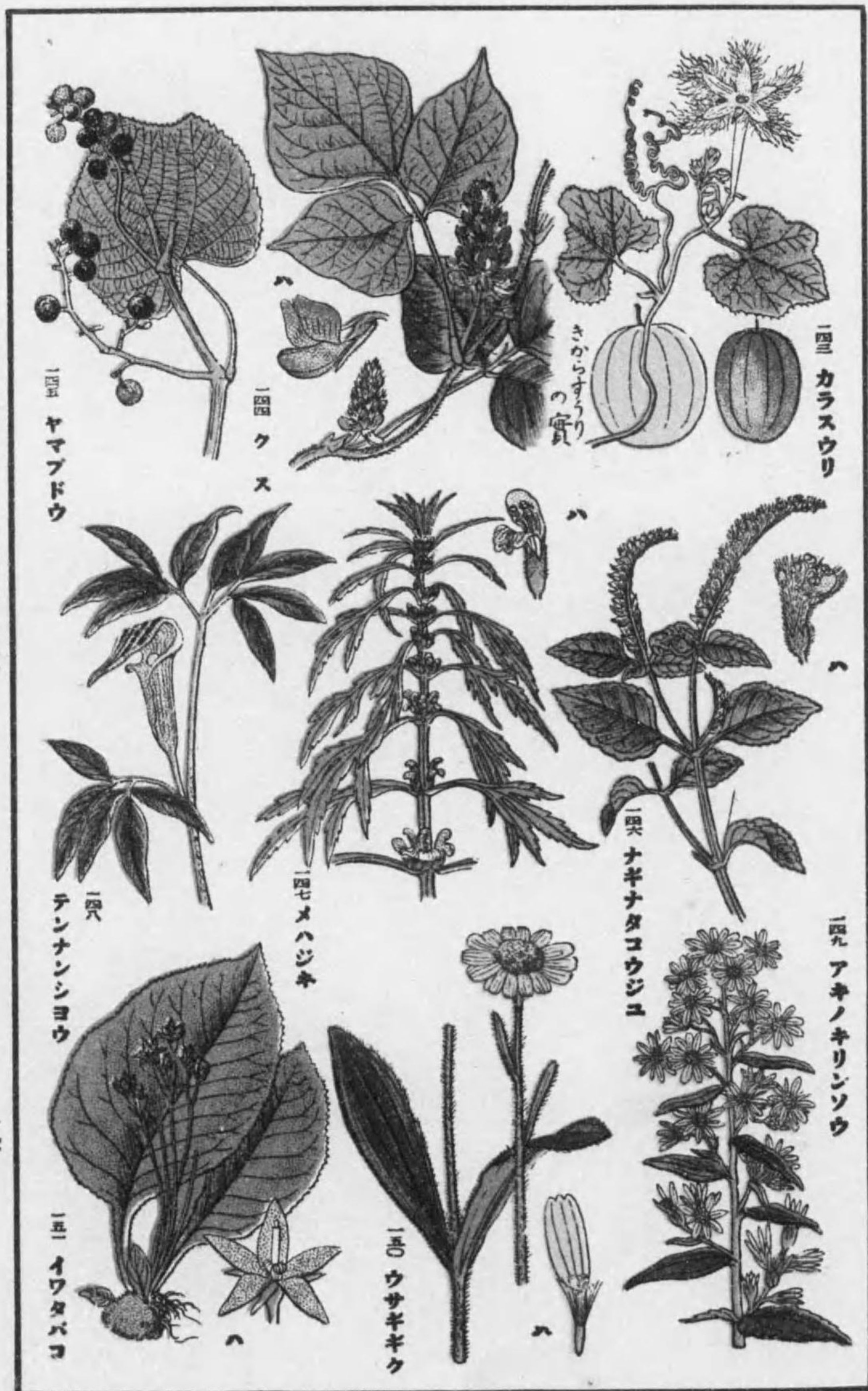
備考〔圖中の記號〕「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

山林、樹蔭等に自生する藥草之部



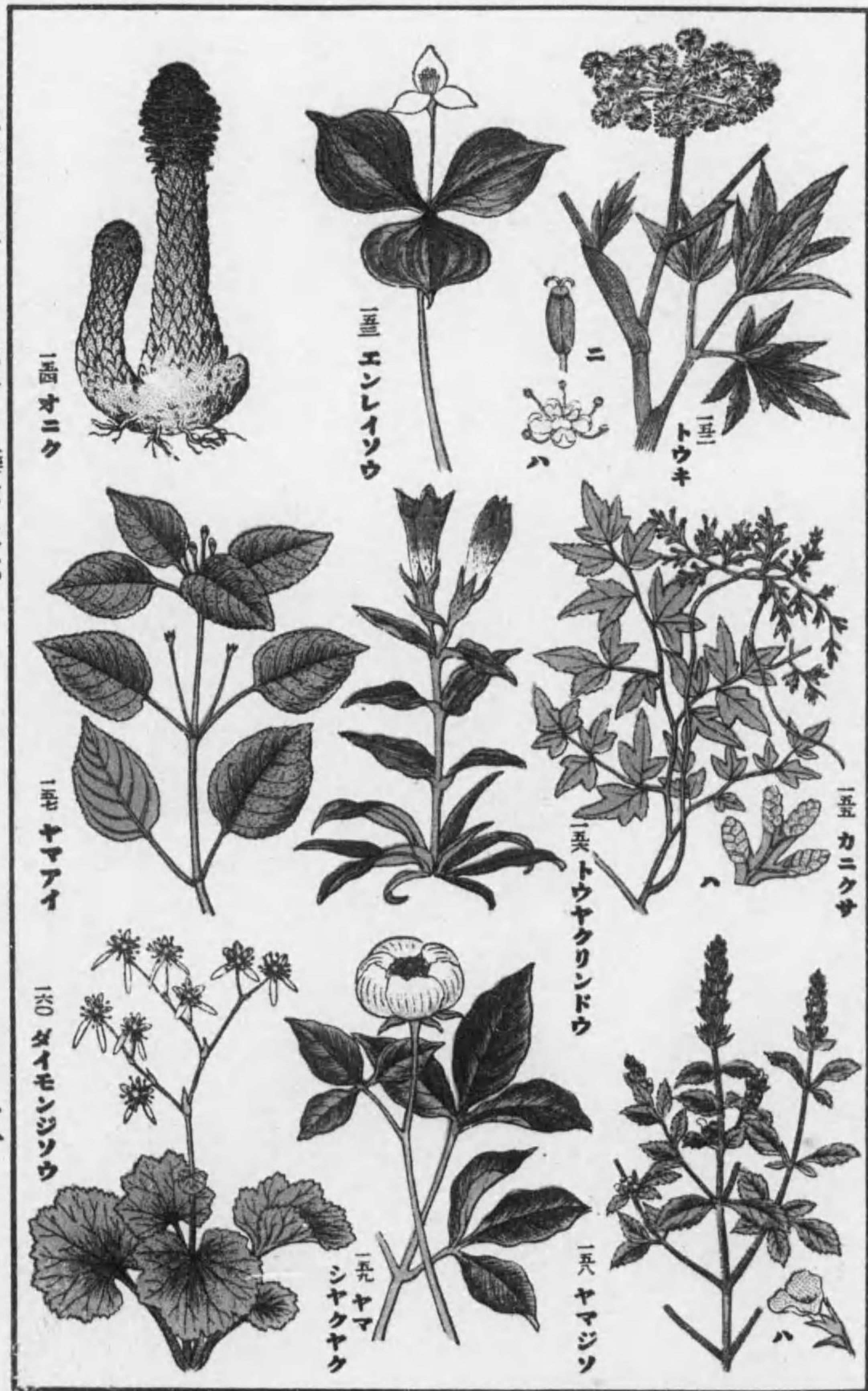
備考 [圖中の記號] 「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

山林・山地、高山等に自生する薬草之部



備考〔圖中の記號〕「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

山地、高山等に自生する薬草之部



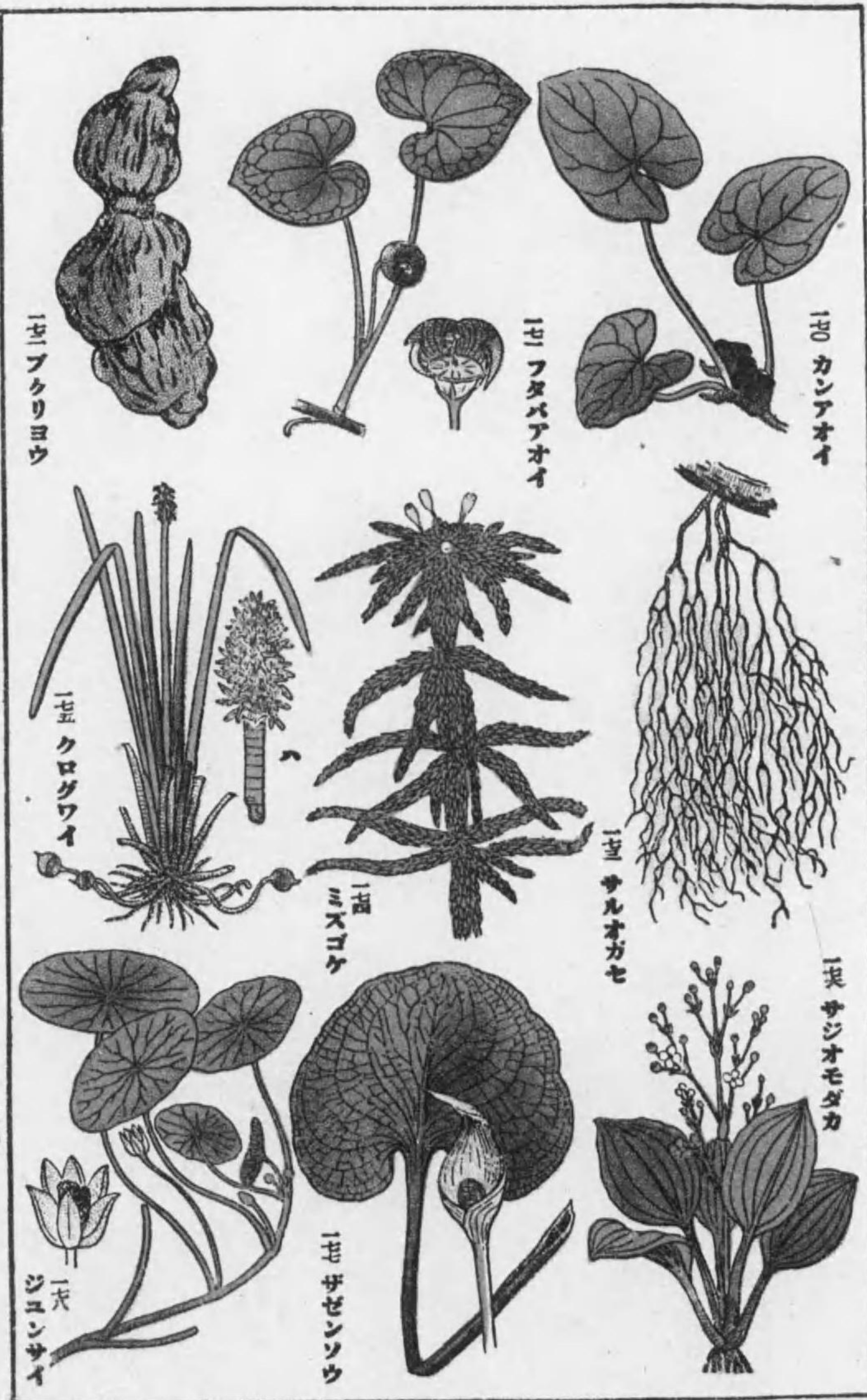
備考 [圖中の記號] 「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

山地、高山等に自生する薬草之部



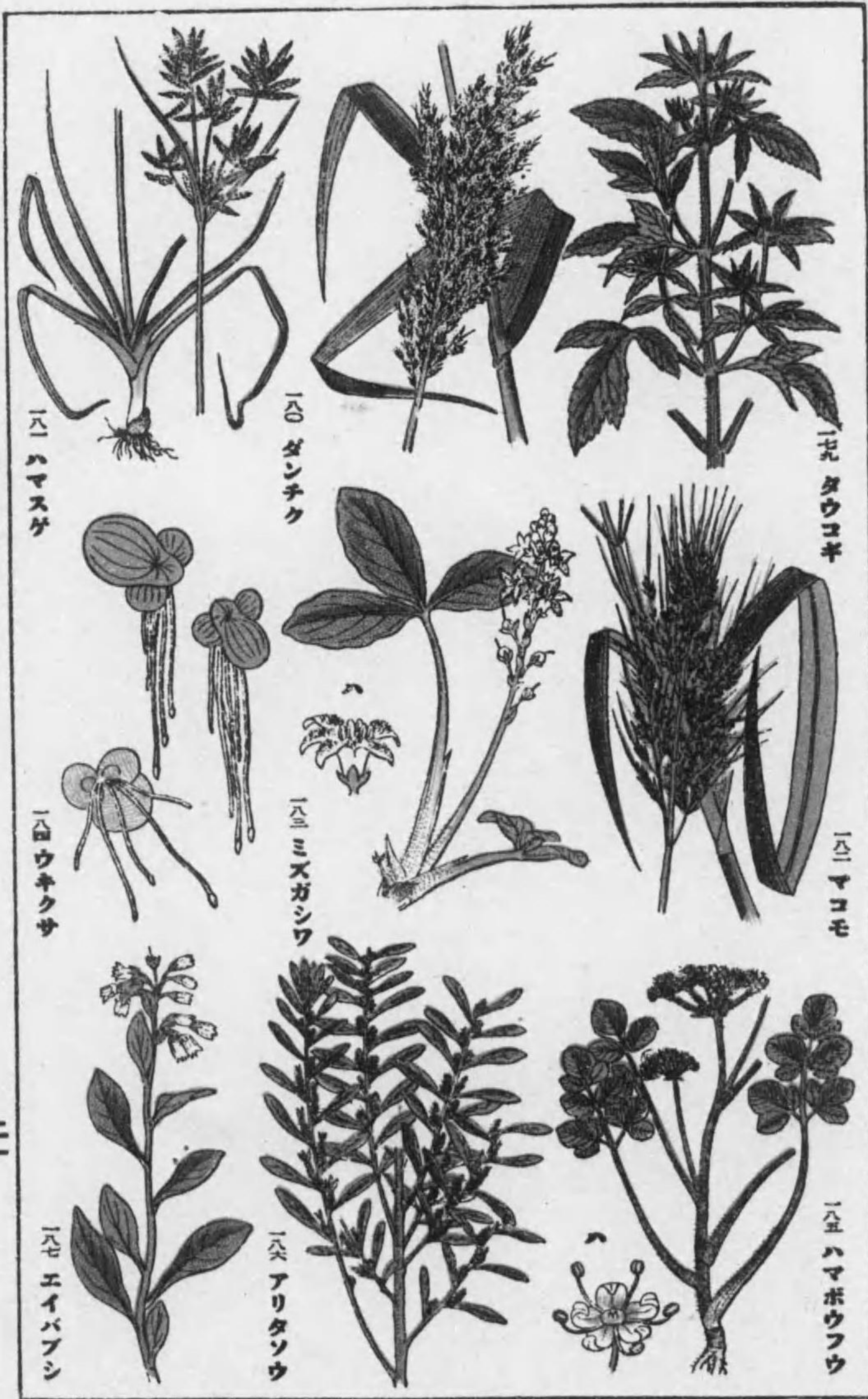
備考 [圖中の記號] 「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

山地・池沼、水澤等に自生する薬草之部



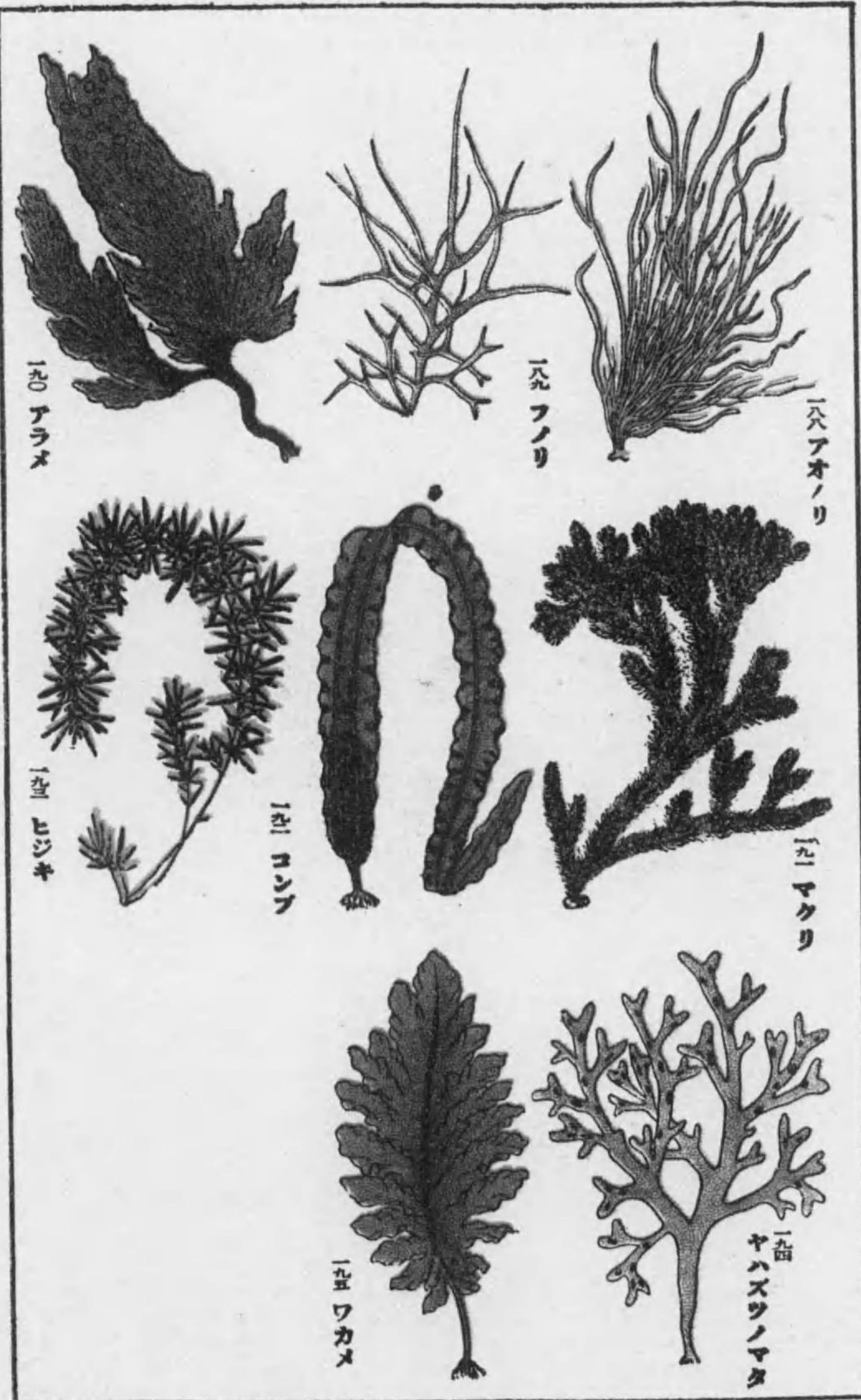
備考〔圖中の記號〕「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

池沼、水澤等に自生する薬草之部



備考 (圖中の記號)「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

海岸或は海中に自生する薬草之部



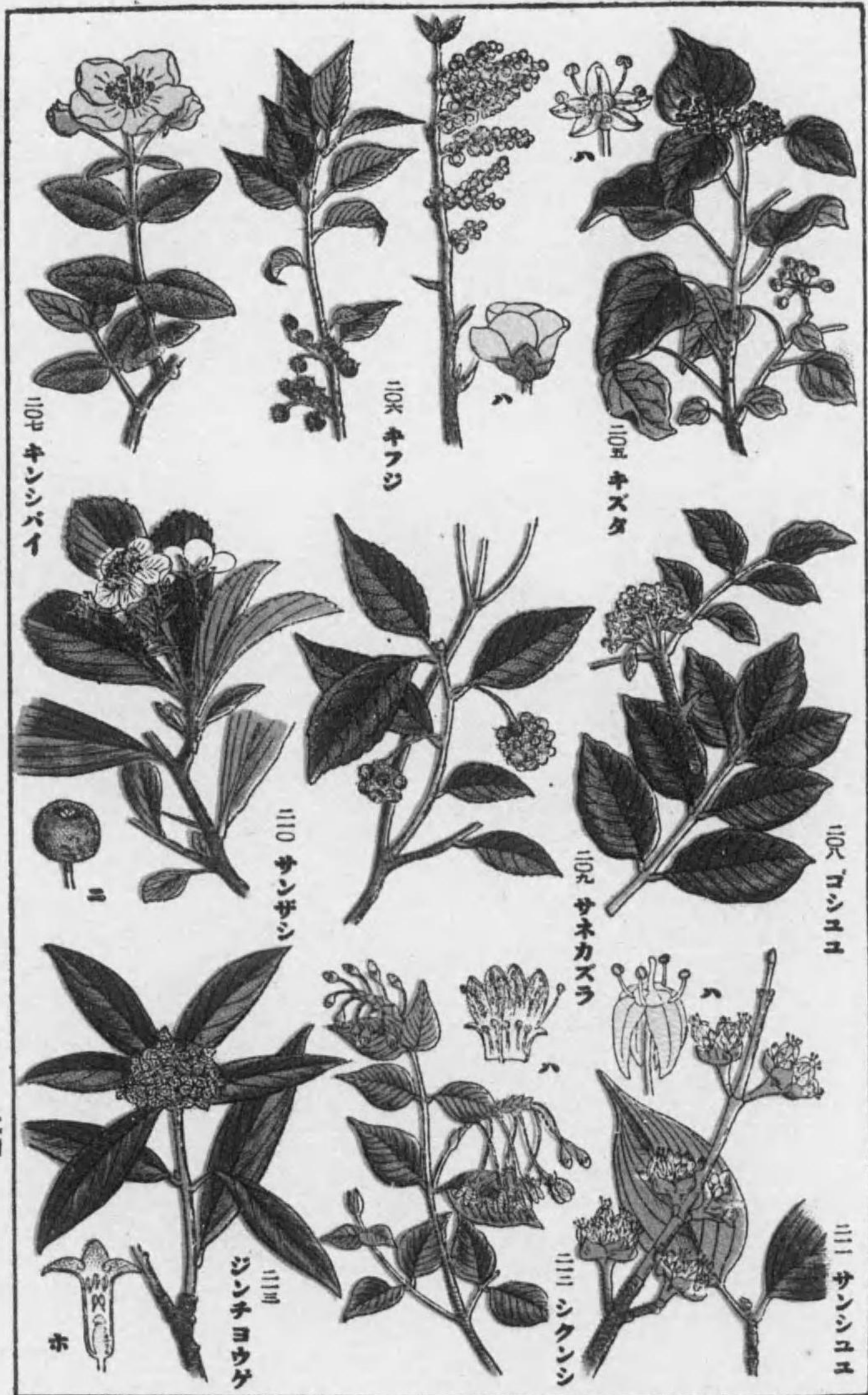
備考〔圖中の記號〕「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦斷面圖

庭園に栽植せらるゝ薬木之部



備考〔圖中の記號〕「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

庭園に栽植せらるゝ薬木之部



備考 (圖中の記號) 「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

庭園に栽植せらるゝ薬木之部



備考〔圖中の記號〕「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

山野に自生する薬木之部



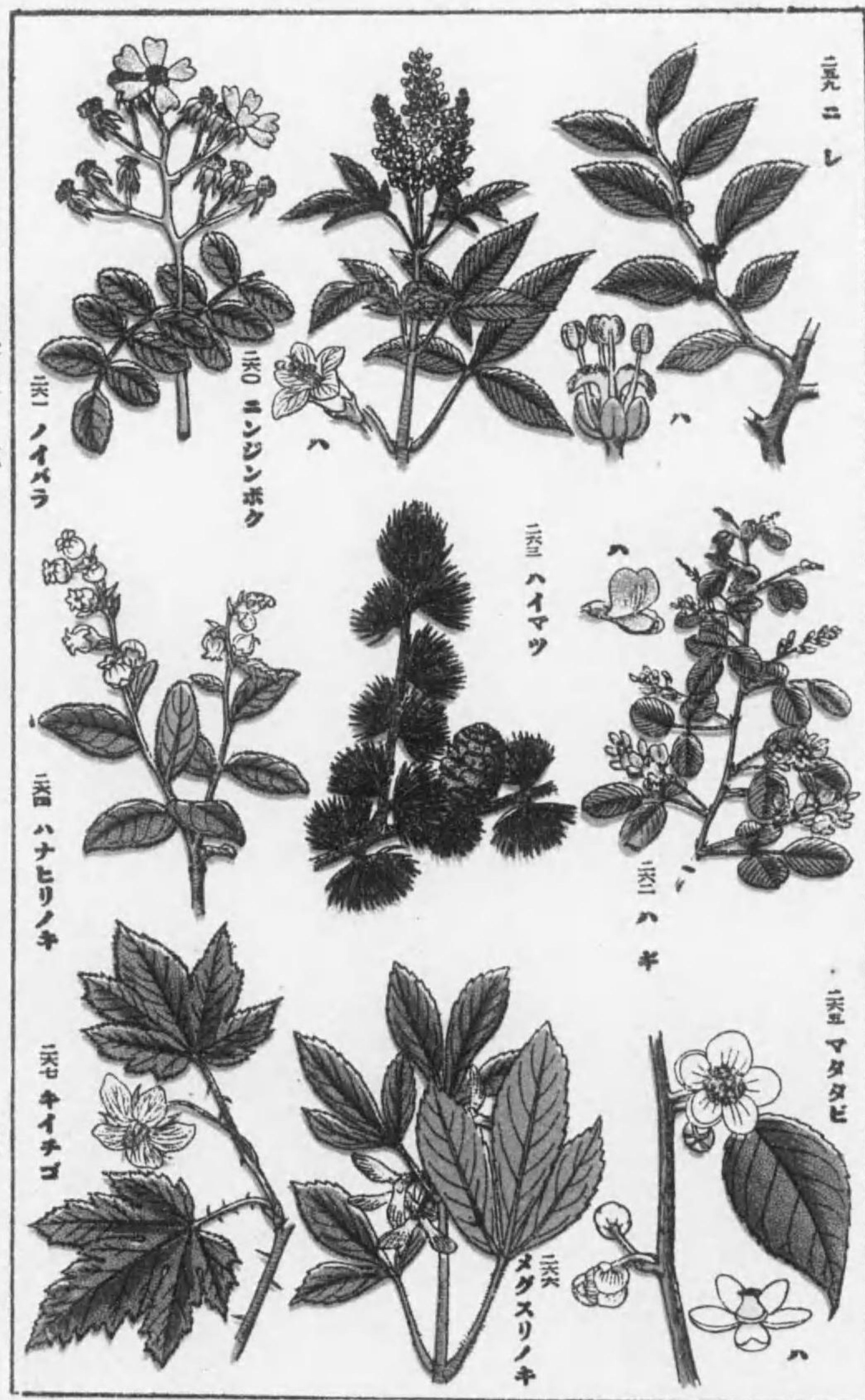
備考 (圖中の記號) 「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

庭園に栽植せらるゝ薬木之部



備考 [圖中の記號] 「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

山野に自生する薬木之部



備考 [箇中の記號] 「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦斷面圖



備考 (圖中の記號) 「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖



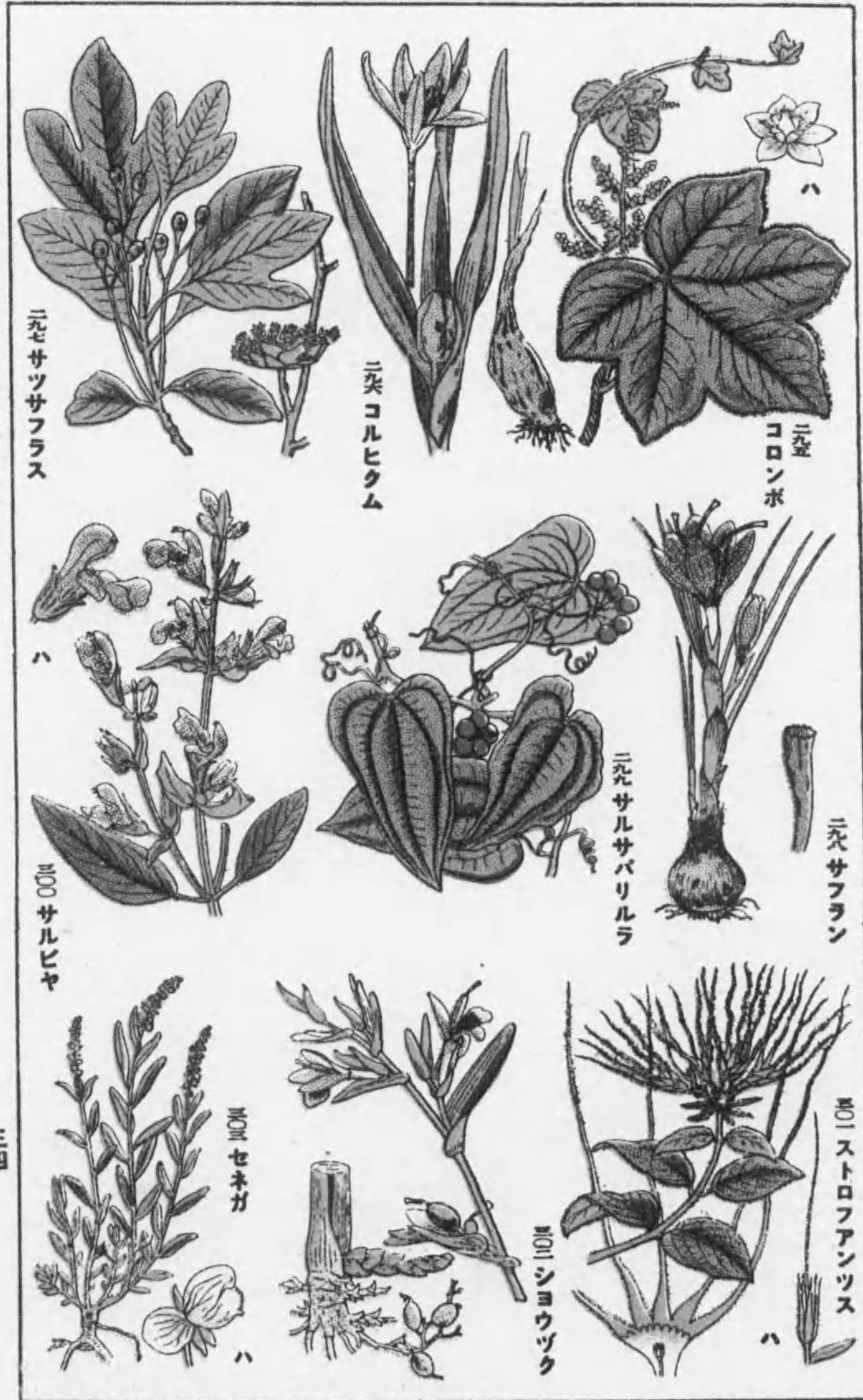
備考 (圖中の記號) 「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖



三三

備考 [圖中の記號]「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

日本薬局方所載の薬用植物之部



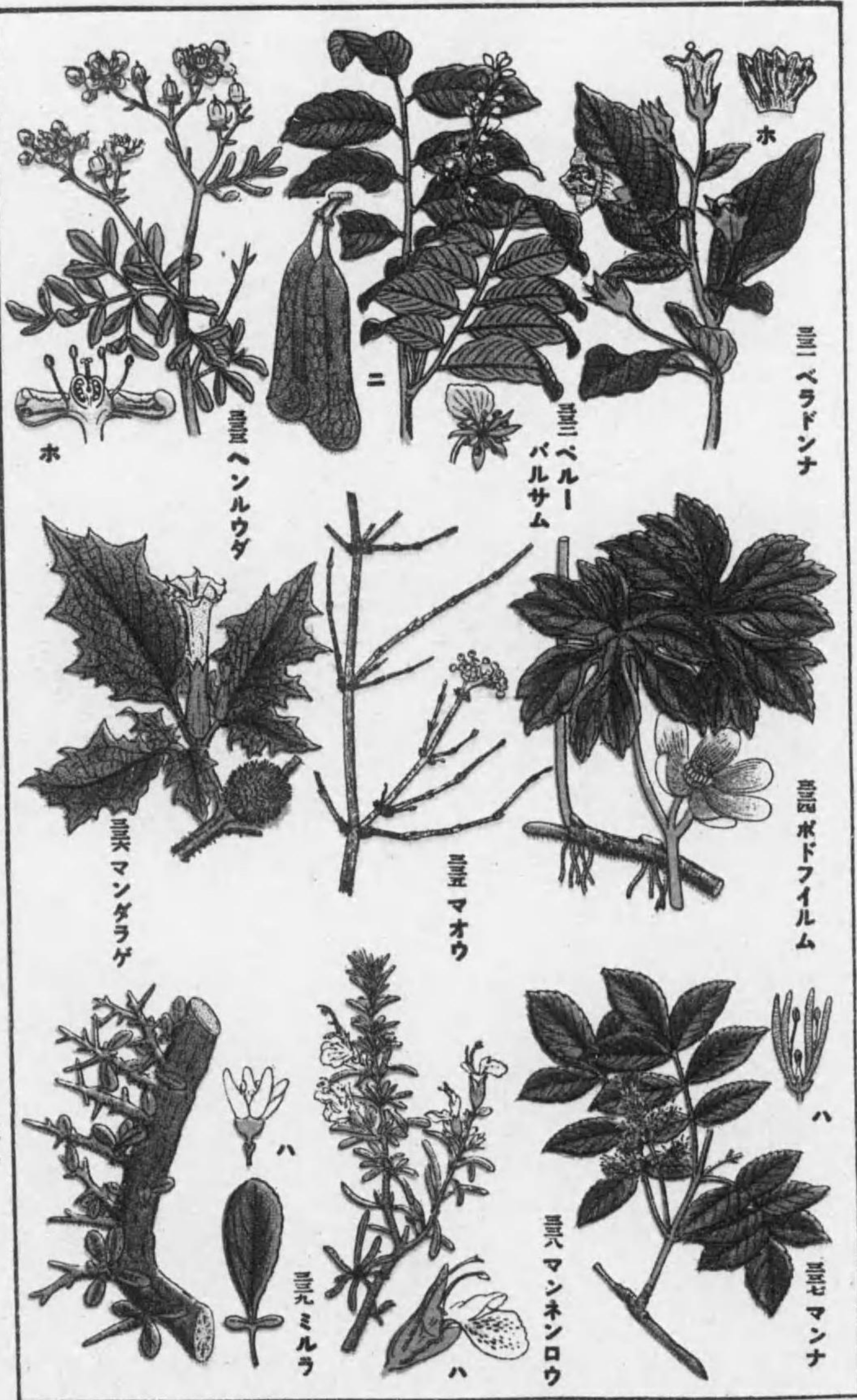
備考〔圖中の記號〕「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縱断面圖



備考 [圖中の記號]「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖



備考 [圖中の記號]「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縱斷面圖



備考 (圖中の記號)「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖



備考〔圖中の記號〕「甲」雄木「乙」雌木「イ」雄花「ロ」雌花「ハ」全花「ニ」果實「ホ」花の縦断面圖

はしがき

昔は多く草根木皮によつて病を治療したものでしたが、近頃はそれを輕視しまして、所謂西洋醫方にのみ信賴する様になりました。要するに大抵の藥物としての原料は植物から取つたものが一番多く、次いで動物、礦物から採取したものであります。それからこの藥物としての効果を發見した源を尋ねますと人知の發達しない時代、その病による苦痛を退かれやうと、種々な方法によつて歸納的に藥効を認めて來たものであります。即ち最初は民間藥として傳統的に使用されて來たものであります。人知の發達と共に藥物に對する成分を研究し、遂には之れを精製し醫藥に供する様になつたのであります。

我國でも維新前後西洋醫學の傳來と共に、種々な變遷進歩をいたしまして遂に今日の日本藥局方の制定を見るに至り、和漢醫の處方は殆んど民間藥として顧みられない様になりました。

然しこの民間藥の效果に就きましては今更事新しく記すまでもなく、古來から我國の風土に生育し、その風土に適當したる天然物を利用することでありますから、徒らに西洋流を其儘に取入れた力よりは、一層力強いところが無くてはならないのは事實であらうと思ひます。

實驗の結果は民間薬によつて、西洋醫の見放した病人も治癒した實例は澤山にあります。勿論病氣にか、りましたら誰しも、第一に醫師の診察を受けその治療を受けなければならないのですが、病氣の種類によつては民間薬のみにて完全に治療出来るものも澤山にあるのであります。

この目的で本書は従來發行されてゐる同種の著書と少しく趣をかへまして、先づ罹病者或は看護者の方は、その病症の一般知識を御了解し得らるゝ様病名につき通俗的に其の説明を加へ、かくして之に適應した藥物を最も手近から得らるゝ様記述いたしました。

それから病名に應用する藥物につき、一々その植物に對し細密なる繪畫を加へ、尙之れに説明を記述しまして、繪畫以外の必要なる解釋を加へておきましたから、本書一冊の御精讀によつて、病名の判別、藥物の知識、使用方法等完全に御研究なさることが出来ることと思ひます。

尙一般購讀者諸君に對し堅く御承知を願つておきたいのは、本書に記述してあります藥物は凡て古來重用して參りました皇漢藥及び民間薬の中、編者及びその近親知己の實驗によつて効能確實と認められたもの、並に從來弘く世に傳へられ、多くの人が實驗し、奏効確實といはれて居るものを集録いたしましたもので、これ以外にも尙澤山の藥物もありますが、効能の確實でないもの、毒分を含有してゐるものなどは省くこと、い

たしました（所載中有毒品種を採用しましたものは特に其項の中に注意しておきました）から、餘り過量に使用なされない限りは、決して副作用を起したり、有害であつたりすることはありませんから、本書によつて治療なさることは絶対に御安心して御使用下さることが出来ることとあります。

勿論本書によつて自家治療をなさつて差支へのあるものは、一々醫師の診察をお受けなさる様御注意してありますから、之れは充分に御確守願ひ升。それから日本藥局方所載の藥用植物は殆んど全部に近く、繪畫と説明を加へておきましたが、之れは一般藥用植物と同様御用ひになつても差支へありませんが、製劑となつて居るものは、醫師或は藥種店から買ひ求めらるゝ方が便利でありますから、各その項に記述しておきました。

本書は藥用植物につき記述することを主といたしましたが、薬用として特に効能あるものは、動物、寶藥等につきましても記述しておきました。

終りに本書所載藥用植物の使用法につきまして、正確に使用分量を記述してないものもありません、之れ等につきまして或は何となく不安心に思はれる方もおありにならうと思ひますが、之は病氣の輕重、年齢、體質等によつて違ひますから、初めに服用した分量で、何んだか利かぬ様でしたら、次は少し増し、或は餘りに飲み

悪いといふ様な場合は少し薄めにして用ゆる等、各御使用者の工風を願ひたいのであります。之れは前にも一寸申上げました通り、特に指定しない薬物は餘リメチャクチャでない限りは飲み過ぎをしても決して害になりませんから、安心して御使用下さい。それから一度や二度試用して『之れは効能がない』など、いつて中止なさる位いなら始めから御用ひにならない方がよいと思ひますから特に御注意しておきます。

編 者 識

圖 版 に 就 て

本書巻末に掲げました薬物圖は全部著者自身が描きましたもので、書籍の大きさの關係、一頁の描畫數の關係から繪畫が小さくなつたこと、限りある畫面へ一定した數を描き込まなければならなかつた都合上、大形の種類と、小形な種類との比較を取つて描くことの出来なかつたのは頗る遺憾なことでありましたが、唯繪畫が従來この種の出版物にあるものよりは、一々寫生的に描寫してあることは一見御了解下さること、思ひます。そして之れが比較につきましては、本文の説明中に一々その植物の生長寸法を記入してありますから、それによつてその大きさを想像して戴き、葉の形態、花の形等は繪畫により、花、葉等の色彩等については説明によつて實物を想像して戴きたいのであります。

特に著者より讀者へ申上げたいのは、最初本書の植物圖を御覽になる時、大抵の方はどれも同じ様なもの計りで、少しも分らないと思はれる方もありましようが、夫れは丁度野原へ出て、そこに生へてゐる雜草を見られた時、どれも同じ様な物計りに見えると同じであります。唯漫然とながめるのではなく少し一々研究的の目を以て比較對照せられたら、段々に隣りから隣りに並んでゐる一つ／＼が異つてゐることが別る様

になつてまゐります。殊に本書に描寫いたしました繪畫は、その比較對照の上に於て、最も注意してかいてありますから、その點に於ては本書が他に比べて遜色ないものと思つてゐるところであります。

なほこの圖版の製版につきましては、著者も頗るその技術者の選定に苦心しましたのであります。それは假令自身がその描畫に苦心しましたが、製版の技術が不充分では折角の苦心も何もならないのであります。

ところが幸ひなことには、東京市内に於てもその技術に於ては他に譲らないといふ古金堂主古井隆氏が、の製版を快諾せられ、一線、一割に對して迄で、細心の注意を拂はれたるの結果、著者の苦心の揮毫を完全に製版し得られたるは本書のため大に感謝する所であります。

圖版中第三十一圖より第三十九圖に至る九枚の圖版は多くは外種でありますか、之は日本藥局方にて指定されてゐる藥物でありますから參考迄に掲げまして、その用途を示したのであります。

索引に就て

本書卷末に記載してある植物名索引、及び病名索引は諸君に最も便利に且つ有益に活用出来る様工風を用ひたつてあります。假令ば神經痛にかゝつて困つて居るが、何かよい薬はないかといふ場合、『シ』の部でシンケイツウ（一四七頁）を見出し、讀過されますと、神經痛に關係した凡ての容態やら、手當やら、藥物が記載してある。それからその植物名の下には圖版記載の頁數と圖版の數が記載してあるから、それによつて卷末の圖版を御覽になれば、その植物の態形が明瞭になるのであります。

形態が明になつたが、この植物はどんな處に生へて居るのだらう、花の色はどんな色だらうといふ様なことを知りたい時は卷末にある植物名索引によつて見ると、その説明のある頁が別りまますから、それによつて本文中に記載してある植物の説明が別る様になつてゐます。

貴下のお庭にはどんな藥物が生えてありますか、そして生えてゐる草や木は何か薬になるのがありますか、といふ様な話が出たとき、卷末の植物名索引を調べて見ますと、藥物として記述してある頁數が残らず記載

してありますから、この草は何々の病氣によい、この草は何々の病氣の時非常に效能があると、細大漏さず知ることが出来る様になつて居ります。

或は人から何々の草は非常によく「リウマチス」にきゝますから御使ひになつては如何なご、勧められた場合、本書によつてその草はどんな草であらう、又どんな薬效があるものだらうと、調べて見るに便利になつております。

それから本書の索引に用ひました假名遣ひは、一般の方々の御引きだしになるのに便利な様に、全部字音の假名遣にしてあります。

一 索引何れも全部字音により假名遣ひを無視いたしました。例へばクワはカに、カウはコに。ヂはジ、タウはト等にしてあります。

二 索引には前項の様に假名遣を無視し、唯々検出を簡單にする様にしましたが、本文内にある説明の場合には凡て正しい假名遣にしてあります。

病 名 目 次

第一編 體溫 脈搏 呼吸

第一節 體 溫……………一

第二節 脈 搏……………四

第三節 呼 吸……………六

第二編 消化器系の疾患

第一節 口腔の疾患

一 口腔加答兒……………七

二 口角炎……………八

三 潰爛性口内炎……………九

四 驚口瘡……………九

第一節 齒の疾患

一 齶 齒(齒痛)……………一

二 齒齦炎……………三

三 齒の汚染……………三

四 齒の惡臭……………三

五 齒喰音……………三

六 齒齦の疼痛……………三

七 齒の攝生……………三

第二節 咽喉の疾患

一 急性咽喉加答兒……………四

二 慢性咽喉加答兒……………五

三 扁桃腺炎……………六

第四節 食道の疾患

- 一 食道狭窄……………七
- 二 食道癌……………六
- 三 壁外性狭窄……………六
- 四 食道炎……………六

第五節 胃の疾患

- 一 胃加答兒……………二〇
- 二 胃擴張……………三
- 三 胃潰瘍……………三
- 四 胃癌……………四
- 五 胃下垂……………六
- 六 胃神經痛(胃痙攣)……………元
- 七 胃酸過多症……………三〇
- 八 嘔吐……………三
- 九 吐血……………三
- 一〇 健胃強壯劑……………三

第六節 腸の疾患

- 一 急性腸加答兒……………四
 - 二 慢性腸加答兒……………四
 - 三 消化性潰瘍……………五
 - 四 腸結核……………五
 - 五 盲腸炎……………四
 - 六 疝氣、疝痛……………四
 - 七 寸白……………五〇
- 第七節 胃腸合併疾患
- 一 胃腸加答兒……………五
 - 二 便秘……………五
 - 三 下痢……………五
 - 四 吐瀉……………六〇
- 第八節 中毒症
- 一 生梅の中毒……………六
 - 二 アルコホルの中毒……………六
 - 三 烏賊の中毒……………六
 - 四 瓦斯の中毒……………六

- 五 鯉の中毒……………三
- 六 蟹の中毒……………三
- 七 茸の中毒……………四
- 八 薬品の中毒……………四
- 九 酸類の中毒……………五
- 一〇 昇汞の中毒……………五
- 一一 石炭酸の中毒……………五
- 一二 蕎麥の中毒……………五
- 一三 筍の中毒……………五
- 一四 茶の中毒……………五
- 一五 肉類の中毒……………六
- 一六 ニコチンの中毒……………六
- 一七 燐の中毒……………六
- 一八 河豚の中毒……………六
- 一九 野菜の中毒……………七
- 二〇 ヨードホルムの中毒……………七
- 二一 喰ひ合せ……………六

第九節 内臓の寄生蟲

- 一一 水の飲み過ぎ……………六
- 一二 乗物に酔ふ……………六
- 一三 烟にむせる……………六
- 一 蝨……………七〇
- 二 十二指腸蟲……………三
- 三 蛔蟲……………三
- 四 蟯蟲……………四
- 五 肝臓ヂストマ……………五

第十節 肝臓の疾患

- 一 肝臓病……………五
- 二 黄疸……………六
- 三 ワイル氏病……………六
- 四 膽石症……………九

第十一節 横隔膜の疾患

- 一 腹水……………八〇

第十二節 腹膜の疾患

二 腹膜炎……………八二

第三編 呼吸器の疾患

第一節 鼻の疾患

- 一 急性鼻加答兒……………八二
- 二 鼻汁の過多症……………八四
- 三 鼻加答兒の豫防……………八四
- 四 鼻汁の悪臭……………八四
- 五 鼻茸……………八四
- 六 衄血……………八四
- 七 鼻腔の進入物……………八五
- 八 赤鼻……………八五
- 九 蓄膿症……………八五

第二節 喉頭の疾患

- 一 急性喉頭加答兒……………八五
- 二 慢性喉頭加答兒……………八五

第三節 氣管及び氣管枝の疾患

一 氣管枝加答兒……………八六

二 氣管枝狹窄……………八七

三 喘息……………八八

四 百日咳……………九二

(附一) 鎮咳祛痰藥……………九三

第四節 感 胃

- 一 感冒……………九六
- 二 インフルエンザ……………一〇四
- 三 お多福かぜ……………一〇五
- 四 蕁麻疹……………一〇五
- 五 聲がかれた……………一〇五
- (附) 發汗解熱藥……………一〇六

第五節 間歇熱(瘧)……………一〇九

第六節 肺臓の疾患……………一一〇

- 一 咯血……………一一〇
- 二 氣管枝肺炎……………一一一
- 三 真正肺炎(コロロフ性肺炎)……………一一二

第五編 腦の疾患

第一節 腦實質の疾患

- 一 腦貧血……………一一五
- 二 腦充血……………一二六
- 三 腦出血(腦溢血、腦卒中)……………一二六
- 四 腦震盪(卒倒)……………一二四

第二節 腦膜の疾患

- 五 腦膜炎……………一二四
- 附 癩 癩……………一二四

第六編 神経系の疾患

- 一 神経衰弱……………一二三
- 二 ヒステリー……………一二四
- 三 不眠症……………一二五
- (附) 催眠劑……………一二五
- 四 痙 攣……………一二六

第四編 心臟及血管の疾患

- 一 心臟瓣膜症……………一二六
- 二 狭心症……………一二六
- 三 心悸亢進……………一二九
- 四 血壓亢進……………一二九
- 五 貧 血……………一三〇
- (附) 清血及び補血劑……………一三〇

第七節 肋膜の疾患

- 一 乾性肋膜炎……………一三三
- 二 濕性肋膜炎……………一三四

- 四 肺結核……………一三三
- 五 肺尖加答兒……………一三六
- 六 肺浸潤……………一三六
- 七 肺壞疽……………一三三

(附) 咯痰の消毒……………一三三

五 神經痛……………一四七
 六 リウマチス……………一四七
 七 肩の凝り……………一五三
 (附)強壯劑……………一五四

第七編 泌尿器の疾患

第一節 腎臓の疾患

一 腎臓炎……………一五九
 二 尿毒症……………一六三
 三 水腫……………一六五

第二節 膀胱の疾患

一 膀胱加答兒……………一六六
 二 膀胱腎盂炎……………一六六
 三 尿の瀦出……………一六九
 四 尿の混濁……………一六九
 五 遺尿……………一七〇
 (附)利尿劑……………一七〇

第八編 新陳代謝疾患

糖尿病……………一七六

第九編 眼の疾患

一 カスミ目……………一七九
 二 疳目……………一七九
 三 内障眼……………一八〇
 四 眼瞼縁眼(タマレ目)……………一八〇
 五 血目……………一八〇
 六 疲れ目……………一八〇
 七 突き目……………一八〇
 八 トラホーム……………一八一
 九 夜盲症(トリ目)……………一八一
 一〇 蜂窩織炎(ナツボシ)……………一八二
 一一 ノボセ目……………一八二
 一二 ハヤリ目(カタル性結膜炎)……………一八二

一三 膿漏性結膜炎(風眼)……………一八三
 一四 脂肪石……………一八四
 一五 眼瞼麥粒腫(モノモラヒ)……………一八四
 一六 ヤニ目……………一八四
 一七 角膜實質炎……………一八四
 一八 打ち眼……………一八四
 一九 眼瞼障害……………一八五
 二〇 目星……………一八五
 二一 斜視……………一八六

第十編 耳の疾患

一 耳鳴……………一八六
 二 耳腫 急性中耳炎(カラ耳)……………一八六
 三 慢性中耳炎(耳ダレ)……………一八七
 四 耳石……………一八八
 五 耳の障碍……………一八八

第十一編 婦人病

一 子宮病……………一九九
 二 子宮出血……………一九九
 三 月經不順……………一九九
 四 月經過多(血崩れ)……………一九九
 五 月經困難……………一九九
 六 産前産後血の道……………一九九
 七 産後の浮腫……………一九九
 八 惡疽(胸が悪い)……………一九九
 九 陰部の惡臭……………一九九
 一〇 陰部の痒疾……………一九九
 一一 流産癖……………二〇〇

第十二編 乳房の疾患

一 乳腫……………二〇二
 二 乳不足……………二〇三

三 乳汁過多(乳がはる)……………二〇四
 四 乳 癌……………二〇四
 五 乳首を噛まれた時……………二〇四

第十三編 小兒の疾患

一 疳の病……………二〇五
 二 急疳(ヒキツケ)……………二〇六
 三 兔 唇……………二〇六
 四 左利き……………二〇六
 五 夜間驚愕……………二〇六
 六 異嗜症……………二〇七
 七 乳呑兒が玩具をかむ……………二〇七
 八 乳兒が青い便をする……………二〇七

第十四編 花柳病

一 黴 毒……………二〇七
 二 淋 病……………二〇七

三 消 渴……………二二三
 附 毒下し……………二二八

第十五編 痔 疾

一 痔 瘻……………二二九
 二 裂 痔……………二三〇
 三 疣 痔……………二三三
 四 脱 肛……………二三三
 五 小兒の冷痔……………二三三

第十六編 脚 氣……………二二三

第十七編 全 身 病

一 疲 勞……………二二六
 二 夏 瘦 せ……………二二七
 三 熱 射 病……………二二七
 四 盜 汗……………二二九

五 根氣が無い……………二二九
 六 寢 唸……………二二九
 七 肥 滿……………二三〇
 八 異汗症……………二三〇
 (附)健康法……………二三〇

第十八編 皮膚の疾患

一 ヒビ……………二三三
 二 アカギレ……………二三三
 三 凍 傷……………二三三
 四 汗 疹……………二三五
 五 靡 爛……………二三五
 六 カブレ……………二三五
 七 漆 瘡……………二三五
 八 トビヒ……………二三六
 九 皮脂漏……………二三六
 一〇 ヒ エ……………二三六

一 濕 疹……………二三九
 二 面 疱……………二三九
 三 瘡 毒……………二三九
 四 水 痘……………二四一
 五 水 蟲……………二四一
 六 雲 脂……………二四一
 七 白 癬……………二四二
 八 ハタケ……………二四二
 九 雀 斑……………二四二
 一〇 癩 風……………二四三
 一一 赤 痣……………二四四
 一二 絞 肌……………二四四
 一三 疥 廔……………二四四
 一四 底 豆……………二四四
 一五 疣……………二四五
 一六 鶏 眼……………二四五
 一七 ホクロ……………二四五

二八 腋臭……………二四八

第十八編 皮膚の寄生蟲

- 一 頑癬……………二四七
- 二 セニ蟲……………二四七
- 三 陰金癬……………二四七
- 四 疥癬……………二四七
- 五 頭虱……………二五〇
- 六 毛虱……………二五〇

第二十編 毛髮の手當

- 一 赤毛……………二五一
- 二 枝毛……………二五一
- 三 曲毛、綱毛……………二五二
- 四 砂毛……………二五二
- 五 硬毛……………二五二
- 六 脱毛……………二五三

七 汚毛……………二五三

第二十一編 腫物

- 一 腫物の散し藥……………二五五
- 二 腫物の吸出し藥……………二五五
- 三 瘰癧……………二六〇
- 四 瘰疽……………二六〇
- 五 脫疽……………二六三
- 六 骨膜炎……………二六四
- 七 丹毒……………二六四

第二十二編 外傷

- 一 火傷、湯傷……………二六六
- 二 着物に火が點いた時……………二六九
- 三 凍死しかけた時……………二六九
- 四 切り傷……………二六九
- 五 踏み抜き……………二七二

六 擦過傷……………二七二

七 股擦……………二七二

八 靴擦……………二七二

九 生爪……………二七三

一〇 逆ムケ……………二七三

一一 褥瘡……………二七三

一二 打ち身……………二七三

一三 裂傷……………二七五

一四 挫傷……………二七五

一五 刺……………二七五

第二十三編 咬傷

- 一 犬の咬傷……………二七六
- 二 馬の咬傷……………二七九
- 三 猫の咬傷……………二七九
- 四 鼠の咬傷……………二七九
- 五 蝮の咬傷……………二八〇

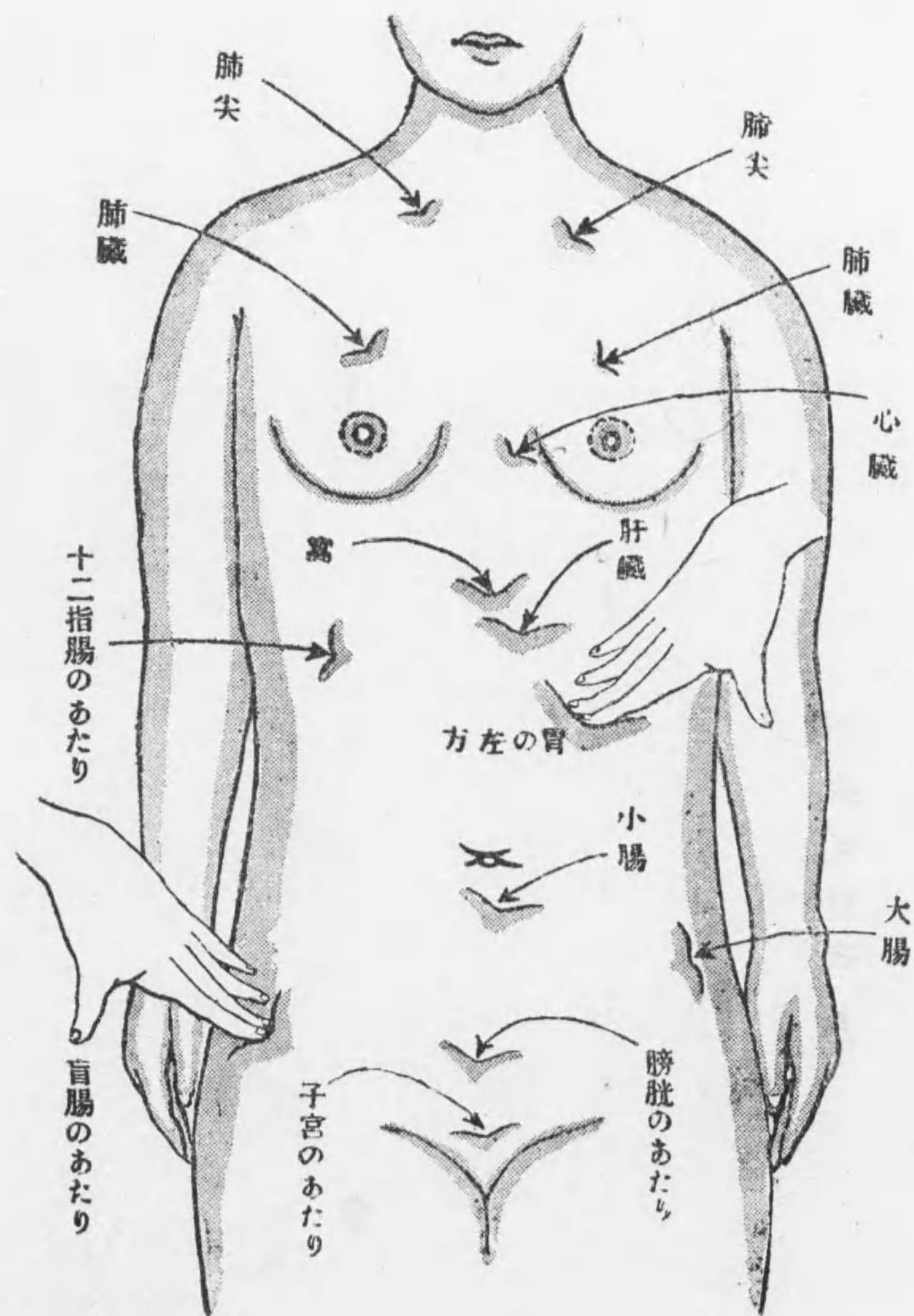
第二十四編 蝨毒

- 一 蛇の蝨毒……………二八二
- 二 ゲジゲジの蝨毒……………二八二
- 三 蜂の蝨毒……………二八二
- 四 百足の毒……………二八三
- 五 毒蟲の蝨毒……………二八四

第二十五編 傳染病

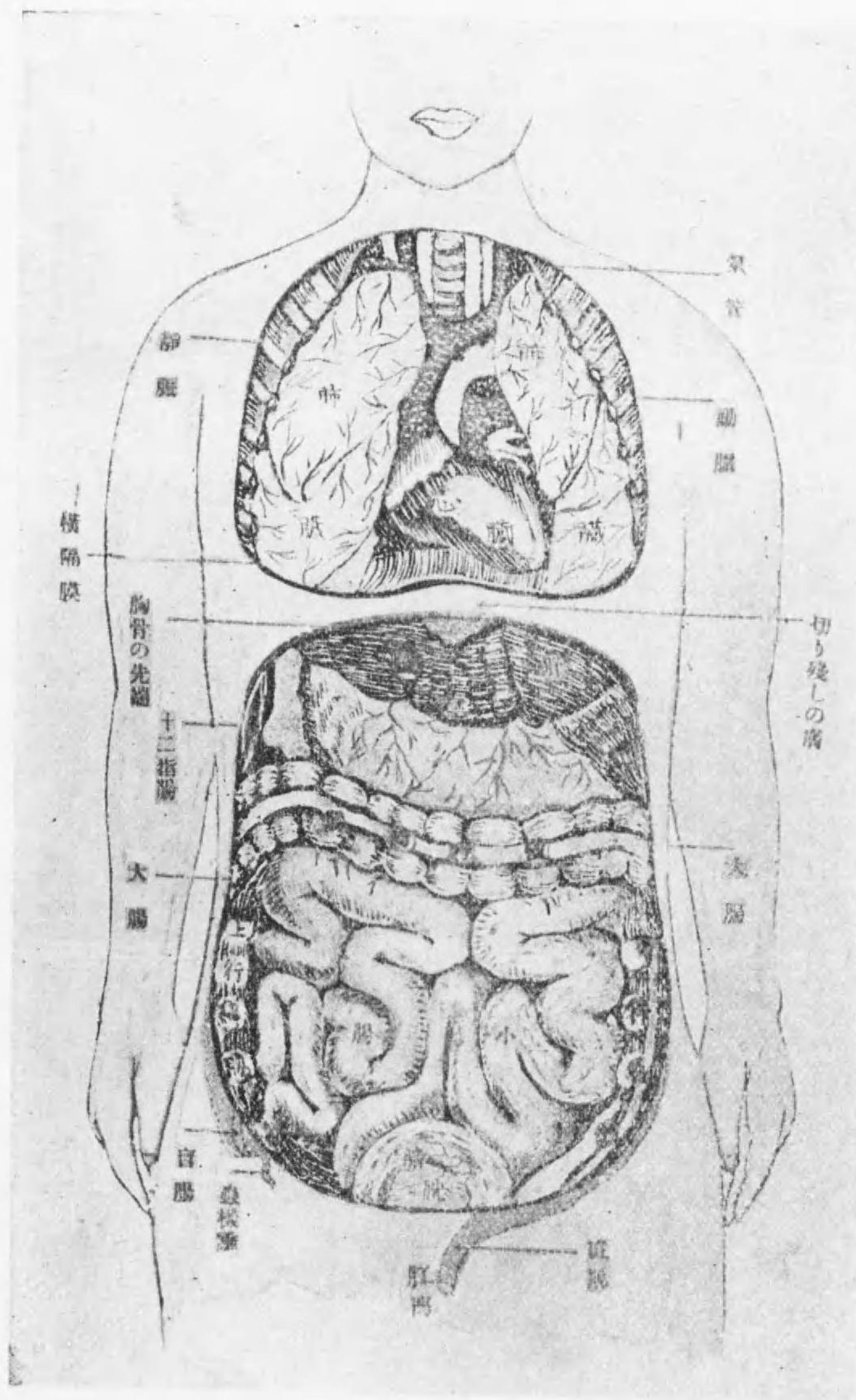
- 第一節 腸窒扶斯……………二八七
- 第二節 パラチブス……………二九三
- 第三節 發疹チブス……………二九四
- 第四節 赤痢……………二九七
- 第五節 虎列刺(亞細亞虎列刺)……………三〇〇
- 第六節 霍亂(吐瀉病)……………三〇四
- 第七節 麻疹(ハシカ)……………三〇五
- 第八節 風疹……………三〇八

人體內臟解剖圖

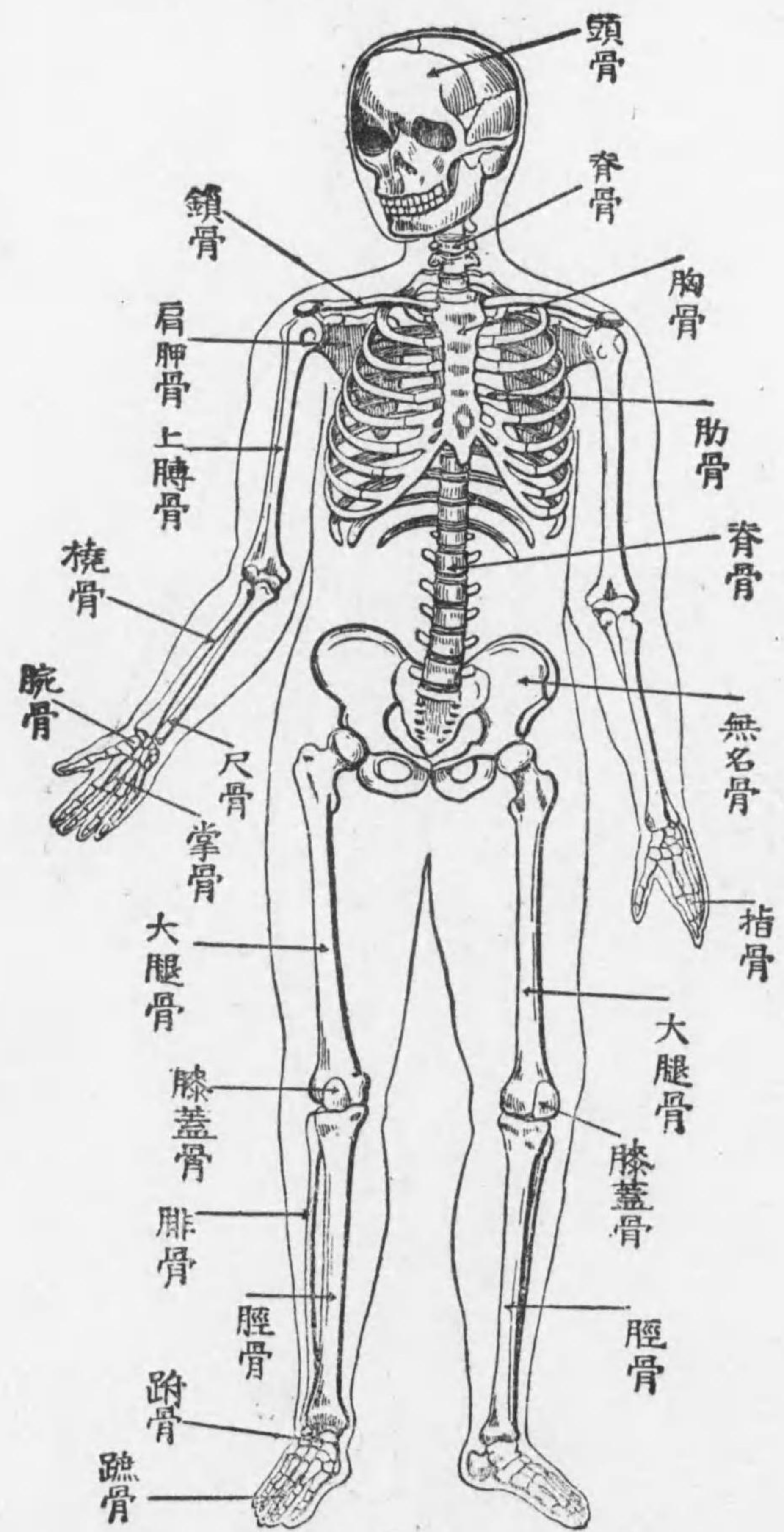


| | | |
|------|---------|-----|
| 第九節 | 猩紅熱 | 三〇八 |
| 第一〇節 | 痘瘡(天然痘) | 三〇 |
| 第一節 | 實扶埤里亞 | 三三 |
| 第二節 | 再歸熱 | 三四 |
| 第三節 | 麻刺里亞 | 三五 |
| 第四節 | 破傷風 | 三九 |
| 第五節 | 百斯篤 | 三三 |

病名目次 終



人體骨骼圖



圖解 藥用植物と其用途

附 病氣の容態並に手當法

第一編 體溫。脈縛。呼吸。

第一節 體 溫



體溫の區別 日本人の健康體のものは常に攝氏三十七度を常溫とする。この體溫は運動その他によつて昇ることのあるのは勿論だが、何の理由もなく常溫より昇つたり、降つたりするのは、何か體に病的の變化があるのである。そこでこの體溫は昇降の高低によつて醫學上次の如く區別されて居る。

(イ) 虛脫熱 攝氏三十六度以下に降つた熱のこと。
 常溫 攝氏三十六度乃至三十七度五分の體溫があるのをいふので、之れは健康體の體溫である。

(ハ) 輕熱 攝氏三十七度五分から三十八度五分の熱のあるのをいふ。

(ニ) 中等熱 攝氏三十八度五分から四十度の熱のあるもの。

(ホ) 高熱 攝氏四度十から四十一度五分の熱のあるもの。

(ヘ) 過高熱 攝氏四十一度五分以上の熱のあるものをいふのであるが、普通四十度以上を高熱といつてゐる。

二熱型 そしてこの體溫は病氣の性質と種類によつて種々の變化があるが、之れを溫度表に示すと一定の型を現はすものである、それを熱型といつてゐる。

(イ) 稽留熱 といふのは數日間殆んど同じ高さの熱度を示し、朝夕でもその差が一度を超えない熱のことで、腸窒扶斯の熱はこの型である。

(ロ) 弛張熱 といふのは或は昇り、或は降りなどして、朝夕の差が一度乃至一度五分以上ある熱をいふので、多くの慢性病とか、急性的の病氣に現はれるものはこの型である。

(ハ) 間歇熱 といふのは熱が急に昇るかと思へば、又急に降る。之れが一定の時間をおいて、正則

に反復する熱のことをいふので、『マラリヤ』の熱の様なものである。尚ほ之れを毎日一回發する熱を『毎日熱』といひ、隔日に一回發するものを『三日熱』。二日置きに發するを『四日熱』といつてゐる。

(ニ) 消耗熱 といふのは朝夕二度乃至四度の差を生じ、忽ち體力を衰弱せしむる熱で、之れは肺病患者に多い。そして熱の差が餘り烈しくないのを『亞消耗熱』といつてゐる。

(ホ) 再歸熱 といふのは寒けがしてブルブル、そして熱が高くなる。數日間續きて後發汗し、速に熱が降り、一二日間は無熱であるが、再び始めの高い熱に昇るといふ様な型を反復してゐるもので、その熱は多くの場合反復するに従ひその度が低くなるものである。

(ヘ) 分利 といふのは病の症狀が突然消散するときをいふので、熱の分利といふと、發熱の症狀が突然消散し、熱が降るのである。

(ト) 渙散 といふのは病の症狀が漸次に消散するときをいふので、熱の渙散といふと、發熱の症狀が漸次に消散するのをいふのである。

三熱の計り方 通常腋窩に檢溫器を挿し入れ、十分乃至十五分を経つて度を見るけれども、小兒又は意識を失つた患者の熱は腋窩で測ることが出来ないことがある。そんな時は腔内若しく

は直腸内に挿し入れて測るのだが、この場合は二度乃至五度位高いのが普通である。

第二節 脈 搏

心臓が伸縮して新しい血を体内に送り、古い血を受け入れるのだが、その伸縮して血を送り出す毎に、心臓は一種衝動的の運動をする、この運動は『搏動』といつて、各動脈血管に傳へらるゝものである。この搏動は動脈が身體の浅い部分にある場所を觸つて見ると判る。今脈搏を年齢によつて平均数を示すと。

- 一歳のもの一分間に 一二〇
 - 二歳のもの同 一〇〇
 - 三歳のもの同 九五
 - 二歳乃至六歳の者同 (八五乃至九〇)
 - 十歳乃至廿歳の者同 (七五乃至八〇)
 - 廿歳乃至五十歳の者同 (六〇乃至七五)
 - 老年者 同 (四〇乃至六〇)
- 之れは健康者の平均の脈搏であるが、健康者でも嬉しい場合とか、怒つた場合とかの精神感動

によつて多くなることがある、之れも心悸亢進といつて居るが大抵一時的の發作である。

病氣によつて、發熱した時は脈搏が多くなり、時には百六七十から二百位に上ることがある。チブスの時は熱があつても、脈搏は割合に少いもので、熱が四十度位でも百十前後である。脈搏もその病狀によつて左の種類がある。

- (イ) 大脈 とは脈が大きく強く指頭に感ずるのをいふので、發熱の場合、心臟肥大の場合、その他大動脈瓣閉鎖不全等、心臟の病氣に現はる、脈である。
- (ロ) 小脈 とは脈が小さく指頭に感ずるのをいふので、心臟瓣膜病等に現はる、脈である。
- (ハ) 速脈 とは脈の搏動が急に且つ速く指頭に感ずるのをいふもので、發熱の場合、強度の貧血の場合、その他心臟瓣膜病等に現はれる脈である。
- (ニ) 遅脈 とは脈の搏動が遅いことで、大動脈狹窄、心臟瓣膜症、腹膜炎等に現はれるもので、その脈が遅くて且つ緊張力のあるのを頭脈といつて腦膜炎に現はれる。
- (ホ) 硬脈 指頭で容易に壓迫し得られない脈をいふので、軟脈といふとその反對である。
- (ヘ) 脈の不整 とは或は細く、或は遅く、或は失くなる等の有様をいふので、之れは死に際に現はれるものである。

第三節 呼吸

はき出す息を呼氣といひ、吸ひ込む息を吸氣といふ。この呼氣と吸氣を合せて一呼吸といふのである。通常健康なる大人でも、一分間に十六乃至二十、初生児は一分間に四十四を算ふるもので、之れより増したり、減つたりする時は病氣があるためである。

(イ) 呼吸数増加又は呼吸頻數 といふのは息づかいが速く、その数の多いので、運動、精神感動等によつて増加すると、病氣によつては發熱した場合、肺炎、肋膜炎、氣管枝加答兒、心臟病、腹水等によつて増加する。

(ロ) 呼吸減少 之れは平均數より減少するので、氣管及び、氣管枝狹窄、腦疾患等の時に現はれる。

(ハ) 呼吸息迫 とは俗に息づかいの劇しきことである。

(ニ) 呼吸淺表 之れは呼吸運動が淺部に表れたもので、多くは速く小さいものである。

(ホ) 呼吸困難 凡そ呼吸には腹式呼吸と胸式呼吸との二種があるが、腹式呼吸は腹部と胸部とにて呼吸運動をするもので、男子の呼吸は之れである。胸式呼吸といふのは胸部のみの運動で呼吸するもので女子の呼吸は之れである。健康な人の呼吸は獨りで行は

れて居るが、一朝何かの故障を生じたときは、呼吸の自然運動は障害せられ、自分から勉めて呼吸を營む様な状態となり、終には『息苦しく』なることがある。之れを呼吸困難といふのである。

第二編 消化器系疾患

第一節 口腔の疾患

一口腔加答兒 俗に口熱といふ病で、口の中が紅くなつて、腫れ上り、灼く様な熱が出る。それから齒齦や頬が爛れた様になり、涎が流れ、口の中が臭くなる。

この病氣は色々な刺戟から來るもので、たとへば齶齒が尖つたり、新しい齒が銳利なるため刺戟を受くるものもある。又熱い飲み物、酸『アルカリ』等の腐蝕剤のため口の中の粘膜が刺戟されて起ることもある。その外胃病の熱、風邪の熱、咽頭、鼻腔の熱、飲酒、喫煙等から來ることもある。

手 當 口の中を清潔にし、含嗽を充分にし、急性のものは氷を口の中へ含ませる外、食後には必ず口の中を清潔にする様心懸けること。

幼児であつたらら鹽剝水、又は硼酸水で靜かに口の中を拭いてやるとよい。その外次の薬を用いて見るとよい。

◇ナタマメの味噌漬を喰ふと治る。

◇クコの根皮を煎じた汁で含嗽するとよい。

◇ナスのへたを黒焼にして塗ると、口中の粘膜又は舌の爛がよく治る。

◇ミシマサイコの根を煎じ出した汁で含嗽する(圖二一・一〇五)

■植物の説明 ミシマサイコ(繖形科)原野に生へて居る多年草で、三尺位に育つ。葉は細長くて先が尖つて居る。花は小形で、色は黄、夏になると枝の上の方に傘の様に咲く。

◇五十倍のエンボツ水で含嗽をする。これは注意して飲み込まぬ様になければならぬ。

エンボツ水は鹽酸化里といふ薬品を水に溶かしたものだか、この鹽酸化里は普通の人が行つては薬屋で賣らぬから、賣薬として賣つて居る『エンボツ』散を買つて來て用ゐてもよいが、薬局なら作へてくれる。

◇口熱のため齒齦又は舌から出血する様なことがあつた時にはインジュの花のまだ開かないのを採り、熬つて粉とし塗るとよい。

二眼角炎 この病は口の兩角が白くたゞれるやつで、俗に『烏が灸すゑた』といふものである

これは多く胃病又は妊娠の時にできる、胃病から來たものは胃を治すのが肝要だが、たゞれた處へは『イヒチオール』硬膏を一日二三回塗ると治る。

三潰爛性口内炎 この病は口の中が爛れ、殊に齒齦が紅く腫れ上り、齒と齒齦のところへ黄色の汚い苔が出来、チヨットしても傷がついて血が出る。

この病の出來易いのは體質不良の小供で大抵第一生齒期に起るものである、それが澤山人が居て空氣の流通が悪い家屋とか、船の中とかには流行性に起ることがある。その他水銀の中毒、壞血病、糖尿病等などから來ることもある。

この病氣の手當は第一の口腔加答兒と同じでよい。又薬用も同様にしてよい。

四鷺口瘡 俗に白舌といつて嬰兒の口中に、乳のカスの様な白いものが溜ることである。これは鷺口瘡菌といふ菌がついたもので、だんく殖えると遂には乳が飲めなくなることもある。だから保護者は常に幼児の口中に氣を付け、もしそんな疑があつたら重曹を十倍の水で溶いたものを『ガーゼ』に濕し、口の中をよくきれいにしてやると、同時に母の乳首も拭いておくようにするとよい。

◇番茶を煎じ『ガーゼ』につけて時々口の中を拭いてやつてもよい。



シムヂヤワ

◇ワラジ蟲と飯粒とをよく練り交ぜてつけてやると、不思議な様にすぐ治る。決して害にならぬから安心してやれ。

五口のアレ

唇がアれて困るときはキハダの粉を荒れたところへ塗布する

とよい。

◇蜂蜜を少しづつなめて見よ、

◇辰砂と『リスリン』を混ぜてつけてみよ。

◇『ラノリン』又は『ワセリン』を五六回塗つて見る。

六口が臭い 之れは口臭症といつて、やはり齒の衛生の悪いのや、胃病等から来るのだから、

その原因を治すのが急務だ。

◇二三日續けて輕の鹽辛を喰べて見よ。

◇茶をそのまゝ、少しづつ、嚙んで居ると、二三日で治る。

◇ザクロの實、又は葉を、薄い番茶色に煎じ出して、一日に數回含嗽をする。

◇『過酸化水素水』か『鱗片硼酸』の五十倍溶液水で含嗽すること。

第二節 齒の疾患

一齒痛

齒の痛いのは大抵ムシバ(齲齒)から来るのが多い。殊に小兒には多い病である。之れは平生齒を磨き、その攝生法に注意して、豫防しなければならぬが、次に誰にでも簡易に出来る治療法を列記して見よう。

◇スイセンの根とオオバコの葉とを煉り交ぜて、痛い齒の外頬に塗る。

◇カエブチ油を小さな脱脂綿球に浸して齒のウロへつめる。(圖三二・二七八)

◇ツワブキの葉を灸つて頬に貼れば痛みがとまる。(圖三・一九)

■植物の説明 ツワブキ(菊科)は暖地の海岸には自生のものもあるが、又庭園に栽植せらるゝ草で、誰れ

もよく知つて居るものである。葉はフキの葉に似た形をしてゐるが厚くて硬く、色は濃い緑色をしてゐるから然々異つてゐる。秋の末頃になると葉の根元から花の枝を出し、上の方がいくつにも分れ、その上に黄色くて徑一寸位で菊に似た花を開く。

◇アカザの葉をしほつて出た汁を痛む齒に滴下するとおきに治る(圖七・六〇)

◇チヨウジ油を脱脂綿に浸し、ピンセットでウロの中へ入れ、又頬に塗つて置くと治る。(圖三・三二二)

五・三二二

■植物の説明 チヨウジ(桃金娘科)は亞細亞洲の「モルツカ」といふ處に生育する常緑の喬木で、高さ一丈餘になります。葉は圖の様な全邊葉で、淡紅色の花弁をもつてゐて、形はザクロの花の小さな様なのである。この花が非常によい香がするので、丁子油を採る原料となる。丁子油を採るにはこの花がまだ蕾

の時に採つて蒸溜にかけるのである。

◇オロシ生姜にウドン粉をまぜて煉つたものを紙にのべて頬に貼る。

◇レンコンの葉を黒焼にして頬に貼る。

◇青松葉を痛む歯でかみしめてみると自然に治る。

◇サトイモを大根オロシですりおろし、紙に伸べて貼る。乾いたら貼りかへること。

◇重炭酸曹達か食鹽を脱脂綿につけて、痛む歯のウロに詰める。

◇食鹽を飯粒で煉り、紙に伸して頬に貼る。

◇牛の角を鮫の皮で摺り、その粉を痛む歯の根にすり込む。

◇歯痛のために發熱することがある。そんな時は『アセチール、サルチール酸錠』を一錠呑めば治る。

◇二齒かうイタラ 炭火に出来る白い灰を取つて、それと同じ分量位の食鹽を混ぜたものを、齒

磨粉の代りに毎朝使ふと自然に治る。

◇三黄色い齒 齒が黄色い人は『オキシフル』といふ薬品を藥種店で買ひ求め、少しづつ、脱脂綿

につけて拭けば白くなる。ブラシで磨こうと思ふなら水で二倍に淡めて使へばよい。

◇四齒が臭い 齒が臭い人も右と同様『オキシフル』で磨けば治る。

五齒ギシリをする

これは一種の癖で治療の薬品がない。唯紙か布を小さく折つて、奥齒で

六ハダキが痛む

これはノボセ、齶齒等から來るものもあるが、その他に麻疾、微毒等から來るものもある。

◇ミルラを煎じ出した汁で含嗽をすれば齒齦の糜爛したのが不思議に治る。(圖三八・三二九)

■植物の説明 ミルラ(橄欖科)は日本にはない木で、多くアラビヤの南部、「アビシニア」の北部に育つ。

葉は小さな葉が三つで一枚になつて居て、花は四つの花弁を持つて居る。この樹の莖から滲み出る黄色の乳を乾かしたものを「ミルラ」といつて藥種屋に賣つてゐる。日本藥局方では通經藥、健胃藥、含嗽料に用ふとしてあるものだ。

◇ハス(蓮)を黒焼にしたもの粉にして痛い齒齦に摺りつける。

◇エンジュ(槐)の花の蕾を炒つて、粉にし、痛い齒齦又は血の出た齒齦へ摺り込む。

◇キハダの粉末をそのまゝ摺りこむ。(圖二八・二四四)

七齒の養生 平素齒をきれいにしておけばよい。即ち食事後には必ず水なり鹽水なりで含嗽を

して置く。それからコンブ、フノリ、ワカメ、アラメ、ヒジキ等の海藻は石灰分に富んで居るから、これ等を少量づつ、食用することは大に齒を強壯にするものである。

第三節 咽喉の疾患

一急性咽喉加答兒 主として感冒より來るものである。その外塵埃の吸入、高聲を發した場合極めて熱い飲食物を食べたため發ることもある。又猩紅熱、麻疹等の傳染病。口腔、鼻腔の疾患等の蔓延から來ることもある。

風を引いて咽喉が痛んだり、腫れたり、爛れたりするのは大抵はこの咽喉カタルか、扁桃腺炎(扁桃腺炎は耳の下顎の兩脇が腫れ上る病氣)である。ところが微毒、結核、心臓、蓄膿症などのある人や、永い間始終嘔氣のある人などは咽喉癌であるかも知れないから要心をする方がよい。咽喉加答兒にかゝると惡寒がして熱があり、體中がダルク、倉慾進まず、頭痛がする計りでなく、ノドが乾いてヒツツク様になつたり、搔くてイラ／＼し、何かノドに支へて居る様になる。それから瘰癧が出て、嚔み下けるに難義計りでなく痛くてたまらなくなる。ヒドいになると嚔み込まない時の方が、嚔込んだ時より痛みが強いことがある。手當としては硼酸水で含嗽をし、食物は刺戟のないもの。冷い牛乳、粥汁、鶏卵、水飴の様なものを食べ、次の藥品を用ひるがよい。それから酒をやめ、煙草を控へ、局部を温包し、大聲を出さず、埃の多い處を避けることが肝要である。

二慢性咽喉加答兒

この病氣は實に患者の多いもので、二十歳から三十四五歳の男子には殊に多い。それも虚弱な體質をもつて居る者が侵され易いのである。この病は急性から變つて來るものもあるが、又單獨に起ることもある。これは前の急性と違つて熱はない。自分に分る様子としては咽頭部が乾燥したり、搔ゆかつたり、喉に何かヒツカ、つて居る様な氣持ちがし、しじゅう咳が出るのである。手當ては急性と同様でよい。

◇ゴマノハグサの根を煎じてのむ。(圖一〇・八六)

■植物の説明 ゴマノハグサ(玄參科)山野、路傍到處に生えてゐる雜草で、高さ二三尺になり、莖は四角で葉は先が尖つてゐる。花は綠黄色で唇の形をしてゐる。

◇サイカチの莢を煎じてのむ。

◇サルピヤの乾いた新葉(之れは藥種屋にあるが去年や二三年前のものはだめ)五グラムを五グラム熱湯に浸して出た液をのむ。之れは咽喉炎、喉頭炎によくきく。(圖三四・三〇〇)

■植物の説明 サルピヤ(唇形科)日本藥局方所定の藥用植物であるが、南部歐洲の原産品で本邦では園藝的に栽培しているのみである。高さ二尺位の宿根草で、莖葉共に白い毛で被はれてゐる。夏より秋に淡藍紫色の花を咲くが、その外に白も紫もある。一種赤い花を咲くのがあつたが之れはペニバナサルピヤといつて藥用にはならない。

◇ゼニアオヒの葉及び花を煎じ出した汁で、含嗽をすると、咽喉の炎症によい。(圖二・一八)

■植物の説明 ゼニアオヒ(錦葵科)庭園に植えて觀賞する草で、高さ二三尺から六尺位になる。葉は可なり大きく掌狀に淺く裂けてゐる。夏になると葉腋に紫紅色又は白色の五瓣花を開く。

◇ジンチヨウゲの白い花を熱湯に浸して出た汁で、含嗽をすると急性咽喉炎によくきく。(二四・二二二)

■植物の説明

ジンチヤウゲ(瑞香科)支那から來た小木で、高さ四五尺になり、葉は厚くて光澤がある。花は紫色か、白色で何れも著しい芳香がある。庭園樹として到る處で栽植するもので誰も知つてゐる。

◇ハマメリスの葉を煎じ出した汁で含嗽する。(圖三六・三二〇)

■植物の説明 ハマメリス(金縷梅科)日本藥局方所載の藥用植物であるが、本邦では多くマンサクの葉を代用してゐる。本書所載の圖又マンサクを掲載せり。マンサクは到所の庭園に栽植されてゐるものである。

◇ユスラウメの小枝か葉を嚙んでその汁を吸ふ。又實を干して粉とし、飯粒でねつて外部から貼る。(圖二七・二二二六)

三扁桃腺炎 咽喉加答兒と同様に咽喉が痛み、腫れ上る病氣で、初め熱が出る。大抵は感冒に

でもかゝつたのだらうと、感冒藥でも呑んでゐるが思ふ様に發汗もせず、ハカクしく治らないその中に一日二日してドウも咽喉が痛いといふ様になつて初めて扁桃腺炎から來た熱だといふ様な經過で來る。口を大きくあかさせて舌を壓へ、よく醫者のする様にアーアーと聲を出さ

見ると、咽喉の奥の方の右か左かどちらかが紅くなつてハレてゐるものである。手當てとしては咽喉の處を外から濕布して硼酸水で含嗽をする。その外の藥用は咽喉加答兒に従つてよい。

第四節 食道の疾患

一 食道狹窄 この病氣には三通りある。

(一) 何か食道に停滯した場合に起る狹窄。(之れを壁内性食道狹窄といふ)

(二) 癌腫が食道に出來た場合に起る狹窄。(之れを壁質性食道狹窄といふ)

(三) 食道に近き所の病氣から受ける狹窄、お多福風とか、淋巴腺の腫れ、動脈瘤等から起る場合。(之れを壁外性食道狹窄といふ)

(二)の場合にはよくあることであるが、次の手當をしたらよい。

◇餅がつかへたら、紙捻を鼻に突込んでクシヤミをすると飛び出す。

◇入齒や小兒の玩具などが咽喉につかへた場合は、胸に枕をあて俯向けて寢させ、脊を強く叩くと出る。若しそれで出なかつたら醫師に器械で取つてもらふより外ない。

次手だから咽喉に骨が立つた時の手當を一寸書かう。

◇魚の骨が咽喉に立つたら、生卵をのむと、卵のドロ／＼が包んで抜けて行く。トコロ芋でトロを作つて食べてもよい。

◇大きな骨で口を開いて見える處なら、ピンセットか何かで抜てもらふこと。

◇ユスの種子を砕いて煎じて飲む。

(注意) よく骨がたつた時、飯を鵜呑みにしてとる人があるが、若し骨が硬いと時として傷を大きくすることがあるから要心なさい。

二 食道癌

この病氣の原因は醫學界で未だ明かでない。だか何か變つたものを呑み込んで、傷が出来るか、極く熱いものを呑み込んだため火傷をするか、酒のやたらのみなどが誘因となつて起る事は事實で、大抵四十歳から六十歳の男子に多い。

この病氣にかゝるとだん／＼嚥下困難となり、喰べたものを逆したり、それがため衰弱甚だしくなり不治の病となるのであるが、醫師の治療に待つより仕方がない。

三 壁外性狭搾

はその病氣の原因を治せば自然に治癒するものであるが、狭搾の重い場合は牛乳とか、鶏卵の白味とか、トロロの様な流動物を飲んでみるがよいが、一層烈しい場合は牛乳を薄めてのむか、砂糖水、ソップをのむ。尙一日に三四回滋養灌腸をしてもらうがよい。

四 食道炎

これは食道に熱を持つ病氣で、物を嚥み込む時、甚だしいのは唾を飲み込んでも胸

の眞中の骨即ち胸骨の上の方が痛むもので、多くは大酒、熱い物を飲み込んだ後、或は咽喉加答兒、麻疹などから來るものである。

この病氣にかゝつたら刺戟物と堅い食べ物を止め、なるべく流動物か、粥汁等を食べて居ると治るものであるが、酷いになると、中々幾日も治らぬ事がある。そんな時は醫師に見てもらふがよい。

第五節 胃 の 疾 患

單に胃病といつても胃病にはその種類が澤山にあるから、その種類によつてなるべく誰にでも判断がつく様、病氣の模様を書いておき、薬を用ふる前に先づその容態を判断して、これならこの薬を用ひてもよいといふ自信がついてから、服薬する方が安心である。それだから容態の分らぬのは醫師に見てもらつてからがよい。そしてなるべくなら醫師に相談してから用ひれば尙更安心の方法である。然しそういう事も本書の治療薬物は一寸見立て違ひに飲んだため大邊なことになるといつた様な薬はない。大抵は無病な人がのんでも間違ひの病人がのんでも差支へないものであるが、中には特に使用方に注意しなければならぬものもある。そんなのはその項の處に特別に注意してあるから、それによつてもらへばよい。安心のため斷つておく。

一 胃加答兒

之れは一般に腹痛といつてゐる。この胃加答兒には急性と慢性とがある。原因は重に暴飲、暴食、不良或は極熱いもの、又極冷い飲食物を用ふることから起るので、俗に食い氣がなくなつたり、胸が悪くなつたり、舌には白い苔がついて、時には頭痛、眩暈、身體がゲルクなつたりする。體温も昇ることもあるが、高く昇るのは傳染性の胃加答兒といふので、たちがよくないのだ。一般に胃加答兒といふのは決して高く昇らない。之れは急性の方だが、この急性を充分に治さないと慢性になるのである。

急性胃加答兒には絶食療法といつて、發病したら廿四時間位は全く絶食し、それから二三日は牛乳とか、オモユ位を食べ、次は半熟卵、粥、位を食べるがよいが、軽いのはそんなにせずと節食療法といつて、極く少しづつ、食べてゐるといよいよこの病氣には言ふ迄もなく、酒、香料食物は禁物である。

次に記した藥物は急性、慢性のどれに用ひてもよい。

◇ タンポポの根を花の咲かぬ前にとり、陽干にしてしまひ置き、病氣になつたとき一日一二匁位づつ、水一合で煎じてのむ。五六日で大抵全快する。

◇ タラノキの根皮を一日三匁づつ、煎じ、毎食一時間前（なるべく空腹にした方がよくきく）服用すると、只に胃加答兒計りでなく、弛緩してゐる胃腸の筋を引締め、その活動を順にし、

胃液、腸液の分泌を盛にし、食慾を進め、消化をよくし、便秘を整へ常に健康體となる。殊に胃癌に對しては他に及ぶもの、ない程の特効を顯はし、尙胃潰瘍、胃痙攣、及び嘔吐のやまな様な胃病にも奇効がある。（圖二五・二二四）

■ 植物の説明 タラノキ（五加科）名ウドモドキといふ木で、山野に自生してゐるが、又庭に植えられることもある。高さ二丈餘にも育つ木で、幹が一本直立して枝がなく、葉にも幹にも刺が一パイにある。葉の出るときは幹の先が傘の様になる。新芽は非常に香氣が高い。山家ではこの新芽を摘み取り茹で、浸し物、和へ物にして食べる。夏花が咲き、秋丸くて黒い獨活に似た實になる。

◇ コシヨウの實八九粒づつ、毎朝食前に白湯でのむ。

◇ ニガヨモギの莖、葉、花共に煎じてのむ。（圖五・四四）

■ 植物の説明 ニガヨモギ（菊科）歐洲原産の宿根草で、強き芳香を有し、高さ四尺位になる。葉には絹絲様の毛がある。花は黄色である。

◇ トチノキの果實を煎じてのむと胃加答兒にきく。（圖二五・二二七）

■ 植物の説明 トチノキ（七葉樹科）山に生えてゐるが、又庭などにも栽培せらる、大木で、葉は紅葉の葉の様で一層大きく大抵七枚の小葉から出来てゐる。花は白色だが少しく紅味を帯び、果實は大形の種子がある。

◇ アルテアの根の浸劑は胃腸のカタル性疾患にきく。（圖三一・二七一）

■ 植物の説明 アルテア（錦葵科）は歐洲原産の宿根草で、ゼニアフィによく似て居る。花は淡紅色大形である。日本藥局方指定の藥用植物で、胃腸の刺激を緩和する目的で、粘滑藥とし、又丸劑、錠劑の賦形藥とす、とある。

◇ハマナの莖葉をよく干し、約五匁位を水三合にて三十分煎じ出し、朝と晝の二回にのみき

る。夜はのまぬ方がよい。これは胃痛にもきいたといふ人がある。(圖三・二七)

■植物の説明 ハマナ(藜香科)一名ツルナともいつて、海濱には自生のものもあるが、又畑に培養されてある草で、葉の葉と同様浸し物などにして食べる。この葉は三角形をしてゐて、柔かく、稍厚みがある。花は黄色で小さく葉と莖の間に咲く。

◇センブリの一本分位を細く折り、湯呑茶碗に入れ熱い湯を注いで毎食後三十分間位したららむ。

又十本位を水一升にて六七合に煎じ詰め、毎食前、食後、各三十分位に茶呑茶碗に一杯宛のむ。つまり一日六回のむのである。大抵のは五日乃至一ヶ月位でなせる。(圖一・九二)

■植物の説明 センブリ(龍膽科)一名トウヤクともいひ、山野に自生する小さな草である。この草は全體に強い苦味がある。花は白色だが、紫色の條をもつてゐる。

◇アザミの根を夏の土用中にとつて、陰干しにして貯へおき、入用のとき煎じてのむ。

◇マツノ樹の若葉(どんな松の葉でもよいが、山の中にある赤松の葉なら殊によい)を毎食後四五本位づつ、嚙んで、その汁を吸つてゐるといよい。

◇小供が消化不良で下痢を起した場合には「タンニン酸アルブミン錠」(これは藥種屋にある)をのませると治る。

二胃擴張 俗に溜飲といふ病で、胃がいつも擴がつてゐる病である。この病氣にかゝると、胸

(胃の部)が張つて苦しく、食慾がへり、口がムヤミに渴き、イクラ水を飲んでもまだ飲みたく、食後には胃が痛んで、嘔氣が出たり、時には吐瀉することがある。

これは溜飲だと氣付いたら、一日に三度食へなくてはならんといふことはないから、極く少しづつ、何回にも食事をする。それから便通に氣をつけ、通じがなかつたら、適當に通じをつける。(下劑の項参照)水が飲みたくもなるべくのまぬ様に、それから胃の中で水がガブ／＼揺れる様な音がしても氣にしない様にする。食物をたべた前後には三十分位靜かに寝るがよい。尙藥としては胃病の項、健胃劑の項に掲げたもの、中から撰んで服用するがよい。

三胃潰瘍

又胃瘍ともいつてゐる。この病氣の原因は未だ明でないが、胃酸過多症か、極熱い食べ物好きな人、結核、梅毒、黄騰等の人に多い様で、男子より女子に多く、大抵二十位から四十位のものが多い。

何んでも食事をして二三分位経つと心窩の邊が刺す様にひどく痛み、嘔きたくなり、嘔いてしまふと痛みがなくなる。(反對に腹がへると痛むのは胃酸過多症にかゝつてゐる)そして痛んだところを壓して見て一層ひどく痛む。(反對に壓すと痛みがいくらか樂になるのは胃痛である)若し潰瘍が食道に近いところにあると、食物を嚙み込む毎に痛み、ひどくなると吐血することがある。吐血した時は室を稍薄暗くして出来るだけ靜に仰むけに寝るがよい。それから

胃の部に氷囊をあて、冷し、早く醫師の手當を受けるがよい。

全體にこの胃潰瘍にかつたものは食欲が亢進して、食へ物がうまい人が多く、便は大抵秘結する。然し食物を食へたあとで痛むのが常だから、その食後の痛みを恐れて食はなくなるのがある。之れを恐食症といつてゐる。併し神経質の人が多くこの病にかゝり易いものだから一寸した胃病でも、已は胃潰瘍にかつたのではないかと氣にして騒ぐことがあるが、決して氣にかけない様にするがよい。あまり氣にかけると遂には本物になることがある。

◇何をあいても先づタラノキの根皮を煎じてのむがよい。

◇ツルナの干したのを胃病の項と同様煎じてのむ(圖三・二七)

◇その他胃癌の項の諸藥を用ひて見よ。

四胃癌 この病は四十歳以上の人が多くかゝる様である。そしてこの病氣の起る原因は未だ充分に明瞭でないが、遺傳性があるといふことはたしかである。それから慢性の胃潰瘍慢性の胃加答兒などにかゝつて居る人がかゝり易いのも事實だ。その外湯豆腐の様なもの、熱いもの、たべるとき、口の内ではコロコロとごまかして、グイと飲み込み、胃へはいつてから胃がキューと痛むことがあるが、これがため胃がヤケドをする。こんな場合はよくあることだが、之れは胃の外傷といふので、度々こんなことをすると胃癌になることのあるのも事實だ。尙平素刺

戟性の食物を過度に攝取する人などもこの病氣にかゝり易いのであるから、何んでも平素要心をしてこんな助からない病氣にかゝらない様にする事が肝要である。

胃癌の症候は出來てゐる處によつて多少のちがひがあるが、初期には一般に食欲が進まなくなり、殊に今迄好きであつた肉類が急に嫌ひになり、食後に胃の處がおも苦しく、何んだか胸がはる様に感じ、オクビが出たり、時には嘔氣がするが、病氣がだん／＼進むと、今度は胃の處が痛くなり、嘔氣が烈しく、嘔吐物には血液が混つて、珈琲の滓が入つて居る様になる。

この病氣にかゝると初めから急に衰弱して瘦せるものである。それから、胃と食道の界(贛門部)に出來た場合は食物の嚥下に困難し、腸との界(幽門部)に出來た場合は胃が擴張する。便通は或は頑固に秘結するか、反對に下痢をする。或は又便秘と下痢とが交代に來ることがあつて一定しない。それから、往々熱の出ることもある。

右に述べた様な容態の人はその病源を考へ、なるべく醫師の参考になる様な事實を述べ、醫師の治療を受けるがよいが、一方自分がこの病氣なら自分で、或は自分がこの病氣の人を看護する立場にある場合、先づ醫師の治療と相待つて食物に注意することが肝要である。胃癌患者の食物は一般に流動性食品か、或は極めて軟かくて消化し易く、且つ充分熱量を出す

食品を撰ばなければならぬ。元來この病氣は食欲の進まない病であるから食品の種類、調理の方法なども千差萬別であるから、出来るだけ患者の好きな様にしなければならぬ。適當な食品としては

鶏卵の生ま又は半熟、『ペプトン』、『ソトマーゼ』等の人工製品、滋養に富んだ流動食品、牛乳、小麦の煎汁、葛湯、粥汁、細に削いた犢牛肉、鶏の白肉、若き鳩の肉等、軟き刺身、蠣、野菜をよく煮て叮嚀に磨り碎したもの。番茶、少量の葡萄酒などは適當な食品の部である。が、馬鈴薯、黒麵麩、葉菜類、麥酒の如き飲食品は絶対に禁じなければならぬ部類である。

現在の醫學界ではこの胃癌といふ病氣は早く発見して外科手術をするより外仕方ないと思はれてゐる。然しそれが出来る人は結構なことであるが、若し発見が遅れたとか、発見が早くも體質上手術することが出来なかつたり、或は經濟上の關係が許さなかつたりしたならば手を束ねてゐなければならぬ状態である。するとこの病氣にかゝつたら治らぬといふよりは寧ろ死を待つ病氣といはなくてはならない様で、彼の肺病にも劣らぬ恐ろしい病氣である。

併し幸なることには、この全癒難事の病氣が一種の民間療法で大分好成绩を擧げてゐるのは實に同患者の一大福音である。であるから萬一胃癌でないかとの疑のある人、或は醫師の診斷によつて確定した人などは一日も早く左に記述した治療を行つて快癒されたらよからうと思

ふ。先づ左に胃癌の特効薬として多数の全快者の有つた薬物を記述しよう。

◇クサノオウといふ草は『ペリドニン』なる成分を含有して居るから、胃癌の特効薬となる。先づこの草の莖、葉を五分の割合に取り一處に搗き碎き、之れに『アルコホル』六分の割合に浸しておくと、黄色い『アルコホル』液が出来る。(之れを白屈菜丁幾といふ)この液を一回分として五六滴から、二十滴位の間づ、一日數回飲む。

又莖葉を陰干ししておき、凡そ一匁を二合の水で約一合五勺位に煎じめつて二日分とし、一日三回に分服しても特効がある。(圖一六・一三四)

◇ナスのヘタを陰干しにしたものを黒燒にして粉にし、毎食後に小匙二三杯位づ、飲んでゐると大抵なのは根治出来る。

◇コンジュランゴの樹皮を浸出煎用すれば胃癌、その他の癌腫に効がある。この植物は日本藥局方指定の藥用植物であるから、製品としても藥種屋に販賣してゐる。

◇ジュンサイの全體を煎じてのめば、初期の内なら根治出来る。(圖二〇・一七八)

■植物の説明 ジュンサイ(睡蓮科)一名ヌナハともいひ、古き池沼等に自生する宿根草で、葉は楕圓形で莖と葉の裏には寒天様の粘液がついてゐる。新芽には殊に澤山についてゐる。夏になると暗紫色の小々な花を日中だけ開く。若芽は三杯酢などにしてたべる。

◇ハトムギの實か、ジユスタマの實でもよいから、一握を二合位の水で煎じ、湯茶を飲む代りにのんでゐるのも痛みが止り、自然に樂になり治つて行く。

◇ミヤマトベラの根を適宜分量の水で煎じ出して飲む。(圖二六・二三二)

◇アカメガシワの根又は枝、幹の皮をはぎ取り、水適宜で煎じ出してのむ。これは経験者から非常によくきくと報告があつた。(圖二二・一九六)

■植物の説明 アカメガシワ(大戟科)一名アツサ、アカコサイバ、又シヨウケンボク、アカカジ、アカマ、アカガシハ等澤山の異名をもつてゐる。元來山野に自生してゐるものだが、時には庭木などに植えられてゐることもある落葉の喬木で、葉は大きいのは三四寸位になる。この葉の出初めには美しい紅色をしてきれいである。これが赤目柏の名がある譯である。雌株と雄株と別で、夏になると枝の先きに穗状をなして綠黄色の細い花が咲く。果實は外面に刺が多く、熟すれば實が割れて子粒を吐き出す。

五胃下垂 口繪彩色版に示した様に胃臟は胸部の下部心窩の邊にあるのが普通だが、それが下に垂れ下り臍の下まで來ることがある。之れを胃下垂といつてある程度迄は先天的體質のものはあるが、大抵は腹壓の關係から起るもので、細卵の胸廓を持つてゐる人か、上腹部を烈しく締めたり、出産後とか、腹水を取つた後とか、若しくは脂肪過多症、その他胃腸、胃擴張の患者等に發ることがある。その外小兒を背負つた紐のかけ方、小兒のつけ紐の工合等で發ることがある。

胃下垂といふ病氣は右述べた様な原因で發るのであるから、特に藥物はないが、治療法としてはその原因となる習慣を去り、常に胃の養生をし、全身の營養を増す食事を攝り、食事は一回に澤山取ると却つて下垂を増す心配があるから、少しづつ、一日五六回に食べるがよい。それから飲み物を控へ、食餌によつて便通を計るために、果實の皮と核をとつて食べるか、野菜を用ふるとよい。

六胃痙攣 この病は胃神經性痛といふ病で、一般に癪又はサシコミといつてゐる。その原因は胃又はその近邊の病氣から來たり、脊髄癆、『マラリヤ熱』の傳染、『ニコチン』等に中毒した時等から來るものであるが、婦人では生殖器の病氣から反射的に發ることがある。

右述べた様な次第であるからこの病氣の發るのは胃が悪くて起る計りではない。従つてその容態にも種々區別があるが、一般的には俄に痙攣と疼痛があり、その疼痛は或は揉むが如く、或は灼くが如く、或は刺す様で、極度になると虚脱症状を起すことがある。然しこの疼痛は心窩部に最も劇しいものであるが時には背部、臍部に迄及ぶことがある。強く壓へると軽く快地よくなる。俗諺に癪に嬉れしき男の力とは蓋し之れのことである。それからこの癪の痛みは食物によらぬことが特徴で、食べたものが消化し易いものを用ゐて居ても起ることがあるし、害のある酒、香料等を用ゐても起らぬことがある。

手 當

起つた時は痛みにたへかね返り返るものだから、後からシツカリと壓へつけ、多少緩やかになつて來たらば靜に寢かせ、心窩の邊に温器法（葯弱若しくは懷爐の類）を施すか或は芥子泥を貼るとよいが、軽いのなら日本酒三勺位飲んでも治ることがある。殊に本病に對しては精神の安靜を計ることが最も肝要なることである。

七胃酸過多症

この病氣は胃の内部から分泌する胃酸が多過ぎるより起るもので、中年者、殊に男子に多い病である。之れは酒を飲んだり、煙草の契み過ぎ、或は香料を澤山に食べる等から來る。

通常食事の後一時間位経つと胃部に疼痛を起し、スツバイ水が出たり、スツバイゲツプが出る。便は通常秘結し、食慾が進む。そしてこの病氣は腹がすいて來ると疼痛が發るが、その時少し計りでも、食物を取ると疼痛が幾分去るものである。

手 當

平日の手當としては食物をよく嚙んで喰べ、副食物としてなるべく胡麻鹽を多く喰ふとよい。それから食前に必ずコップに一杯の水を飲んでおくるとよい。

痛んで來そうな時は重炭酸曹達を小匙に一杯位の水で飲む。

痛んで來たら番茶の出がらしをよく煎じ出し、湯呑におろし大根を少し計りと、醬油少しを注した中へ、煎じ出した熱い番茶を注ぎ込んで一合程かのむと治る。

◇クログコマを鹽と共に炒つたものを飯にふりかて食へば、この病氣は自然に治る。

八嘔吐

この病氣は胃に變化がなくて發るもので、多くは腦脊髄の病氣から發つたり、或は男女生殖器、咽頭、腹膜等の疾患より反射性に來たり、或は神經衰弱症、「ヒステリー」等の一分症として現はれることもある。

手 當

この病氣にかつたら成る丈け安靜にし、精神の刺激を避け、食物は消化し易きものを冷して喰べるとよい。何れも一時に澤山を取らず、一日五六回に分けて喰べるがよい。

九吐血

右の嘔吐が度重なるに遂に血が混つて出る様になる。之れは胃から出るもので、普通は稍黄色いか、赤黒い色で、凝塊になつて出る（胃から出る血は吐血で、色は黒赤いものだが動脈に傷が付いて出る場合は吐血でも鮮紅色なことがある）咳をするとき出る血は鮮紅色で之れは咯血といつてゐる。咯血は肺から出るので、痰に血が混つてゐるのは血痰といふのである

手 當

吐血したら靜かに寢て、心窩の邊を氷袋で冷し、醫師の來るのを待つがよい。若し家庭で治療しようとするならば次の藥を用ふるがよい。

◇ハスの根の節のところにある黒いものを切り取り、それを嚙んで汁を吸ふとよい。

◇テンモンドウの根を細く刻み、之れを煎じてのむ。（圖三・二五）

植物の説明 テンモンドウ（百合科）一名クサスギカズラといつて海濱に自生してゐるが、又庭園に栽培

せられることがある。莖は蔓性で他物にカラミ着く。葉は鱗片状になつて小さく、その腋より針の様な緑色の小さな枝を出して一日葉の様に見える。夏になると淡黄色の小さな花を通常二三個位づゝ咲き小豆大の紅い實がなる。

◇ニンニクの根にある球を煎じてのむとよい。(圖六・四八)

〔附〕 健胃強壯劑

◇タンポポは健胃強壯劑として最も安價で、最も効能のある薬用植物である。この植物には澱粉「イヌリン」なる有効成分が含まれて居るから薬効があるので、日本薬局方でも胃病の薬物として指定されて居る位である。タンポポは誰もよく知つてゐる野に咲く愛らしい草で、早春開花した様は實に春の氣分を一層色どるものである。そしてこれには黄色い花を咲くものと、白い花を咲くものとあるが、何れも薬効には變りがない。それから薬用として効能の多いところはその根である。

タンポポを薬用として用ひんとするには、先づ花の咲かない前、蕾の出た頃、その全部を抜き取り陰干しにしておき、五グラム乃至十五グラムを水二百グラムにて煎じ出し、一日數回づゝ、飲用すればよいのである。

◇アリタソウの葉を陰干しにしておき、之れを水で煎じ出し茶の代りにして飲む。之れは胃病を治す計りでなく、驅蟲の効能もある。(圖二一・一八六)

◇クログワイの根にある球を煮て食べると、食慾を増し、胃の消化がよくなる。(圖二〇・一七五)

■植物の説明 クログワイ(莎草科)池、沼等の水中に自生する多年草で、地中に球根があり、之れから圓い莖を叢生すること二三尺に達し、澤山の節があつて指で壓すと、ピチ／＼と音がする。秋になると莖の頭に一寸許の穂がつく。

◇センブリの莖葉を煎じてのむ。之れは健胃苦味劑として昔から重用されてゐる。(圖一一・九二)

◇トチノキの實を煎じてのむと胃病を治し、胃を健康にする。(圖二五・二二七)

◇ニガヨモギを開花の時に莖・花・葉共に陰干しにしたものを煎じてのむと、胃病が治り、強健な胃となる。(圖五・四四)

◇バイカオウレンの根は苦味強く、胃腸の薬になるから適じ煎じ出してのむ。(圖一一・九四)

◇リンドウの根を乾して一日に〇・三グラム乃至一グラム以下を煎じてのむと胃弱が治る。

これはリンドウ計りでなく、これと同じ種類にツルリンドウ、ハルリンドウ、オヤマリンドウなどいふものがあるが、それ等も健胃劑となるから、煎じのむとよい。(圖一一・九一)

■植物の説明 リンダウ(龍膽科)山野に自生する多年生の草で、高さ一尺位になる。葉には柄がない。秋になると藍色をした筒の様な花がさく。ツルリンドウは山國の陰地に生える蔓草で、リンドウに似た藍

色の花を咲く。ハルリンダウは到る處の原野に生えてゐる草で、四日頃にリンダウに似てゐるが稍小さな花が咲く。次のオヤマリンダウは北地の高山に生えてゐる草で高さ一尺位になるものもある。花は紫碧色をして居る。

◇マツの生葉を毎食後四五本づ、食べるか、或はホウロクで炒つて粉とし白湯で飲むと胃が丈夫になる。

◇ホホノキの實を乾かし、煎じてのむ。

◇サネカスラの果實を煎じて飲むと健胃強壯劑となる。(圖二四・二〇九)

◇サイハイランの花の咲くころ、その根元に出た子根を取り、熱湯に浸した後、之を乾燥したものを『サレツプ根』といふが之れを健胃劑として煎用すれば特効のあるものである。(圖一六・一三九)

◇ゲンチアナの根を煎じてのむと、健胃強壯劑として特効がある。(圖三三・二九〇)

■植物の説明 ゲンチアナ(龍膽科)日本薬局方指定の薬用植物であるが、歐洲の原産で、日本には生えて居ない。花は茶せん状をなし黄色で、内面に線條がある。高さ三四尺に達し、多年生の草である。

◇キハダの果實又は樹皮を煎じてのむと、健胃止瀉劑として特効がある。(圖二八・二四四)

◇カナムゲラの果實は苦味があるが、之れを適宜の分量丈け水で煎じてのむと健胃劑となる。(圖一〇・八七)

◇カワヤナギの樹皮は煎じてのむと健胃劑となること不思議な位である。

◇カワラケツメいの莖葉を干したものを茶の代りに熱湯の中へ入れて浸出せしめてのむと、消化不良及び胃弱に効がある。(圖一三・一一二)

■植物の説明 カハラケツメイ(荳科)一名ネムチャ、ヒメチャ、コウボウチャ、マメチャ等の別名がある植物で、野原、路傍等に自生し、高さ一二尺の一年草である。夏から秋にかけて蝶形をした黄色い花が咲くが、半開きである。花がすむと小さい莢になる。

◇ウイキヨウの實から搾つた油は『ウキキヤウ油』といつて健胃劑に重用せられる。用量は一日に五グラム乃至十グラムと規定されてゐる。(圖三一・二七五)

■植物の説明 ウキキヤウ(繖形科)一名クレンオモといひ『コーカサス』地方より地中海の沿岸西部の諸地に産する薬用植物だが、我國でも各地に栽培せられて居る多年生の草で、莖葉共に一種の香氣を有し、高さ六七尺になる。夏日黄色で五瓣よりなる小さな花が咲く。日本薬局方指定の薬用植物である。

◇イヌブナの樹皮を細く剉くと汁が出る。それには澤山の『グアヤゴール』といふ成分を含んで居るから、食物の消化を助け、胃腸を健全にする。(圖二七・二三九)

■植物の説明 イヌブナ(山毛櫸科)一名クロブナ、イホブナといひ、山野に自生する落葉喬木で、長卵形の尖つた葉をつけ、半ば殻斗に包まれたる堅果を結ぶものである。

◇カスカリラの樹皮からとつた『カスカリラエキス』か『カスカリラチンキ』は下劑を兼ねた健胃劑となる。(圖二二・二八〇)

■植物の説明

カスカリラ(大戟科 西印度「パハマ」諸島に産出する喬木で、葉は卵なりであるが先が尖り、基脚は丸くなつてゐる。この葉の裏は一面に帯黄銀白色の鱗片が密布されてゐる。花は單性で雄花を上

に雌花を下に咲く。日本薬局方指定の薬用植物である。

◇カルムの實一分に水二十分を混じ、これから十分を蒸餾して取つた液は食欲、缺乏、胃痙攣に特異の効がある。(圖三二・二八四)

◇シヨウスクの果實を煎用すれば健胃劑として効がある。(圖三四・三〇二)

■植物の説明

シヨウツク(藜科 印度「マラパール」半島の海岸に多く産出する多年生の草で、高さ十尺位になる。花は莖の上方に咲き、形は生姜の様であるが、唇瓣が藍色で、縁が黄色である。果實は覆果で五六個の種子がある。日本薬局方指定の薬用植物である。

◇クワツシアの木質部を浸出した液は健胃劑として重用せられてゐる。用量は一日數回〇・五グラム乃至一グラムを用ふることになつてゐる。之れは日本薬局方指定の薬用植物である。

◇シャウガの根(之れは根の太いところで、實は地中にある莖である)を苜蓿根といつて、芳香性健胃劑に使用する。

ウワンレナグの花を煎じてのむと、消化を助ける効がある。(圖四・三三)

◇ミルラの莖から浸出した黄色の乳液を「アルコホル」に溶かしたものを「ミルラ」丁幾といつて健胃劑となり、又通經藥ともなる。(圖三八・三三九)

◇マチンの種子から製して番木鱈越幾斯又は丁幾は胃加答兒を治し、又神經麻痺に使用する。(圖三六・三二二)

■植物の説明

マチン(馬錢科) 番木鱈とも稱へ東印度の原産で、錫蘭、東印度から濠洲の北部に自生し高さ十五尺位に達する常綠樹で、葉は卵なりをなし三又は五の筋がある。花は枝の先に咲き、長い筒状をした小さな花で、直径五六分位の扁平で、澤山に毛のある種子をもつてゐる。林檎大の漿果を給ぶ

◇パンカジュの枝葉から出る汁には「パバヨチン」といふ成分を含み、蛋白質を「ペプシン」に變化させる作用があるから、健胃劑として有効な藥品の一つである。

◇バインアツブルの果汁は「ペプシン」といふ成分を含んでゐるから、消化機能の障害を起した胃腸などによく蛋白質を消化させるものである。之れは誰もよく知つて居る果物で、我國では臺灣、琉球等に産し、美味なものである。

◇米糠五合を水で固く煉り、それを蒸桶か、蒸籠でふかして苞苴に包み、蒲團の中へ四五日間入れておくと、熱をもつて醗酵するから、苞苴から取出して天日でカラ／＼に乾かし、次に搗鉢で摺つて粉とし、毎食後一匁位づつ、服用すると胃痛が不思議によくなる。

◇ニワトコの根皮を煎じたものは溜飲に妙である。(圖二五・二二二)

■植物の説明

ニハトコ(忍冬科) 一名タツノキといつてゐる。原野に自生してゐる落葉の灌木であるが時に庭に植えられることもある。花は小さく、白色で、果實又小さく熟すると赤色になる。

- ◇カキを適度にたべることは餅の過食を治す。
- ◇サフランの雌蕊には『クロシン』といふ成分を含んでゐるから、開花時にその雌蕊を採取する（採取時は晴天の日がよい）之れを乾燥しておき、随時煎じてのむと、健胃劑となる。（圖三四・二一九八）
- ◇サンシヨウの種子は健胃劑となる計りでなく、下痢を止めたり、血毒を消したり、又風邪の薬ともなる。（圖二二・一九七）
- ◇シヨウガの根（之は俗に根といつてゐるが、實は地下にある莖である）をすりおろした汁をのめば健胃劑となる。スシに赤生姜を附けるのも實に意味のあることである。
- ◇イチジクの果實は蛋白質を『ペプトン』に變化する成分があるから、之れを食べることは自然胃を健康にする助けとなるものである。
- ◇アルテアの根の浸劑は胃腸を健康にする効がある。（圖三一・二七二）
- ◇イハジシャを干して煎じてのむ。（圖二七・二五二）
- ◇エンレイソウの根莖を陰干しにして煎用するとよい。（圖一八・一五二）
- ◇オホバコの莖葉を乾燥して煎用すると健胃劑となる。（圖六・五〇）
- ◇セントウリウムの花は健胃、解熱に煎用して効がある。（圖三五・三〇六）

■植物の説明 センタウリウム（龍膽科）歐羅巴原産の二年草で、高さ一尺位になる。花は肉白色或は白色で、莖の上部に集つて咲く。日本薬局方所載の薬用植物である。

◇ダイダイの果實を皮ごと切つて煎じた汁は苦味健胃劑となる。（圖三五・三〇九）

◇ダイオウの根莖を陰干にしたものを煎じ出し、〇・一グラム乃至、〇・五グラムを服用すれば、健胃劑となり。〇・五グラム乃至五グラムを服用すれば下劑となる。（圖三五・三〇八）

■植物の説明 ダイワウ（蓼科）支那原産の薬用植物で、高さ四五尺に達し、葉は互生し、根の方の葉は掌狀に淺裂して大きく長い柄がある。花は小形で大形の穂になつて咲く。

◇トウヤクリンドウの全草を煎じてのむと健胃劑となる。之れはゲンチアナの薬効と同様である。（圖一八・一五六）

■植物の説明 トウヤクリンドウ（龍膽科）高山に生へる宿根草で、高さ四五寸より一尺位の小さなもので、夏になると莖の頂に白色だが少し黄味を帯び、綠色の細點のある筒形の花三個づつ、を咲く。

◇ツリガネニンジン根を煎じてのむと、健胃劑となる。（圖一四・一一七）

■植物の説明 ツリガネニンジン（桔梗科）山野に自生する宿根草で、高さ三四尺になる。葉は節毎に輪生し、花は青紫色或は白色の鐘狀花を咲く。觀賞用として栽培するものもある。

◇ツルドシダミの根を煎じてのむと健胃強壯劑となる。（圖一四・一二四）

◇トチバニンジン根、莖を煎じてのめば食欲を増進し、健胃の効がある。（圖一九・一六三）

■植物の説明 トチバニンジン（五加科）一名チクセツニンジンともいひ、山地に自生する宿根草で、高さ二

尺餘に達する。地下に根莖があつて、その形が稍々竹類の根莖に似てゐる。花は白色である。

◇ニガキの根葉及び木質部の煎汁は苦味健胃劑となる(圖二九・二五八)

■植物の説明 ニガキ(苦木科) 山野に自生する落葉喬木で、高さ二十尺位になる。花は黄綠色で單性と兩性のものとある。この木は全體に苦味がある。

◇ニクケイの樹皮〇・五グラム乃至一グラムを一回に煎じてのむ(圖二五・二二〇)

■植物の説明 ニクケイ(樟科) 支那原産の常綠木で高さ數十尺になる。葉は厚みと光澤がある。花は綠黄色である。根及莖に香がある。

◇エンレイソウの根莖を陰干しにして煎用すれば胃腸の諸病を治し、持續すれば自然胃を強健にする効がある。(圖一八・一五三)

◇ニクスクの仁からとつた肉豆蔻油は健胃劑になる(圖三六・三一七)

■植物の説明 ニクツク(肉豆蔻科) モトツカ原産の大木で、高さ三十尺位に達する。花に單性で果實は漿果だが後裂開する。

◇ホウレンソウは便秘する人が少しづつ、常食すると、便通をよくし、胃腸を健全にする。

◇フキの莖を煎用すると健胃に効がある。

◇ホツブの果實を一日に一グラム乃至三グラム以下を二三回に浸劑として服用すると、健胃劑となり食欲を増す。(圖二六・二二〇)

■植物の説明 ホツブ(桑科) 歐羅巴、亞米利加等に産する宿根の蔓草だが、今では我北海道にも盛に栽培し

て、麥酒の苦味、芳香料として用ひてゐる。花は單性で、雄木と、雌木と別々に咲く、果實は外觀マツカサに似てゐる。

◇ミスガシワの開花時にその莖葉を刈り取り乾燥して煎用すれば健胃劑となる(圖二二・一八三)

■植物の説明 ミツガシハ(龍腦科) 一名ミツハンゲといつて淺水中に生へる宿根草で高さ一尺餘になる。葉は三つの小葉が一枚になつてゐる。花は五瓣で、内側に毛が生へてゐる白色の花が咲く。

◇オケラの根は漢法では、山精、仙求といつて健胃強壯劑として煎用せしめる。その外驅風、發汗、頭痛、吐下、腹痛を治すに煎用する(圖二八・二四二)

■植物の説明 オケラ(菊科) 又サウヂユツといつてよく夏季蚊遣に燻するのは、この植物の根である。花は白或は淡紅色の筒狀花から出來てゐる。到る處の山野、樹林中に生えてゐる。

◇ピンロウジの果實は健胃劑となり、又利尿、驅蟲の藥となる(圖三七・三二九)

■植物の説明 ピンラウジ(棕櫚科) 東印度原産の喬木で高さ四五十尺になる。同地方の土人はこの植物の果實を細切し、胡椒類の葉に包み、タバコの如く常に噛む。これにより土人の口の中は血の如く鮮紅色となり、齒は黒くなつて居るとの事である。

◇エイランタイの全草は粘滑性健胃苦味藥として重用せられる。(圖三二・二七七)

■植物の説明 エイランタイ(うめのぎ)科 又イスランドタイともいひ、高山に産する地衣類である。體は灰白色で、少しく綠色を帯び、扁平で先が分れ、枝の端に突起がある。日本藥局方指定の藥用植物である。

◇クワツシアの木質部を浸劑としたものは健胃劑となる(圖三三・二八九)

第六節 腸 の 疾 患

■植物の説明 クラツシア(苦木科)西印度に産する喬木で、日本薬局方指定の薬品である。花は赤色で、總の
様になつて咲く。この葉の柄には翅がついてゐる特徴がある。木材を枯矢亞木と稱し、薬種屋に販賣して
ゐる。

一急性腸加答兒

飲食物の不養生即ち暴饮暴食、不消化物、腐敗若しくは熟せざる果實、極
冷めたい飲み物の飲み過ぎ、喰ひ合せ等によつて起るものだが、時には薬の中毒、感冒或は冷
え腹等より起ることもある。

この急性腸加答兒は胃加答兒と同時に起るもので、腹がはつたり、ゴロ／＼鳴つたり、下腹
や腰が痛み、下痢をする。傳染性のものには熱が出る。軽いのは下腹がダルイ位で、口がカワ
キ、喰ひ氣がなくなり、小便が少くなる。多くの場合大便に粘液がまじるものである。
手當としては懷爐、蒟蒻、燒鹽等で腹を温める。食べ物は一二日間絶食する方がよいが、ノ
ドが渴いたら少量の茶が、蒸溜水(なるべく)の沸騰したのを飲ませるのはよいが、炭酸水と
か『サイダ』『ラムネ』その他冷たい飲み物は絶対にならぬ。然し吐き氣を催した時は少しばか
り氷のカケを口に含ませるのはよい。牛乳は悪い。薬は次に掲げてあるのでよい。

二慢性腸加答兒

急性から慢性になることもあり。始めから慢性で來るものもある。その原因は

多く肝臓病、泌尿器病、呼吸器病、心臓病、傳染病、全身病等から來るものである。

この病氣のかゝり始めは大人では左程苦痛もないが、小供には劇しい事がある。一般に腹が
鳴り、腹痛を起し、頭痛がする。それから下痢をするのと、便秘をするのと二様、下痢と便
秘と交代に來るのがある。それは二三日間便秘し次で一日下痢をする。それかと思ふと毎日必
ず一回粘液、水、脂肪の交つて粥狀の軟き便通のあることもあり、又一ヶ月以上も持續して
毎日數回下痢することがある。

手當法としては腹部の温器法をし、便秘の時は通じをつけ。下痢の續くときは一度下劑とし
てヒマシ油を飲んで、充分に通じをつけ、それから下痢止めをする。

同じ下痢をするのも毎朝不消化物が下るのは腸結核だから、醫師に見てもらつて治療するが
よい。

次ぎに腸加答兒の特効薬を記述しておくから適當と思つたら試用して一日も早く快復すること
をおすゝめする。

◇シヤクヤクの根を煎じてのむ。

◇イワタバコの干したのを煎じてのむ。(圖一七・一五一)

■植物の説明 イハタバコ(苦苣苔科)山の中の濕つた岩などに生へる宿根草で、一株から通常一枚の葉が

出る。葉はや、煙草の葉に似てゐる。花は淡紫色か、白である。

◇ヒメフウロの莖葉は専ら胃腸病に煎服して効がある。(一九・一六七)

■植物の説明 ヒメフウロ(尨牛兒科)高山に生へてゐる一年生草で、莖の高さ僅に四五寸から一尺位で、全體に毛がある。花はゲンノシヨウコに似てや、小さく紅紫色である。

◇ナンバンサイカチの實を煎じてのむと、緩和下劑となる。(圖二五・二一九)

◇エゾノウワミスザクラの樹皮を煎じてのむと腹痛が治る。(圖二八・二四一)

■植物の説明 エゾノウワミスザクラ(薔薇科)北海道には自生する大木で、高さ三十尺位になる。花は小形白色で、果實は球形をなし黒く熟する。

◇オウレンの根の干したものを一匁を二合の水で一合五勺に煎じ詰めて一日分とし、三回にのむ。

(圖一一・九四)

■植物の説明 ヲウレン(毛茛科)山地に自生してゐる宿根草であるが、岡山縣地方では山地で栽培し、藥草

として支那に輸出すること多きものである。高さ三四寸から一尺位になり葉は稍セリに似てゐる。花は小形で白色の五瓣花である。オウレンには種類多く、その葉が菊の葉の様なものにキクバオウレン。又その花が丁度梅の花の様なものがある、それを梅花黃蓮といつて、何れも藥効には違ひない。

◇ハコベを浸し物として長く食べる。(圖七・五五)

◇黒松の若芽を煎じて出して茶の代りにのむ。

◇タラノキの根皮を煎じてのむ。(圖二五・二一四)

◇ハクサンチドリ(根)を煎じてのむと、胃腸加答兒にきく(圖一九・一六一)

■植物の説明 ハクサンチドリ(蘭科)一名テカタチドリ、又チドリサウともいひ、高山に生へる草で高さ一二尺になる。花色は紫か白である。

三消化性潰瘍 この病氣は主として十二指腸から起るものだが、少年には稀で、三十歳から六十歳位の男子に多い。

この病氣にかゝると食後三四時間を経、丁度食べた物が胃から十二指腸に送られたと思ふ時刻に劇しく痛み、ひどくなると嘔く。そして嘔くと少しは痛みが薄らぎ、稍しばらくすると殆んど忘れた様になる。尙此病氣にかゝつてゐるものは時々腸出血をすることがある。これは大便が黒い色か、黒茶色になるから注意して見るがよい。手當ては食物に注意することは勿論であるが、之れは醫師に見てもらひ相談して服藥するがよい。

四腸結核 この病も亦醫師の手による外ないが一寸参考のため容態を書いて見ると、この病は

他の結核病の様にだんくと來るもので、小腸のみ犯されて居るときは便秘することが多いが大抵は下痢のあるもので、この下痢は長い年月續いて其の間に硬い便の出ることは決してないものである。であるから餘り長く下痢してゐるものは自分の他の病氣等から考へてその手當の

遅れない様にしなければならぬ。

この下痢には往々僅かな腸出血があつて、便は茶色か、濃茶色になる。それから病がだんだん進むにつれて一日中に時を定めて發熱があり、或は盗汗があり、身體はだん／＼に瘦せ衰へ遂には斃れるといふ恐ろしい病氣である。

五盲腸炎 本病は十五歳乃至三十歳位の男子に多い病氣で、大概大便の通じが悪いのに起るが、大腸菌又はその他の微菌、腸寄生蟲等の混合傳染病だといはれてゐる。常に座業の人か、便秘癖のある人は侵され易い。

この病氣は大抵急に來ることがない。初めは大した熱もなく、少し腹が痛んで下痢が有る位だが、その中にその痛みが右下腹の方へ移り、他の處は痛みがとれても盲腸の處だけ痛みが残る。之れが盲腸炎となるといふ風に、極めて緩やかに來るのが普通だが、時には急に惡寒がして熱が三十九度、四十度に上り右の右下腹に激しい痛みがあり、その中に右の右下腹が少し腫れ上り、しまいには足を伸して寝ることも出来ない様になることもある。

この病氣はなかく、苦しい病氣である計りでなく、根治するには、現今の醫界では盲腸の下にある蟲様垂を切り取るのが一番よいとしてあるが、手術が不完全だと再發の憂目に逢ふものである。

◇この困難なる病氣を醫者の手にかゝらずとも、必ず服薬で治る不思議なほどよくきく靈藥がある。若し盲腸炎に冒されたものがあつたら安神して、全治出来るものと服用するがよい。それはハコベといふ草である。之れは小鳥を飼ふ時に菜の葉の代りに喰べさしたりする草で、日本中大抵の處の路傍、溝の縁などに生えて居る。そのハコベを煤で、浸し物として食べても、汁の實にして食べてもよい、兎に角ドシ／＼このハコベを食べると、どんな頑固な盲腸炎でも、一日と病苦が薄らいで二週以内に必ず効が現れる。食慾がなく痛みの烈しい時は、この葉を煎じ出した汁を飲んでみると痛みが止まる。

◇盲腸炎で腹痛のある間はなるべく安静にして、食物は流動物若しくは粥狀の消化し易く、刺戟なきものを取り、副食物は主にハコベの浸し物、海藻の類を採り、肉類や砂糖は絶対に用ゐるはならない。

六疝氣、疝痛(腰の痛み) 元來この病氣は、大腸、小腸の病氣、或は腎臓の病氣が原因して來る、一種それ等の筋力の疲勞、弛緩、疼痛より腸部が筋バツタリ、腰がツツタリ、痛かつたりするのである。それだからこの病源を根本的に治療すればよい筈だが、老人などになると中々癒りきらぬものであるから常に小言が出る様になるのである。之れにもいろ／＼の民間治療法があるから、左に効能の著名なものを書いて見よう。

◇ウコギの葉、莖、根どれでも煎じてのむ。(圖二・三・一九八)

■植物の説明 ウコギ(五加科) 山へ行くと獨り生へものもあるが、多く庭に植えて墻にからませである。蔓の木で、葉は五つか七つの小葉が掌の様になつて長い柄がある。花は黄緑色の小さなもので、後黒い實になる。出たての葉は燥で、浸しものとして食べたり、飯に混ぜたいて食ふ。

◇アマドコロの地下莖を細く砕いてよく乾し、それを粉にしたものを、卵の白味でねり、紙にのべて腰や脚の痛いところへ貼る。(圖一五・一三二)

■植物の説明 アマドコロ(百合科) 山林や小丘の草叢の中等に生へる草で莖にしわがある。高さ一二尺になつて緑色がかつた白い筒形の花を葉の下から二三個づつ、咲く。

◇イブキジャコウソウの全體を煎じて飲む。これは疝痛によい。(圖一九・一六五)

◇ウドの根を春の彼岸頃にとつて、上皮をむき、之れを一たん氷に浸した後乾かしておき、疝氣が起つたら煎じてのむ。(圖一・四)

◇オオケタデの莖を煎じてのむ(圖一・五)

■植物の説明 オオケタデ(蓼科) は東印度原産の草だが、今では日本にいくらかも獨り生へがある。普通の蓼の様であるが、非常に大きくなるもので、高さ五六尺に達し、莖、葉等に白い毛が澤山に生へて居るから蓼と區別が出来る。夏から秋にかけて帯紅色五瓣の小花を穂になつて咲く。

◇オオバコの全體を煎じてのむ。(圖六・五〇)

◇カサモチの根を煎じてのむと腰の痛いのにきく。(圖一四・二二二)

◇カラタチの實を煎じてのむと疝氣にきく。

◇キンシバイの花、葉を煎じてのむと、疝氣によい。(圖二四・二〇七)

◇ゴシユユの實を煎じてのむと、疝氣によい。(圖二四・二〇八)

◇ポタンの根皮を一回にニグラムか、三グラムを煎じてのむと腰痛關節炎を治す。

◇ホオノキの實を煎じて飲む。

◇マタタビの實に熱湯をかけて、ひなたに干したものを必要に応じて煎じ出してのむ。又莖や葉を煎じてのんでもよい。(圖三〇・二六五)

◇ワレモコウの根を陽干ししておき、必要に応じて煎じてのむと、疝氣にきく。(圖四・二一九)

■植物の説明 ワレモカウ(薔薇科) これは山野、路傍等に生えてゐるが、又庭園に植へられることもある。兎に角秋の七草で有名な草である。圖を見られると、ハハーこの草かと御承知が出来ようと思ふ。

◇ニレの樹皮を煎用すれば疝氣によい(圖三〇・二五九)

■植物の説明 ニレ(榆科) 一名ハルニレと稱し、寒地の山に生えてゐる落葉喬木で、樹の皮は濃い褐色で平たい裂目を生じ鱗なりにはがれる。葉はナラノキの葉に似てゐるが巾が廣い。

◇ネムキの木の種子を煎じてのむと、疝氣によい。(圖二六・二二四)

■植物の説明 ネムノキ(荳科) 高さ十尺以上にも達する落葉喬木で、山野に生へて居るが、又庭に植えてあるところもある。この樹の葉は晝開いて居て、夜になると閉ぢる、夏になると先の方が紅くて長い緑の線

な雄蕊を澤山にもつた、眉刷毛の様な形をした花が咲く。

◇コブニレの樹皮を煎じてのむ。(圖二八・二四九)

◇サイカチの莢を細かく切つて、煎じてのむ。

◇シシウドの地下莖をとり、細かく切つて煎じ出してのむ。(圖一四・一二三)

■植物の説明 シシウド(繖形科)山野に生へて居る二年草で、六七尺位の高さになり、葉や莖に毛がある、花は淡緑色で傘なりに咲き、黒い紫色の實を結ぶ。

◇シヤクヤクの根莖を煎じてのむ。

◇ゼンマイの莖や葉を一所に煎じ出した湯で、腰、脚の痛くてやめる所を温める。

◇テンダイウヤクの根を煎じてのむと、疝氣によくきく。(圖二五・二一六)

◇メリツサの葉を煎じてのむと、疝氣、下痢等に効がある。(圖三九・三四〇)

■植物の説明 メリツサ(唇形科)歐洲原産の宿根草で、高さ二尺餘になり、莖葉共に「レモン」の様な一種のよい香がある。花は五六箇づ、葉腋に咲く。花色は白である。

◇イノコズチの根を煎じてのむと、膝の痛いのみに頗るよくきく。(圖九・七五)

■植物の説明 キノコツチ(苧科)一名フシダカといつて原野にある雜草である。莖は四角で、節が膨れてゐる。夏になると緑色の小さな花を穂の様に開き花がすむと、その實に刺があつて下を向いて澤山についてゐる。よく田のふちや、路はたへ行くと衣類につくものである。

七寸白 之れは婦人にある慢性筋肉リウマチスのことである。治療法はリウマチスの項に詳し

く書いてあるから就て見られよ。

第七節 胃腸併合疾患

一 胃腸加答兒

普通胃腸加答兒といつてゐるのは急性胃腸加答兒のことをいつてゐる。之れは暴飲暴食したり、腐つた物、有毒なもの、極く冷たいものなどを食べて起るもので、胃加答兒計りの時は俗に『食傷』といひ、腸加答兒丈けの時は、下痢『腹くだし』など、いつてゐる。然し多くの場合は胃加答兒と、腸加答兒を一處に起してゐる方が多い。

手當としては胃にたまつてゐる物は、指を舌の奥に押し込むか、濃い鹽水をコップに一二杯飲むか、或は次に記してある藥をのんで嘔いてしまひ、腸にたまつてゐるものはヒマシ油をのんで瀉してしまひ、そして安靜に寝てゐる。若し腹が痛む場合は温めるとよい。それから一二日は何も食べぬ方がよい。そうすれば大概は治る。治つても尙當分は軟かいものを食べて身體を安靜にしてゐることが肝要である。

◇シイタケを五つ六個よく洗い(干したのでも生でもよい)それを濃く煎じ出して一合位呑む。大概の物は嘔いてしまつてあとの氣分も悪くない。

◇タンキリマメの實約三十粒程を水か白湯でのむと、吐くか瀉すかして治る。(圖一三・一一四)

■植物の説明 タンキリマメ(荳科)一名キンチャクマメ、キツネマメといつて山野に自生する蔓草である。花は青紫色をした蝶形花で、稍カタマツて咲く。果實は莢で通常二個の黒い種子がある。

◇イチハツの根を煎じてのむと吐くか瀉してしまふ(圖三一・二七四)

■植物の説明 イチハツ(鳶尾科)庭園に栽培せらるゝ宿根草で、高さ一二尺になる。葉は劍狀で互生し、二縦列に排列してある。花軸は葉の間より出で、通常三つの花を咲く。花は大形で淡紫青色に所々紫色の小點がある。日本薬局方指定の薬用植物である。

◇ヒメヒルガオの根を煎じてのむと、瀉下の薬効がある。(圖二二・一八九)

◇コロシントソウの果實を乾したものを煎じてのむと峻下劑となる。(圖三三・一九四)日本薬局方指定の定薬用植物で、使用の際は次のハツと共に醫師か藥劑師の手を経るがよい。

◇ハズの仁の油を内服すれば瀉下劑として効がある。(圖二六・三一九)

■植物の説明 ハツ(大戟科)の植物も日本薬局方指定の薬用植物で、東印度原産の灌木である。右の内何れか適當な薬を用ひて一たん腹の内を掃除し、それから胃、腸の項に記述してある薬を用ふるとよい。

二便秘

これは男子にも婦人にもあるが、殊に婦人に多いもので、通じがなくて困りますといふ話はよく婦人の方からきくことである。そして毎日く灌腸しますとか、座薬を挿し込んでようやく出しますとか、毎日『カスカラ』錠の御蔭をうけてゐる人がある。然し之れ等の事

は癖になつて一日でも怠ると通じないといふことになる。而して餘り體のためによくないことが多い。であるから便秘でお困りの方は次の緩下劑を御用ひになつてごらん下さい。之れはどれもく決して副作用をしない、そして飲み過ぎても差支へないものだから安神してめしあがれます。

◇毎日食前に冷水をコップに一杯づつ、のむ。朝だけでもよく通じのつく人もある。

◇ゲンノシヨウコは下痢止めの特效薬だが、茶の代りにのんでゐると通じもつく。(圖七・五六)

◇センブリを煎じておき一日に盃に二三杯づつ、のむ。(圖二一・九二)

◇水飴に生卵をまぜてのむ。

◇板昆布を葉書位の大きさに切り、それを焼いて湯呑に入れ、その上から熱い湯を注いで二三合位のむと通じかつく。

◇アスバラガスの嫩芽を煮て食す。(圖一・二)之れは西洋料理に用ふる植物である。

◇ギシギシの種子を煎じてのむと通じがつく。(圖八・六七)

■植物の説明 ギシギシ(蓼科)山野、路傍、畦畔等に生へて居る雜草で、高さ三四尺になる。葉は長楕圓形で大きく、莖についてゐる處に鞘がある。地下に太い根がある。花は小さく、色は淡綠色で澤山に咲く。

◇ホウレンソウを常食とすれば、便通をほどよくする。

◇タカトウダイの根を煎じてのむと、便通をほどよくする。(圖一〇・八九)

◇トウゴマの種子からとつた蓖麻子油は緩下劑となる、但し之れは常用するのではなく、病氣の種類によつて特に通じをつける場合に一回用ふるものである。以下記述する下劑は多く一時的の下劑として用ひるのである。

◇ヤラツバの塊根を煎じてのむ。但し緩下劑には、〇・三グラム。峻下劑には、〇・六グラムを服用すること。(圖三九・三四二)

◇ロカイの葉から採つた汁を煎調したものは峻下劑にも緩下劑にもなる。(圖三九・三四七)

■植物の説明 ロクソイ(百合科)熱帯地方に栽培せらる、薬用植物で、莖や葉の様子はリウゼツランの様で、丈夫な刺がある。葉の間から長い花莖を出してツリガネの様な花を澤山に咲く。日本薬局方所載の薬用植物である。

◇フランゲラの樹皮は緩下劑に煎用して奏効確實な特効がある。(圖二七・三三〇)

■植物の説明 フランゲラ(鼠李科)歐洲の原産で、日本薬局方指定の薬用植物である。高さ八尺位になる落葉木で、花は白色に少し黄綠色を帯び、果實は黒色球形である。

◇マンナの樹の切り口より滲出する液汁を固めたものを浸出した液は、緩下劑として重用せられる。(圖三八・三三七)

■植物の説明 マンナ(木犀科)歐洲の原産で、日本薬局方指定の薬用植物である。高さ二十五尺位になり、花は帯白色で香氣がある。

◇センナの葉一匁に熱湯を注ぎ、之れを三回分に服用すれば、便秘が治る。(圖三五・三〇五)

■植物の説明 センナ(荳科)熱帯亞弗利加に産する灌木状の植物で、花は黄色の蝶花形で、果實は平たい莢である。日本薬局方指定の薬用植物である。

◇タマリンドの果肉及び莢を糜爛させて得た黒褐色の果泥は、清涼を兼ねたる緩下劑に煎用する。(圖三五・三一〇)

■植物の説明 タマリンド(荳科)一名テウセンモダマと稱へ、熱帯亞弗利加産の大本である。花は帯黄色で赤色の線がある。果實は莢となる。

◇ヒマシユはトウゴマから取つた油であるが、緩下劑として重用されてゐるものである。(一二六・三二二)

三下痢 下痢の原因は腸の疾患、胃腸の疾患から來ることがあるが、又食當り等から來ることもある。これ等のことは胃腸の疾患の項に委しく記述してあるから就て見らるゝよいが、茲に一般下痢の場合、その下痢止めの藥物に就て記すこと、したのである。

◇キハタの樹皮を粉とし、或は煎じ或は越幾斯として服用すると、健胃止瀉劑又は收斂性消化止瀉劑となる。(圖一八・二四四)

◇アセンヤク(藥種屋に販賣してゐるから買ひ求めるがよい。次手に使用の分量もよく問正してから用るとよい)は收斂劑として頑固な下痢が止まる。(圖三一・二六九)

■植物の説明 アセンヤク(荳科)アセンヤクには二色ある。一は本品のことにて之れをアカシヤアセンヤクで、他の一つはガンビールアセンヤクと云ふが、これは(茜草科)の植物である。效能はアカシヤアセンヤクの方が優つてゐるから茲には之れに就て説明することにした。この植物は高さ四十尺位に達する常緑の木で、東西兩印度に産する薬用植物である。葉は圓の通りで、花は黄色五瓣の小さな花ではあるが澤山よつて美事に咲く。果實は莢で、日本薬局方所載の薬用植物である。

◇ウコンの根を煎じてのむと、血の出る下痢に効がめる。(圖六・四七)

◇カミルレの花を陰干しにしておき適宜煎じてのむと、腸カタル、下痢が治る。(圖三二・二八二)

■植物の説明 カミルレ(菊科)一名カミツレともいひ、日本では庭園に栽培する薬用植物である。葉を揉むと一種の香氣がある。花はシユンギクの花に似てゐるが白色である。

◇キンミスヒキの莖葉及び根を煎じてのむ。(圖一五・一三二)

■植物の説明 キンミスヒキ(薔薇科)到る處の山林、路傍等に自生する宿根の雜草で、高さ二三尺になる。葉は大小不齊の小葉から一枚になつてゐて、花は黄色の五瓣である。果實は澤山の刺があつて、熟すると他物に附着するものである。

◇キランソウの實十粒ほどを白湯でのむと、腹痛や、下痢がとまる。(圖九・八〇)

◇クロウメモドキの果實を乾し、適宜煎用すれば下痢止めとして効がある。(圖一八・二四七)

■植物の説明 クロウメモドキ(鼠李科)山野に自生して居る木で高さ十尺位になる。ナツメノキの一種で、葉は橢圓形或は倒卵形で縁が鋸の様になつてゐる。花は小さく色は淡綠色で、小豆位の黒い實がなる。◇サンシヨウの種子を煎じてのむ。

◇サルトリイバラの根を煎じてのむと下痢はすぐ止る。(圖二九・二五二)

■植物の説明 サルトリイバラ(百合科)山野又は樹林中に生へてゐる小さな蔓状の木で、葉は卵形をして大きいのは手の平位ある。蔓には刺があり、葉の本には卷鬚があつて他の物にまきつく。葉は黄綠色で傘の株になつて咲く。所によつてはカシワモチの葉の代りに使ふところがある。

◇タウコギの葉、莖を陰干しにしておき、適宜煎じてのむと下痢止めになる。(圖二一・一七九)

◇テンダイウヤクの根を煎用すると下痢がとまる。(圖二五・二一六)

■植物の説明 テンダイウヤク(樟科)支那原産の常綠灌木で七八尺の高さになる。葉は革質で三つの大きな筋がある。花は黄綠色の小さなもので葉の間にゴチャ／＼と咲く。

◇ノイバラの果實を煎じてのむ。(圖三〇・二六一)

■植物の説明 ノイバラ(薔薇科)高さ四五尺位になる刺のある木で、普通のバラの様な葉が田、白色の花を咲き、よい香がある。よく堤手などに咲いてゐる。

◇ホウキグサの嫩葉を揉んで出た汁をのむ。(圖三・二六)

◇ヒキオコシの莖葉は煎用してよく下痢がとまる。(圖九・八一)

■植物の説明 ヒキオコシ(唇形科)山野に生へる雜草で、三四尺になる。花は白色だが少しく紫色がかつて居る。

◇ポドフィルムの根は峻下劑として、最も頑固な便秘、又は膽石病等に一日〇・〇五グラム乃至〇・一グラムを煎じてのむ。(圖三八・三四)

■植物の説明 ホドフィルム(小葉科)日本薬局方所載の薬用植物で、この樹から採った樹脂をホドフィルム脂といつて下痢に使用する。だから若しこれを使用しようとしたら、薬種屋で買入れ、使用法もよくきくがよい。

◇ヤマノイモ (一名ジネンジョウ)の塊根を粉末とし、乾燥したものを白湯でのむ。

◇ゲンノシヨウコの莖、葉の陰干しにしたもの五匁を、一合五勺の水で半分に煎じつめ、一日三四回飲む。小供には砂糖でも入れてやると飲みよい。ゲンノシヨウコの下痢止め薬といふことは實に有名なもので、又それだけ實に不思議なほどよくきく。だから大抵の下痢には、この草が手に入る限りは決して迷はず之れを服用することをおすすめする。(圖七・五六)

■植物の説明 ゲンノシヨウコ(牻牛兒科)一名フウロサウといつて之れの乾したものは到る處の薬種屋に賣つてゐる。然し之れは大抵の野原、路傍等に生えてゐるものだから、よくこの圖に引き合はせて夏の中に採集しておくとの急の間に合ふ。花の色は白か、少し紅味を帯んだのと二色あつて、大概二つづつ、咲く。そしてこの莢は實がいと下からパチンと上へまくり上る圖の様に。

◇オオバコの葉、莖を煎じてのむ。乾いたのでもよい。(圖六・五〇)

◇白い梅酢(紫蘇の葉を漬けない内のもの)を盃に一杯か二杯のむ。之は急な場合に大邊都合がよい。

◇ザクロの實又は花の陰干しにしたものに、甘草を少々混ぜ、一合の水で半分に煎じ二度にのむ。

◇水飴二十匁位を鉢に入れ温めておき、之れに新しい卵一個と日本酒小盃に一杯入れ、よくかき

廻はして一日に飲む。之れは大人の分量だから小供の時は少し控へ目にする。

◇ハブソウの實十粒位を白湯でのむ。(圖三・二〇)

■植物の説明 ハブサウ(荳科)元と熱帯國の原産種だが、今では日本中到處に栽培せらるゝ、一尺餘の草で年々種子から生へるものである。花は黄色で、花がすむと實がなる。昔から毒蟲にさされたとき毒消しにつけるので有名である。

◇ウツボグサに甘草を少し加へ煎じてのむ。(圖九・七七)

◇コロンボの根は健胃止瀉劑として煎用して効がある。(圖三四・二九五)

■植物の説明 コロンボ(防已科)亞弗利加原産の蔓草で、莖は細長く匍物に巻きつく。花は單性で雌雄別株に生ずるものである。日本薬局方規定の薬用植物である。

◇エイバブシの根を煎じてのむと腹痛が止る。(圖三・一八七)

■植物の説明 エイバブシ(紫草科)一名ハマバンクイともいふ草で、本邦北部の海岸に生へてゐる。や、肉質で白色の蠟の様なものが、つてゐる。花は青紫色で、上の方に集つて咲く。

◇エンレイソウの根莖を陰干しにし、適宜煎じてのむと胃腸の諸病に効がある。(圖一八・一五三)

■植物の説明 エンレイソウ(百合科)一名タチアオイともいふ。山地に生える宿根草で、高さ一尺位、葉は上の方に三つ出る。花は黒紫色をしてゐて、果實は球形の漿果である。

◇ハクテヨウゲの根は煎用すれば下痢止に妙。(圖二六・二二六)

■植物の説明 ハクテウゲ(茜草科)又ハクテウボクともいひ、庭園に植えられる小さな木で、花はシヨウゴ

形になつて白い色だが、少し紫がかつてゐる。

◇小供の下痢は柿の花を黒焼きにしたのを粉とし、少しづつ、一日に三度のませる。大概のはとまる。

◇味噌を一錢銅貨位に丸め、臍の上にのせ、その上から灸を三火する。これはまじないの様だが、不思議に止るものである。

二吐瀉 よく嘔いたり瀉したりすることがあるが大抵は悪い物をたべた中毒で、急性胃腸加答兒を起したのである。そしてこの胃腸加答兒なら必ず腹が痛む。若し腹が痛まないで吐瀉するのは「コレラ」病の疑ひがあるから急いで見てもらはなければならぬ。尙「コレラ」病の容態はその項を見るがよい。中毒の原因が判つたら次の中毒の項を見るがよい。もし原因の心當りがなかつたら胃腸加答兒の項を見るがよい。

第八節 中 毒 症

魚類、鳥類、野菜その他の飲食物で中毒した時は兎に角早く、胃腸内にある有毒物を吐くか、瀉してしまはなければならぬ。

◇飲食物の中毒に最も特効あるは、シイタケである。食中りといふことを知つたら、すぐ生でも

干したのでもよいから、シイタケをなるべく濃く煎じ出して飲め、すると屢くして胃の有毒物を残らず吐き出してしまつて、あとがさつぱりするものだ。

◇差當りシイタケが間に合はない場合は、しかたがないから、指を咽喉に突込むか、鹽水のなまぬるいやつを澤山飲んで吐き出すがよい。

◇若し痙攣を起したら、葡萄酒か「ブランデー」を少しづつ、度々飲ませるとよい。これは中毒一般の手當てであるが、左に少しく一々について述べて見よう。

一生梅の中毒 ホウキゲサ四五本を三合程の水に入れ一合五勺に煎じつめ飲ませれば一二時間で吐瀉し忽ち治つてしまふ。(圖三・二六)

注 意 生梅は鹽をつけて食べればあたぬといつてゐるが未熟なのはあたることがある。ニアルコホルの中毒 酒の悪酔などは即ち「アルコホル」の中毒であるが、大抵は吐いた後、濃い茶を飲むとなほつてしまふ。その外

◇カキを喰へば酔がさめる。

◇おろし大根の汁を澤山に飲む。

◇大豆を煮たからして出来た濃い汁を飲む。

◇飲み過ぎ、二日酔には、梅干四五個を喰へれば、頭痛も止り、氣持ちがよくなる。

三鳥賊の中毒 ゴマの油を盃に一杯程か、若し油がなかつたらゴマの實を壓しつぶして粉に

して飲めば、たちまち治る。これは章魚、蛤、蜆の中毒にも効能がある。

四瓦斯の中毒 よく東京などで瓦斯の漏れて居るのを知らずに寝てゐて、窒息して死んだとい

ふことがある。若しこの中毒したものを見付けたときは

◇軽いのは、酢を皿に入れ、その中へ炭の火を投げ入れ、その匂ひをかきせると治る。

◇人事不省になつたのは、手足を氈布の様なもので摩擦し、胸と腹には水をかけて冷す。それで氣が付いたら酒を少しやる。この場合よく眠むりたがるものだが、眠るとそのまゝになるから決して眠らせてはならない。

注 意 古井戸、穴藏などには、よく炭酸瓦斯がこもつてゐることがあるから、若し入らなければならぬ時は、その前に必ず酢を澤山にまいてからにするがよい。

五鯉の中毒 鯉や鮪に中毒すると、酒に酔つた様に全身が赤くなつて、頭が重くなつたり、胸

が悪くなつて實に不快なものである。

◇ダイダイ、ミカンなどの果皮、梅の實、梅干などの中どれでも煮たゞらし、漉した汁を飲む。

これは酒の二日酔にもよくきく。

◇シイタケの生なら極くよいが、なければ乾したのを煎じて飲む。

◇クシガキを食ふ。

◇サンシヨウの實を五六粒のみ下す。

◇顔にムラ／＼(斑点)が出来たら、よく乾した麥稈を煎じてその汁を飲み、卅分間ほど安靜にしてゐると消えてしまふ。

◇又痙攣を起したら、葡萄酒か、『ブランデー』を少しづつ、度々飲む。

◇ノイバラの熟した果實を生にて食べる。(圖三〇・二六一)

◇カンランの果實は魚の毒を消し、又骨がのどにつかへたのを治す。(圖三二・二八五)

◇黒砂糖を嘗めると、二三分間で治る。

◇ツワブキの葉を搗いて、その汁を飲む。(圖三・一九)

◇サクラの實又は樹の皮の青いところを煎じて飲む。或は鹽漬の花でもよい。

◇ニンニクの汁を飲んでよい。

六蟹の中毒

◇トウガンを煎じて飲む。

◇ハスの根をおろし金にておろし、その汁を食事の茶碗に一杯位飲む。

◇シソの葉(青色、紫色何れでもよい)を煎じて飲む。

七茸の中毒 茸には毒を含んでゐるものが澤山にあつて、甚だしいのになると死ぬのがあるから、注意して食べることが肝要だ。

◇ナスの蒂を煎じて飲むか、生茄子を食つてもよろしい。茸を料理するとき茄子を加へるのは一種の毒消しとなる。

◇サルナシの實を煎じて飲む。(圖二九・二三五)

■植物の説明 サルナシ(彌猴桃科)は山地に生へてゐる落葉木で、少し蔓の様になつてゐる。葉の形は卵形、楕圓形、心臟形等で、先の方が特別に尖り、縁が鋸齒の縁になつてゐる。夏の初めに白色五瓣の花を開き、中央にある葉は黒色の葯を持つて居るから、花の心が目立つて黒い特徴がある。花がすむと楕圓形の漿果を結ぶが、喰べると甘い。よく日光などで名物の器具に小さな穴の無数にあいた土瓶敷があるが、それはこの木の蔓を横断したものだ。

ハクスリの中毒

治療上の薬品でも度々飲んだり、或は自分の體質に適應しないため中毒して困ることがある。こんな場合には醫師に相談するのがよいが、相談することが出来ない場合は。

◇ミヤマトベラの根を細かにきざみ、水に煎じ出して飲めばじきに治る。(圖二六・三二一)

■植物の説明 ミヤマトベラ(豆科)は本邦の暖い國々の山の、陰地に生えてゐる蔓状の小木で、長さ一二尺位にしかならない。葉は三つの小さな葉がよつて一枚になつてゐる。花は蝶々形をしてゐて白く、上の方に總になつて咲く。花がすむと短い莢を結んで、中に一つの種子がある。

九酸類の中毒

よく硫酸を呑んだとか、硝酸を呑んだとかいつて、自殺を謀る場合がある。

萬一こんな場合に遭遇した時は、決してあわてないで、醫者に見てもうるか、應急手宛として苛性マグネシア二一五瓦を茶碗に一ぱいの水に溶したものを飲ませる。

一〇シヨウコウの中毒 牛乳か生卵を澤山に飲ませると治る。

一一石炭酸の中毒 これもよくある自殺の手段であるが、時としては全く過つて飲んだり、創傷を洗つたのから中毒することもある。この場合は何れも。

◇飲んだのは吐かせて、石灰水を飲ませる。

一二ソバの中毒 之はそばの食ひ過ぎから起ること、この場合には。

◇ハギ、秋の七草の一つの葉一掴みを一合の水に入れ、五勺に煎じて飲む。(圖三〇・二六二)

◇カリヤスの葉を細くきざみ煎じて飲む。(圖一九・一六四)

■植物の説明 カリヤス(禾本科)は山地に生えてゐる草で、年々古い根から芽が出る。全體二三尺位で、葉は細長く、先がとがつてススキの葉に似てゐる。穂も又ススキに似てゐるか、根が短い。この葉は黄色の染料となる。

一三筒の中毒 生姜四匁をよくおろし、十匁の胡麻の油に混ぜて飲む。

一四茶の中毒 茶の呑みすぎで、よく茶にうかされて眠られぬといふことがある。この場合に

は梅干を二三個食ふか、梅酢を少しのむとよい。
一五肉類の中毒 牛、豚、馬肉などの中毒は、馬鈴薯又は牛蒡をすりおろして白湯で澤山に飲む。

◇コシヨウの實を飲めば鳥肉の中毒を消す。(圖三三・二九一)

◇サンザシの果肉を乾したものが、生葉をとつて煎じたものを飲めば鳥獸の毒を消す。(圖二四・二一〇)

一六ニコチンの中毒

煙草の喫み過ぎ等から起る中毒で、急性に來るものは手をつける間がないほど恐ろしいものである。

◇重いやつは温浴をさせ頭を冷水でひやし、『アルコホル』分の多い葡萄酒を飲ませる。

◇軽いのは味噌汁、アサリ汁、蜆汁などを澤山つつけて飲む。又生味噌を澤山食べてもよい。

注 意 毎朝味噌汁を吸ふのは、最も適當なニコチン中毒の豫防法である。

一七ネコイラズの中毒

これもよくある自殺手段で、鼠は遠くから笑つてゐるかも知れぬ。

◇よく吐かせた後、古い『テレピン』油を飲ませる。

◇カンヅウ八匁、ゴマノハグサ八匁、ワレモコウの根五匁、瓜の蒂七個分を四合の水で煎じ、一合半に煎じつめて飲ませる。

一八フグの中毒

フグは料理の際その卵巣を取て調理すればよいといふ事位は、料理者もよく知つて居るだろうが、それでも時々中毒して、あたら命を捨てるものがあるようだ、いやある。だから、フグが喰いたかつたら、先づ左の手宛がいつでも出来る様にして喰つたらよからう。

◇中位の錫一枚、水四合を二合迄に煎じつめ、その煎汁を飲み、進んでその肉を食へ。

◇ツワブキの葉を搗いて、それから出た汁を飲む。

◇サクラの樹の皮(青い肉質のところ)又は葉を煎じて飲む。花の鹽漬でもよろしい。

一九野菜の中毒

クララの根を酢の中へ入れて煎じ出した汁を飲めばすぐ治る。(圖一一・二二二)
植物の説明 クララ(苳科)は山野に自生する草で三四尺の高さに育ち、年々舊根から芽を出す。葉は羽状複葉で、エンジュに似てゐる。六月頃淡黄緑色の蝶形花を總の様に開き、花がすむと長い莢がなる。全體に苦い味があつて、毒性を含んでゐる。

二〇ヨードホルムの中毒

創を治療するためにつけた『ヨードホルム』のために中毒することがある。別に發熱する様なことはないが、嘔いたり、下したりして、終には虚脱状態となることがある。

◇つけてある『ヨードホルム』をよく洗ひ落し、苛性『マグネシア』を塗つて置く。

◇重炭酸曹達を水に溶かして飲む。

二 喰ひ合せ

昔からよく喰ひ合せといつて忌み嫌つて居るが、現時の醫學界では昔からの言ひ傳へは殆んど認められて居ない様である。しかし人が危険だと言ふ事、又中毒の實際經驗のあるもの等は避けるがよい。

◇萬一喰ひ合せの中毒にかつた場合は南天の葉を手一杯握れる丈け取り、之を三匁位の鹽で充分によくもみ、それから出た汁を盃に半分位づつ、二度飲むと、大抵の中毒はタチマチ治る。

三 氷の飲みすぎ

これがため消化不良を起す。これは水を飲まぬに限るが、それでも習慣上飲まなければならなければ豫防法として呑む前に重炭酸曹達をのんでおくがよい。

◇既に飲み過ぎて腹の工合が悪くなつたのでも、重曹をのむと治る。

二 參乗物に酔ふ

船、汽車、電車などに酔ふ人は、乗る前から、乗つて三十分後迄で片方の目をつぶして居ると酔はぬ。

◇錫を生のみ、焼かずに少く切つて、乗る少し前から嚙んで汁を吸つてゐるとよい。

◇船に乗つて酔ひそうだと思つたら、冷したラムネを飲むと、嘔き氣がとまる。

◇車外を眺めるなら近くを見てはだめ。遠くを見よ。

◇乗り物に乗る前臍のところへ梅干しをあて強く腹をしぼつておくとよいといふことです。

二 四煙にむせた時

◇砂糖水か味噌汁をのむと治る。

◇酔の匂ひ又は便所の臭氣を嗅ぐと治る。

第四章 内臓の寄生虫

人體に栖を作つて生活する、ゆはゆる寄生虫の数は實に五十種以上もあるとのことである。然しこの五十種が悉く腹の中に寄生するのはでなく或は腸の中、或は肝臓、或は皮膚の内等種々類がある。或は國を異にし、地方により差異のあるものであるが、茲には日本人に最も普通な種な種類について略説する。

腸の内に住む寄生蟲の重なるものは十二指腸蟲、絛蟲、蟯蟲、蛔蟲等である。その各項について治療を記してあるから、こゝにどれにもよい蟲下しを少し書いて置こう。

◇我慢して二三度食事を休み、充分に腹をすかしたところへ、ザクロの根皮の干したものを煎じ出した汁を子供なら普通のコップに一杯、大人なら三杯程のめば、一度で大抵の蟲は出てしまふ。

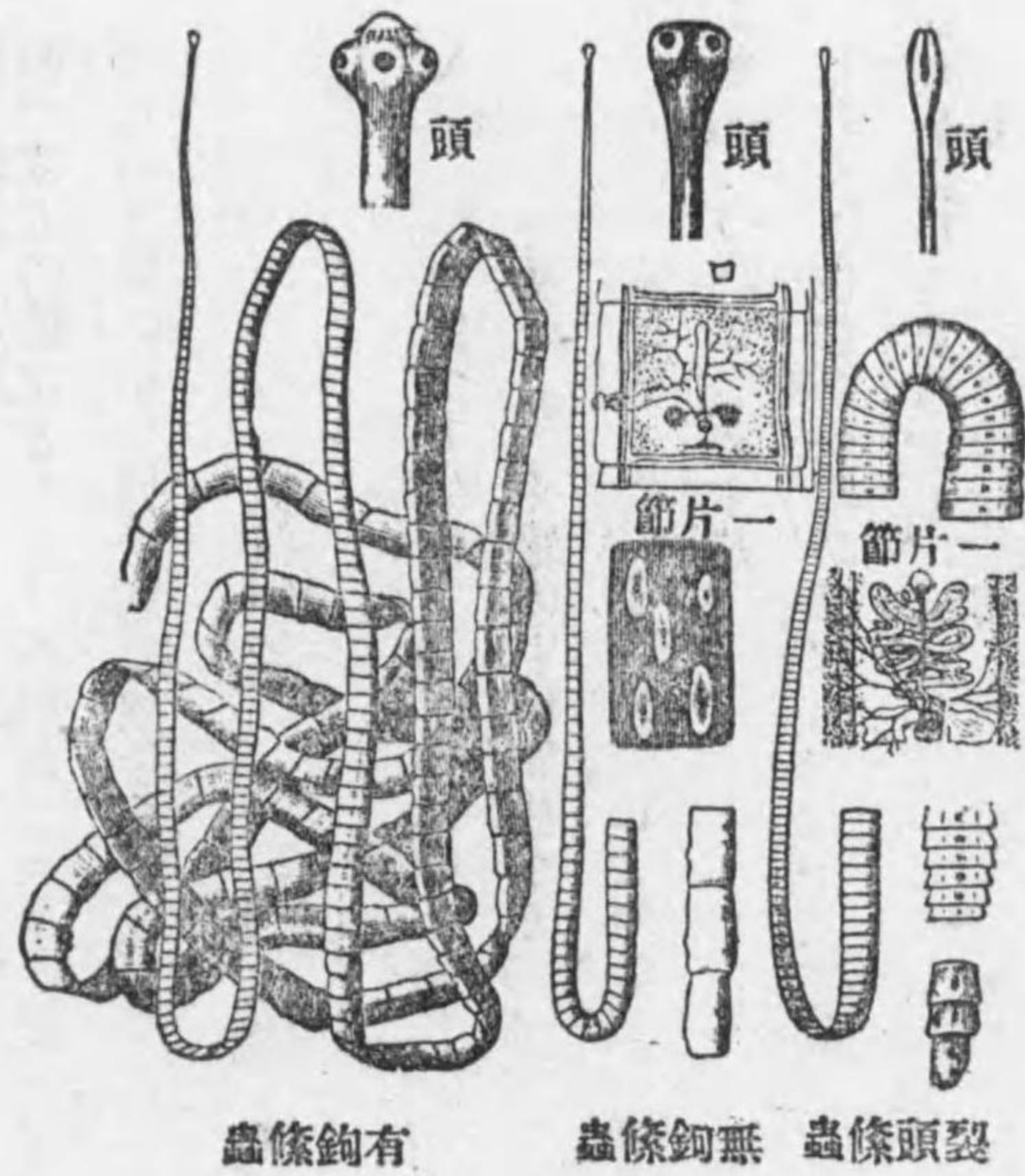
◇ドクダミの葉を煎じてのむ。(圖六・五一)

◇リンドウの根の干したものを煎じてのむ。(圖一一・九四)

◇ボウズキの實を生でたべる、小兒の蟲は大抵くだる。
 ◇カヤの實を生のみ、五十乃至百位喰ふ。或は毎日七つ位づつ喰ふ。胃の弱い人はチョット炒つ食べてもよい。(圖二二〇・二二〇三)

◇テンダイウヤクの根を煎じてのませると、子供の腹の蟲がくだる。(圖二五・二二六)

◇マツの青葉を毎日二十本位づつ、食べてゐると、蛔蟲、十二指腸蟲の豫防又驅除の特効がある。



一 蠅蟲 蠅蟲が寄生しても何ともないこともあり、或は腸、胃及び全身に故障が生ずることもある。腸胃の故障といふと食欲がなくなり、時々オクビが出たり、腹の各所が壓される様になる。全身の故障としては頭痛、メマイ、その他色々この神経症が起り尙肛門のところが痒くなることがある。若し蠅蟲がわいたのではないかと思つた

時、素人の鑑定として、香料か、ニラを食べてみると、わいたのなら腹が鳴り、腰が痛み、甚だしいは腸の中で何か蠢動する様な心持ちになる。そこで今度は牛乳か、生卵を飲んでみて、その蠢動がバツタリ止めば、確かに蠅蟲がわいたのである。

◇蠅蟲の驅除にはザクロの煎汁が一番よくきく。使用法は腸の寄生蟲治療の項を参照せられよ。ザクロの煎汁を呑む前三日位前からなるべく食物を絶ち、蠅蟲のきらいな鹽鮭、ニラ、ニンニクなどを食べ、蟲を弱らせて置き、ヒマシ油十五グラムを飲んで寝、翌朝前汁を飲む様にすると効能は充分にある。

◇クツソの雌花を採集して、紅色になるまで乾し、之れを煎じ出した汁を、ザクロト同じ準備をして呑む。(圖三三・二八七)

■植物の説明 クツソ(薔薇科)之れは「アフリカ」の「アビシニヤ」地方に産する喬木で、日本には生育してゐない。若し之れを用ひようと思つたら、藥種屋で買ひ求めるがよい。蠅蟲驅除に有名な植物である。

◇カマラの果實を煎じてのむのもよい。(圖三二・二八一)

■植物の説明 カマラ(大戟科)一名クスノハガシハといつて濠州、「フィリッピン」、東印度に産出する常緑の喬木で日本には生育しない。用ひる時は藥種屋で求めなければならぬ。英國印度地方では蠅蟲驅除計りでなく、赤色の染料に使用してゐる。

◇カボチャの種子十匁を蜂蜜二十匁とませて乳劑とし、之れを二つに分け、それから之をのむ前

二三度食事を休み空腹としておき、朝食のかわりにヒマシ油五匁をのんで、前の半をのみ、のこりの半分はひる食のときにのむ。

二十二指腸蟲 この病氣は我國どの地方でもあるが、殊に岡山、岐阜、山梨、埼玉等にては地方病として流行したことがある。



雌 雄
蟲腸指二十

じつて人の體に入り五六週間で成蟲になるので恐ろしく早く育つものである。

この蟲が體内に入つてもだん／＼に悪くなるので、初めは消化が悪くなるが、その割合には食欲が進むことがある。又芥子、酢、食鹽、生米、炙豆、灸胡麻等がやたらに食べたくなり、ひどくなるると、食物でない炭、壁土、爪、土の如きものをたべる様になる。

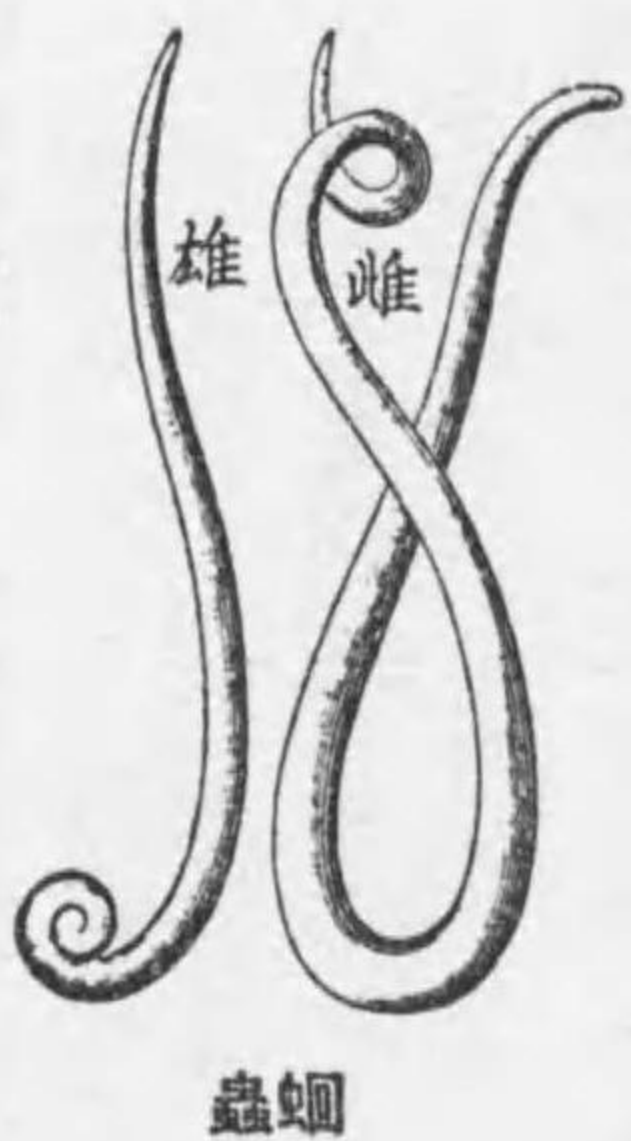
右述べた様に消化障碍のため、又一方この蟲は腸壁から血液を汲ひ取るため漸次貧血し、僅かなことにも心季亢進し、呼吸が困難となり、後にはムクミが來たり、齒齦が一寸した事で血が出たり、爪が薄くなつて容易く縦に破れる様になる。

この病氣は少壯者より中年の男に多く、特に農家の人に多いものである。

◇ニンニクを生のも、でも、或は焙つて食べても、殆んど常食といつた工合に食べると根切りになる。

◇ザクロの根の干したものを、内、火箸位のもの二三寸に切り七八本を、水二合に入れ、一合五勺に弱火で煎じつめ、之れを冷しておいて、毎食一時間前に飲むと治る。

三蛔蟲 この蟲の形はミ、ズの様であるが、色は白或は少し紅味を帯び、雄は雌より小さく、且つ尾に當る方が常に彎曲してゐる。この蟲の卵が人體から出で、大便と共に野菜の肥料になることから水、野菜、手についた土等と共に消化器にはいり、成蟲となる



雌 雄
蟲蛔

と腸壁を破り血液内に入り、體内を移行し、いろいろの害をなす。この虫は日本に一番多い種類で、小兒の七割

はこの蟲があるといふことである。

◇マクリを煎じて飲ませる。(圖二二・一九一)

◇センダンの根皮を水に入れ、その中へ鶏卵を入れてよく煮、その鶏卵の茹つたのを食ふと、翌日必ず出る。又その果實を煎じてのむか。木の皮をムキ取り白い處を煎じて飲ませてともい。これは蛔蟲ばかりでなく、その外の蟲も出る。(圖二五・二一五)

■植物の説明 センダン(棟科)は暖地には獨り生へのものもあるが、又庭樹として栽培せられる大木で五丈位の高さになるものもある。夏になると淡紫色で五瓣の小さな花を開き、三四分位の大きさの黄色い實になる。

◇イヌタデの葉を煎じて飲む。(圖七・六一)

◇ヤマジソの葉、莖を煎じてのむとおりの。(圖一八・一五八)

■植物の説明 ヤマジソ(唇形科)主に山麓の原野に自生する草で、高さ八九寸から一尺になり、莖は四角で紫色をして毛がある。花は柄がない。

この植物は「チモール」といふ成分を含んでゐるが、この「チモール」は精製せられて藥種屋に賣つてゐるか、使用の際は買ひ入れる方が便利だらう。

◇シクンシの實七つ許りを火にやいて皮を剥ぎ、そのまゝ白湯でのむ。(圖二四・二二二)

■植物の説明 シクンシ(使君子科)東印度原産の木だが、日本でも移植栽培せられてゐる。高さ二十尺位、花は白色で穂の様になつて咲く。

四蟻蟲 この蟲は長さ二三分位の小さな蟲で、多く小兒の直腸に寄生する。よく子供の睡眠



蟻蟲

中肛門から出て、そこらを匍ひ歩いてゐることがある。この時は一種いふべからざる痒味を感じるものである。

◇飲み薬はあまりきかぬから、酢を入れたヌルマ湯で浣腸してやると出て終ふ。



◇餘り痒のがつたら、そのまわりに水銀軟膏をよく塗り付けてやる。

五肝臟チストマ これも人の體內に寄生する蟲で、随分廣く分布してゐるが、特に岡山、宮城滋賀の諸縣では重なる地方病となつてゐる。



肝臟チストマ

◇この蟲に犯されたら醫師の診察を受けて病名をきめてもらふがよい。たゞ平素の注意としては、不潔な水を吞まず、川魚などを食へる時充分に煮て食へる様にするのが、最も有力な豫防法である。

◇ハナヒリノキの若い葉を煎用すると驅蟲に効がある。(圖三〇・二六五)

■植物の説明 ハナヒリノキ(石南科)一名クサメノキといひ、山野に自生する小木で、高さ三四尺に過ぎない。葉の縁に細い毛がある。花は帯白色の壺形をしたもので總の様に咲く。有毒植物である。

◇セメンシナの未開の花を煎用すれば驅蟲の効がある。よく蛔蟲の寄生した時小兒に吞ませる。これは賣藥になつてゐる。(圖三五・三〇四)

第十節 肝臟の疾患

一肝臟病 黄疸は肝臟病から來る病氣だが、黄膽になる前黄疸程でないが、全身が黄黒く、何

となくイヤナ肉色になつてゐるのは肝臓が悪いのである。殊に大酒する人、辛辣な香味料及び刺戟性の食べ物を食べる人は肝臓硬變を起し、食欲がへり、腹水を起し、全身にムクミが來たり、遂には胃或は腸より出血したり、吐血したり、往々痔を起して出血することがある。こんな人は平素から左の藥物をとり養生をするがよい。

◇トマトは植物性甘菜(即ち鹽化第一水銀)を含んでゐるから、平素之れを蔬菜として適度に生のまゝ、食べると肝臓病に特效がある。

◇クコの根皮を煎じてのむと、肝臓の虚熱をとる。

◇クサノオウの莖葉五分を搗き碎き、之れを「アルコホル」六分に冷浸したものを白屈菜丁幾といつて、極少量つゝのむ。(圖一六・一三四)

■植物の説明 クサノオウ(罌粟科)山野に自生する宿根草で、所によつてはよく石垣の間から出たり、芥捨場などに澤山に生へてゐることがある。葉や莖をきると黄色な、毒々しい汁が出る。花は黄色で、澤山の蕊がある。花がすむと菜種の様な莢になる。毒草の一つである。

◇ニンニクを蔬菜として常食するとよい。

ニ黄疸 黄疸にはいろいろの種類があるが、普通に黄疸といつるものは加答兒性黄疸で軽い。全體この黄疸といふ病氣は膽臓から出る液即ち膽汁を肝臓に送り出す道(膽道)が狭窄するか

若しくは閉塞するといふとき、膽汁が出ることが出来ないで、遂にはその汁が血管や淋巴管に吸収せられ體へ廻つて黄疸となるのである。

この病氣にかゝつたものは消化不良となることは勿論だが、舌に苔が出來、何をたべても苦くて食が進まず、それに肝心の膽汁が腸内に流込まないため、腸の消化力がなくなり、自然體力及び腦力が減ずるものである。

手當 肉類は決してたべぬこと。それから黄疸にかゝると全身が痒いものである。痒いくてたまらぬ時は生姜を熱湯に入れ、その湯で體をふく、又「アルコホル」で拭いてもよい。

◇この病氣に最もよくきくのは蜆である。然しその蜆は海の近所のはだめ、川に居るものに限る。まづ蜆三升程を水五升位の割合で二三度煮立たせ、その汁で行水をする。それから又同じ様にして煮立てた汁で幾回も〴〵全身を拭く。その外蜆二升を水二升で一時間位煮立て、そしてその身を食はずに醬油で少し味をつけてのむとよい。

◇カワラヨモギの莖葉を陰干しにしたものを一日に二三匁つゝ煎じてのむ。(圖一三・一一五)

◇ウメの木の根を粉にし白湯でのむ。

◇クログワイの球根を煮てたべる。(圖二〇・一七五)

◇ハクセンの根を煎じてのむ。(圖四・三二)

■植物の説明 ハクセン(芸香料) 歐洲原産の多年生草本で、稍々灌木状をしてゐる。花は白色で香氣をもつてゐる。葉には小點がある。

◇ヤナギの木の幹を粉とし白湯でのむ。

◇鯨の味噌汁を食べる。

◇鐵の粉(鋸のひき屑など)を布の袋に入れ、甘酒の中へ入れて煎じてのむ。

三ワイル氏病 本病は急性熱傳染性黄疸ともいふ病氣で、十五歳乃至三十五歳位の男子に多く、屢々夏季に流行することがある。

この病氣の發るときは何の變りはなく、突然にサムケがして震へ出し、急に熱が高くなり、同時に頭痛、眩暈がし體がだるく、胸が悪くなり、嘔吐、下痢をし、二三日後には脚及び腰の筋肉が痛み、遂にはウト／＼し始めるなど、チブスの症狀に似てゐる處があるが、チブス以上急に來るものである。

發病後三日或は四日になると黄疸となり、その黄疸は急に悪くなる。然しそうなると初めの熱は下るが、尙十日乃至十四日位は續きながらだん／＼消えて行くものである。

この病氣には別に治療藥として適當な藥はないが何にせよこの病氣にかつたら直ちに醫師に見てもらつて治療を受けることを御す、めする。

四膽石症

膽囊に膽石といふ一種の石が出来、それがたゞ病氣が起るので、やはり黄疸となることもある。膽石の生ずる原因は未だ不明だが、老人、女子等常に座業に従事して運動不足の人、酒類殊にビールを多く飲む人、肉及び脂肪の多い食物を澤山にたべる人に出來る。

この病氣は突然急に心窩及び右の肋骨の下に劇しい痛みを發し、患者は苦しいから或は右側に臥し、或は俯屈するもので、これを膽石痛といふが、だん／＼肝臓が大きくなり、又嘔吐を催ふし、食欲はへり、頭痛がし、熱は四十度以上に達することがある。そして多くは發病後二十四時間を経て黄疸を起すものである。

◇カルルス泉鹽を毎食前にのむとよい。

◇梅干の大きいのなら一つ、中位なら二つに、おろし生姜を梅干の三分一、砂糖小匙で一杯、醬油少々を、飯茶碗に入れて上から熱い番茶を注いで、それをのむ。まだ飲み足りぬ様な氣がしたら又注いでのんでもよい。番茶はホウする方がよい。

第十一節 横隔膜の疾患

一吃逆 この病は腹と胸との間にある横隔膜といふものが、痙攣を起すによつて出るので、一寸したはづみで出るものはヂキに治るものだが、病的に來るものは、その原因として、胃

腸病、子宮病、ヒステリー、流行性寒胃、肺病の末期等から起るものである。

◇簡単なものは指で舌をつまんで引つばると治る。

◇子供のシャクリの出るのは多く胃腸病が原因をするのだから、胃（心窩ちの所）部へ芥子泥を塗ると大抵は止る。

◇マツ直に立つて先づ右の手をカ一パイ握りしめ、そのまゝ、静に上へ上げて脇腹を伸す様にし、ダン／＼静に下し、今度は左の手を右と同様に上下すると治る。

◇濃い食鹽水をコップに一杯グツと一いきに飲む。

◇鼻の孔をふさぎ、茶碗で水か湯を一杯一息に飲む。

◇舌の先を丸めて、息をつかずにその丸めた舌を呑み込む様にするとすぐ治る。

◇いろ／＼な手當をしても仲々治らぬ時は柿の蒂（これは新しいのでも古いのでもよい。古いのなら何時でも柿の木の下へ行つて見ると必ず一つや二つは枝に残つて居る）を三つ四つ採つて煎じてのめば、如何に長いシャクリでも必ず治ること不思議な様である。

第十二節 腹膜の疾患

一腹水 これは腸満といつて腹の中に液體の溜る病氣である。その原因によつて病名も異つて

る。即ち心臓、肺臓等の病から全静脈の血圧が亢進するか、肝臓の諸病から來るもので、之れを鬱血性腹水といつてゐる。

又急性及慢性の腹膜炎諸病から來る、之れを欣衝性腹水といひ。或は腎臓炎その他衰弱を來す諸病に發することがある、それを惡液質又は腎臓炎腹水といつてゐる。

この様に色々種類があるから、腹に溜る液は、その性質、その色等が異つてゐるものである。澤山水がたまると身體の位置をかへても、カバ／＼とアチコチへ動く、そして皮膚は甚しく緊張し、蒼白くなつて光澤がある様になる。軽い内は別項利尿劑を飲めば治るが、澤山に溜つて藥の効能がなくなつたら醫師にのみ穿腹術といつて腹に器械を挿し込んで水を取つてもろうより仕方がない。

二腹膜炎 この病氣は或る微菌が腹腔内に侵入するがために發するもので、その原因、その経過等中々複雑なものであるが、要するに突發的に腹が膨れて激しく痛み、熱が急に高くなり、心臓が衰弱する。こんな症狀があつたら、大急ぎで醫師に見てもらつて入院治療を受けなければならぬ。手遅れになると取返しつかない。

慢性的に來るのは腹は膨れるが激しい痛みがない。そして原因は結核から來るのであるから急に如何といふことはないが中に治り悪く、長くかゝるものである。

脾胃といふ小供の病氣も腹膜炎のことである。

◇生みたての卵をよく洗つて水氣をふき取り、コップに入れ、その上から米で作つた（外のはだめ）上等の酢をドツブリ漬け、一日乃至一日半位おくと殻が軟くなるから、その殻を箸で破つて中味を酢とかき混ぜ、之れを一日分として三度に飲む。五六個のむうちに治る。
◇鮎の肉をスリつぶし、それを布に包んで強く搾ると汁が出る。その汁を二三回飲むと治る。

第三編 呼吸器の疾患

第一節 鼻腔の疾患

鼻の病もその種類が澤山にあるもので、中には脳神経に關係するものなどもあつて油斷が出来ないものである。急性鼻加答兒、慢性鼻加答兒、鼻茸、肥厚性鼻炎、萎縮性鼻炎、衄血、鼻黴毒等その他にも色々あるが、六ヶ敷いものは専門醫に治療を請ふとし、左に一般家庭で出来る治療法を記して置かう。

一急性鼻加答兒 俗に鼻カゼといふ病である。この病は別に之れといふたいした病氣もないのに始終鼻のつまりる人がある。之れは便秘してゐる人、常に俯いてゐる人、刺戟性の食物を好

く人、運動不足の人、神経質の人、炬燵にもぐり込んでゐる人、房事過度の人などに多いから之れ等の原因となる病や、癖を治すが先づ第一の治療法である。小學兒童などで鼻の呼吸が妨げられるため口を開いていきをしたり、夢を見たり、鼾をかいたりするのは腺様増殖症（アデノイドともいふ）或は咽腔扁桃腺増大症といふ病氣で、何れも精神散慢性、記憶減退等の状態となり、學校の成績等が悪くなる。それ計りでなく餘病の出る心配があるから専門醫にかけるがよい。

又乳呑兒が前記の病氣にか、つて鼻がつまり、乳を呑むのに困難の場合は醫者に見てもらふのは勿論だが、無理に乳首を含ませずに、乳を茶碗に搾つて匙で少しづつ、飲ませる。

◇右述べた原因で鼻がつまりたり、鼻聲になつたりした時は、頭を水で洗つても一時治るもの。◇キキヨウの根の上皮を剥ぎ取り、米のとき水に一夜浸し、翌日陽に干したものを貯へ置き、入用の時煎じ出した汁を飲めば鼻つまりが治る。

◇ナツメとカンゾウとを等分に細かく切つたものを煎じ出して飲む。

◇寝る時硼酸軟膏を脱脂綿につけて鼻の孔につめて置くか、よく塗つて置くといふ。

◇鼻カゼは温かくして寝てゐれば大抵は治るが、若し熱があつたら熱さまし（ネツの部に記載）を飲む。尙カゼ（感冒）の項の薬を用ゆるがよい。

ニ鼻水が出る時 これも急性鼻カタルの一つであるが、こんな時は鹽に微温湯をとり、鼻孔からその湯を吸ひ込んで口から呼くことを數回くり返せば治る。

參鼻カゼの豫防 鼻カゼをひかぬ用心には「アンモニア」水を小さい瓶に入れて座右におき時々その匂ひをかいておれば、奇妙にひかぬ計りでなく、既にひきかけたのも、治つてしまふ。

四鼻汁が臭い 鼻汁が臭いのは、鼻腔に痲皮が出来、それが臭氣を發するので、十五才から二十二三才の婦人に多い病氣である。

◇百倍の食鹽水で鼻孔を洗ふとよい。
◇硼酸軟膏を脱脂綿で鼻の孔につめて置くか、或は塗つて置くとよい。
◇ゴマノハグサの根、葉の陰干しにしたものを粉末にして鼻の中の傷に塗りつけておくとよくなる。

(圖一〇・八六)
五鼻茸 上等な麝香を鼻茸のある鼻の孔に入れて置く。然く餘り多く入れると逆上することがある。こうして置けば段々に小さくなつて遂には消えてしまふ。

六衄血 突然に衄血が出たら紙や綿をつめるより指で鼻を押へて居る方がよい。軽いのはそのうちに止る。

◇食鹽を鼻の孔に入れて上向いて居る。止つたら清水で洗ふとさつぱりとする。

◇ニラの葉を揉んで、その汁を鼻の孔へつめる。(圖一一・二〇二)

◇センキユウの根を煎じてその汁をつける。(圖五・四三)

◇ダイコンおろしを茶碗に二三杯作り、これを布に包んで後頭部に載せて置くのもよい。

◇ハスの根のおろし汁をつける。

◇ウドン粉二勺位を清水一合に溶し、二三回飲むと衄血癖のついたのが根切になつてしまふ。

七鼻に何かはいつたら 他の一方の鼻の孔に紙捻をさしこんでクシャミをさせると出る。

それでも出なかつたら専門醫に頼むこと。

八鼻が赤い 鼻の赤い人はカサモ子の根を煎じて飲む。度々のむ内に治る。(圖一四・二二二)

九蕃膿症 ドクダミ二十匁を五合の水で四合に煎じつめ、一日三回に飲む。(家庭療病寶鑑、圖六・五一)

第二節 喉頭の疾患

一急性喉頭加答兒 この病の起る原因は感冒で、喉頭部が變になり、カユカつたり、頻りに咳嗽が出る。

二慢性喉頭加答兒 これは急性から移つて來るものと、始めから徐々に慢性となることがある。

る。これも急性と同じく咳嗽が烈しく出て、聲音に變化を來すことがあるが。急性の様に著しくない。

◇サルビアの乾燥せる新葉五グラムを約十倍の熱湯に浸出し、含嗽をすると咽喉炎、喉頭炎を治す(圖三四・三〇〇)

右は何れも患部を安静にすることが尤も必要であるが、一方長話をし、唱歌、喫煙、飲酒を禁じ、薬用としては、後に記述せる呼吸器疾患の一般豫防法と、咳嗽の項に記した薬を用ふるがよい。

第三節 氣管及氣管枝の疾患

一 氣管枝加答兒

これは多く感冒より來るものだが、又ゴミを吸ひ込んだり、有毒瓦斯を吸ひ入したり、その他體質の關係等より來ることもある。初めは大氣管枝といつて、太い氣管を犯し、通常發熱し、小兒では三十九度以上の熱を發することがある。それから咳嗽が出る。その時胸の骨が痛み、聲音はカレ、往々痰に血が混じつたり、嘔いたりすることがある。

大い氣管枝加答兒がだん／＼進むと、小氣管枝に移るものだが、小供や老人は初めからこの病にかゝることがある。又かゝり安い計りでなく氣管枝肺炎を續發することがある。

急性が進むと慢性氣管枝加答兒になるが、之れになると熱がなく、咳嗽、喀痰、呼吸困難で

殊に咳嗽が朝夕に劇しく、且つ氣候の變り目及び寒さの氣節になると殊に甚だしいものである。よく老人が朝夕咳嗽が出て困るなど、いふのはこの慢性氣管枝加答兒で、要するに急性にかゝつたとき完全に治しきらなかつたため、年寄りになつてから難義するのである。よく年を取ると咳嗽が出ると平氣で居るものがあるが、之れは病的で出るので、決して健康な體といへないのだから、何れかの機會にジヤマをするものである。

どの病氣でもそうであるが、急性の時に充分に治すことが、將來のため安全な方法である。殊に氣管枝病など、いふ病氣は打捨つておくと遂にはイマワしい病氣になることもあるから、それと氣付いたら一刻も早く後に記した咳嗽の薬のみ、同時に胸に濕布をするがよい。決して手遅れせぬ様、若し醫者を頼むとしても、夫れまでの間この手當をしておいて決して差支へない。若し手遅れしたり、醫師の來るのが遅かつたりすると肺炎に變ずる心配がある。

二 氣管枝狭搾

この病氣は氣管枝が狭くなる病氣で、原因は悪性の腫物が出来るか、淋巴腺が腫れたためか、心臓の病氣からか、微毒性のため氣管枝壁性の狭搾から來る等がある。

この病氣にかゝると呼吸が困難となる。殊に吸ひ込む息が苦しく、同時に吸ふ息が長くなり呼吸、吸氣共に緩徐となる。

これも醫師に見てもらつて、適當の治療を受けるより外仕方がない。